

---

# 東方死神録

首凝り

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方死神録

### 【Nコード】

N9245S

### 【作者名】

首凝り

### 【あらすじ】

死んだ訳でもなく、テンプレの如くトラックに轢かれそうな子供を救おうとした訳でもないのに、起きていきなりペルソナのタナトスになって、東方の世界にとばされた元人間の多分チートで、最強なくだらないお話

※基本的に作者の気分&駄文&ネタ&自己満足で出来ておりますので、気に入らなければ申し訳ありません

**転生……だと良いなあ…（前書き）**

初めまして、万年下痢の首凝りというものです

この作品にはキャラ崩壊や他の作品のネタが入っています

特にタナトスのイメージを崩したくないという人は戻ることをオススメします

別にいいという人は是非暇潰しにでも読んでください  
よろしく願いいたします

転生……だと良いなあ……

……

目を開けるとそこは森の中だった……

木漏れ日が優しく俺を照らし、風が葉っぱをなびかせ辺り一面が静まりかえる……

……いきなり現実逃避は無いな……

……というか！！シリアスに何故しようとしたし俺！！話すこと無くて困るわ！！……

……ゲフンゲフン……あー、あー、聞こえてる？……まあいいか……えっといきなりなんですが……俺……

転生？……しました？

はいそこ黄色い救急車を呼ばない…

まあ気持ちは分かるよ？

だっていきなり転生？しました？って言っても地味に疑問文だから自分でもよく分かっていねえじゃんって言いたくも成るよねえゝ

あ、でも一つだけ本当のことがある…それは…

ペルソナのタナトスに転生しました

そこまた救急車呼ぶな！！

でもこれはれっきとした現実であるよー？

目覚ましたらなんか森の中だったから散策してたら、あれ？少し視線が高くなあい？思った結果、まさかこれは！！テンプレか！！みたいなことが頭の隅っこに思い付いてとりあえず近くにあった水溜まりで自分を見たら見事にタナトスだったという訳

嘘じゃないよ？本当だよ？まあいいか：

いつまでも虚空とお喋りしている訳にはいかないからな

それじゃ！！散策再開！！

あ、言い忘れてたけど、腰にはタナトスの刀と後ろには鎖で繋がった棺桶もしっかりちゃっかり付いていました

よくよく考えたらタナトスの足で普通に歩けたことにびっくりした  
だってタナトスの足ピンとまっすぐに伸びてるから足首無いように  
見えるもん！！

んなこたあ置いといて：

今地味にピンチです：これが現実逃避の原因である：

何故かって？だってさあ：目の前に赤と青で構成された俺達の世代  
から百年ぐらいたてば流行るような服を着た女性がこっちに向かっ  
て弓を向けてるもん：

まあこの人が永琳ということはすぐにわかりましたが：

っべー：目がすっげえ怖い：ぞくぞくする W W W W W W

…あ、でもこの硬直状態どうしょ…

転生……だと良いなあ…（後書き）

どうでしたか？

初心者なので色々手間取りましたがこれからゆっくりしっかりと書いていくつもりです

なにか間違いなどがあれば教えてください m ( m





死神との出逢い…

—永琳 side—

…私はあんなおぞましい物を見たことが無い…素直にそう思った…

あいつをはじめ見つけた時はキョロキョロしていて何だか馬鹿みた  
いなやつだなと思った

…けど、同時に「あいつには絶対近づいてはいけない!!」「やつ  
に近づいたら確実に死ぬ」という絶対的な死を感じた…

生物としての絶対的恐怖…そんなものを感じたのだろう…

…だが更に私はこんなことも思った…

調べたい…

あいつから来る絶対的な死の原因を調べたい…

あいつから来る絶対的な恐怖の原因を調べたい！

あいつの生物のようで無機質のその身体を調べたい！！妖怪とも違うあいつの身体を調べたい！！！！

あいつの様々なことを調べたい…と素直に思った…

それは一研究者としての性なのか、それとも人としての死に対する好奇心なのかは分からない…

でも一つ分かった…あいつを調べることは私にとってとても重要なことだということを…

…まだやつはきよろきよろしていて、草むらの私に気付いてない

「…チャンスは…今!!」

私はそのまま草むらから飛び出しやつに弓をむける!!  
やつは驚いたように身体を身構えると私の方をじっと見つめる

目があると思われるところには何も無く、黒い穴がぽっかりと空いていた

だが、その虚無のような黒い穴は、私をしっかり捕らえていた…

正面に回ってから気が付いたがやつの腰には1m半ほどある刀を携えていた

…非常にやばい…背中の棺桶らしい物のせいで、やつが武器を持つてることに気が付けばもう少し慎重に動いてた

…私がやつとの遭遇したため非常に興奮していた為に慎重さが抜けていたのかもしれない

…どうする…このままでは危険だ…一旦逃げるか…?  
だがある意味想定外のことが起こった…

「あ…弓を向けるの止めてもらえませんか?俺も何もしないんで…」

やつは話かけてきたのだ…

確かに妖怪でも話せるやつがいるが大抵の奴等は人間の話など聞くはずが無い：

でもこいつは人間の私に対して腰を低くして要求してきたのだ：

私は思わず

「あなた：妖怪？なのに変わっているわね？」

と、言ってしまった

それに対してやつは：

「ははは：よく友達に言われてました：」

そんな感じのすつとんきような言葉を返してくれた：今はやつに友達がいるかどうかは置いといて：

やつの要求を飲むか考える：

だが一つ気になるところを質問しておきたい

「あなたは妖怪？それとも霊的な存在？もしくは九十九神的な存在？」それに対してやつは：

「えっくと：ですね：多分九十九神的な存在？だと思いますはい：」

やはりか：確かに妖怪独特の妖力は感じなかったけど：人間の霊力的な感じもなぜかした：

だが…純粹な死なんて普通感じる物じゃない…こいつは一体なんなんだ…

「えっ…と…そろそろ弓をおろしてくれませんか？」

「ああ…ごめんなさい…」

…！！しまった！？考え事をしてたせいで！！  
来る！！

とつさに攻撃から身構えるように後ろに跳ぶ

………

………あら？…攻撃が…来ない…？

やつは一向に攻撃を仕掛けない…それどころか…

「ああ…マジびっくりしたあ…心臓にわりいよ…」  
…心底落ち着いていた…

ほんと何なんだろう…

更にやつはあろうことに…

「えっ…と…とりあえず…俺の名前はタナトスと言います…以後お見知りおきを…？」

なぜか疑問詞で自己紹介をしてくれた…

……彼はとりあえず友好的なのは分かった…

「貴女は…？」

…と更に続ける彼

これは言うしか無いわね…

「私は八意永琳。よろしく？」

さて彼はどう出るかしら…

「あ、はい…永琳さんですね…」

……普通……

すると彼はまた

「……いきなりですけど…あの…俺ってどう見えます…？」

…よく分かんないことを聞いてきた…

どういふことかしら…名前を覚えているから記憶喪失というわけではないみたいだけど…

「えっ…と…何だか死神っぽい感じがするわね…」

「ん…：やっぱりかあ…」

なぜか私の言葉に頷いてた…

「あなたは私に攻撃を仕掛けないの？」

とりあえず気になったことを聞いてみる

「はい？なんで攻撃をしなければいけないんですか？」

……はあ……

「本当にあなた変わっているわね？…普通攻撃されそうになったらしないの？」

「ああ…そういうこと…いやあ…話して解決できると思いましたからねえ」

…驚いた…

彼は身体は異形の怪物だけど心は人間にとっても近いみたいで話で解決するという和睦的解決方法をとった

…面白い…

どんどん彼に興味が沸いてくる…

彼を調べたい…

それなら彼を私達人間の住む街に誘った方が早い…  
一か八か誘ってみてみようかしら…？

「あなたここに住んでるの？」

意味はないと思うが、聞いてみる

「あ、いえ、住んでませんというか家が無いんで…」  
「やっぱり…」

「そう…なら私の街に来ない？」

「どう出るかしら…」

「いいんスカ？着いてっても？」

「ええ…いいわよ？」

「マジッスカ！！それならお願いします！！」

「よし！！やった！！これで彼を調べれるわ！！…ふふふ…」

「あの…何笑ってんスカ…？」

「…はっ！！うっかり…」

「あ、ごめんなさい気になさらないで♪」

「はあ…？」

「それじゃ着いて来て」



「あ、はい分かりました」

ふふふ…これから楽しくなりそうだわ…ふふふ…

## 死神との出逢い…（後書き）

どうでしたか？

私は疲れました…

とにかく楽しんでもらえれば幸いです!!  
ありがとうございました!!

## 研究ってなんだろうね？（前書き）

他の作者の人達はどのようにしてあんなに書けるのでしょうか…

## 研究ってなんだろうね？

どうも！！タナトスです！！

お元気でしたか？

え！？前の名前が気になる？もう人間じゃないから転生記念に捨てましたよ！！（ナンダソレエー

…ゲフン！！えゝ今は永琳さんの街に来てます！！

感想…

っべー…なんだこの未来都市…俺の住んでた所ビミョーな田舎だから無駄に交通量が多かったんだよなあ…

んなあこたあどうでも良い…

…ほんとなにこれ…ビルでかッ！！スゲー！！！色々看板とか浮いてる！！！うおお！！こっちにはj（ry

…はしゃぎ過ぎた…

実は永琳がいなければ確実に取り押さえられています…

…実際街に入る時も囲まれたし…

すげえ見られてるよ…ヤメローミルナー

「着いたわよ」

お、着いたみたい

…なんすかこれ

「…でかいツスね…」

目の前にあるのすげえでかいビルなんですけど…

「まあ住んでるのは屋上の所なんだけどね」

「はあ…十分ですよ…」

ビルに入ってみる…

「お帰りなさいませ」

「うおっ!!なんだこれ!!ロボットか!?!」

「そうよ警備ロボ、あ、彼は客人だから」

「かしこまりました」

「さ、行きましょ」

「あ、ちょ!?!待ってください!!」

屋上まではエレベーターに乗るのだが…棺桶が乗る時つかえたのは秘密だ…

永琳の家は屋上にまんま和式の家が置いたみたいな家だった…

それなら普通に家建てるよ…

まあいいけど…

…で、今は向かいあっています…なんか話があるらしい…

「実はね…あなたに興味をもってるの」

はい!?! いきなりなんすか!?! その告白みたいな発言!?! ちょ!?!?  
えっ!?! マジで!?! うわあ…どうしょ…告白されたのはじめてだからどう反応すれば良いかわからない!! と、とりあえずこういう時は…ぶつぶつ…

「あ、もちろん研究対象としてよ?」

…デスヨネー…

はあ…まあそうだろうと思ったよ…

でもなんで俺なんだ？  
聞いてみよう…

「なんで俺なんすか？」

「あなたがついていないと思うけど、あなたから【死】そのものが感じるのよそれも純粹な【死】がね…

あ、なるほど…だから見ていた人たちで怯えてた人もいれば、好奇心の目で見てた人もいたのか、あの人達は俺から出てた【死】そのものを感じていたのかな？なるほどなるほど…

なんだかなあ…

「あ、だからそれを調べる為に連れて来たんすか？」  
「そうよ、わかってるじゃない」

ほうほう…

「ちょ！？待って下さいよ！？まさか俺を色々実験台として使うつもりなんですか！？」  
さすがにこれはやばあいから机に前のめりになる

「駄目かしら？」

…どうしよ…折角原作キャラの永琳と会えたのにここではない！！お

別れー！！は遠慮したい…

その前に疑問に思ったことを聞いてみよう

「その間俺はどこに暮らせば良いんですか？」

「それなら観察の為に私の家に住んでもらうわ」

…え？…マジで？

「良いんスカ！！」「構わないわよ？」

即答ですか…

「その代わりちゃんと、実験台になってね♪」

どうしよ…ほんとどうしよ！！永琳ほどの美人と二人屋根の下で実験台になるだけで暮らせるなんてマジでどうしよ！！上手くいけば永琳とキャハハ♪ウフフ♪の生活が出来るかもしれない！！

…これは可能性にかけてみようか…うゝん…



よし!!

「わかりました!! 良いでしょう!!」

「そ、ありがと♪これからよろしくね?」

「はい!! よろしく願います!!」

これから永琳との生活が始まる…かなり不安だが…

まあ…その不安はだいたい当たるが…

**研究ってなんだろうね？（後書き）**

どうでしたか？

次回は技をどうこうするつもりですが棺桶を色々するつもりです  
まあ俺得小説なので：

止めても無駄であります！！

**能力説明っぽいもの…（前書き）**

とりあえず頭の片隅のあった物の一部をぶっこんでみました…まだ  
増えるかもしれませんが、生温かい目で見てください…m  
m  
〔

能力説明っぽいもの…

永琳の家に住んでから一年たった…

うん！！おいしい展開を求めてた俺が馬鹿だった！！

…orz

まあ…予想してたけど…

ちよつとだけ風呂覗きに行ったら殺気と一緒に、どっから取り出したのか分からないけど矢を大量に飛んできましたよ…

怖いッス…永琳…むっちゃ怖いッス…

だからそれ以来やめました…

それだけなら俺に非があるからまだ良いのだが、更に永琳に実験やら色々やばいことをさせられました…

はじめはよくわからん薬を身体に注入させられました…

最初の内は他の化学者達もなにも言わずにじっと見ていただけだったが、回数を増やすごとに待機していた部屋の近くの壁から…

「ダメです！！あの薬はまだ実験中なんですよ！！」  
やら…

「それは流石に危険です！！やめてください！！彼がどうなっても良いんですか！！」とかの叫び声に似た声が聞こえるようになりました…

この時は、流石に俺大丈夫かな…って思ったよ…

結局全部やったけど…

その次は身体能力を調べるとかなんとかで、自分の二、三倍あるような妖怪とか戦闘に特化したロボとかと武器無しで素手で戦わせられました…

戦いとかしたことない元高校生が普通いきなり「お前、戦え」って言われても無理な話だから流石にやめてくれ！！って、土下座で頼みましたよ…

タナトスが土下座って…シニール…

んなことは置いて…すげえイラッとした顔をされたあと、結局永琳に戦いの基本とか色々と教えてもらいました

結局のところ妖怪と戦わされましたが…

というかほぼ毎日戦わされてます…

永琳さんかというと上の安全な部屋からこちらを見ているだけ…

うわぁ：闘犬とかこんな気分なんだなって思ったよ：

まあ：そのおかげでなんか持ってた霊力が格段に増えたけど

元人間だったから霊力があつたのかな：

ちなみに魔力もあるそうでこっちも戦ったことによって増えました

経験値でも貰ってるのかね？まあ：こっちの方が都合が良いけど：

その他には、色々と身体の一部を採取されたりもしました：

あれ？これってもしかして不死の薬の出来る原因とかにならないよね：

気にしたら負けだ気にしたら負けだ気にしt（ry

オホン！！…結局のところ色々と強くなりました！！  
終わり！！

すいません…終わってません…ほんとすいません…

更に能力もあることがわかりました！！

発表します！！俺の能力はあ…！！

【死を司る程度の能力】

……（；^ω^）……？



あれ？かぶってない…？  
ちよっと違うけどかぶってない！？ちよ！？えっ！？マジで！？あ  
の大食いの幽霊さんとかぶってない！？司るってなにさ！？あれか  
！？タナトスって魂を運んだりするからか！？でもかぶるのはどう  
かと思うよおおお！？

…ふう…

まあ…なんやかんやありましたがこの能力ちゃんと使えます

なんかこの能力は生き物じゃなくても物にも使えるようで、機械に  
使うと時をはやめたように錆び始め機械としての能力を失い最終的  
には、完全に機能なくなり、ある意味生き物の死に近い状態にな  
りました

あ、でもこの能力を使うことで錆びない、壊れない、ずっと使える、  
の三拍子の機械を作ることが出来ました  
おかげで研究者の人や整備の人にとっても感謝されました…感謝され  
るって嬉しいね！！

普通にこの能力を生き物に使えば何もしない内に一瞬で死にました

ちょっと大量の妖怪と戦う機会があった時にやってみたら一瞬で音も立てず妖怪達が倒れていきましたよ…

流石にぽかーん…って感じの顔になったことがわかった…タナトスに表情とか関係ないと思うけど…

ちなみにペルソナの技が使えるかというところには使えました

とりあえず、マハムドオンを試してみたら一瞬で死ぬものではなくて、地面に出ている魔方阵みたいなのの上にいるやつは体力やらを徐々に奪って死に至らすんだか卑怯臭い技だった…

ブレイブザッパーとかもなぜか燕返しみたいになってたが出来ました…

これブレイブザッパーか？

まあいいや…そんなこんなで俺の一年間が過ぎました…



**能力説明っぽいもの…(後書き)**

棺桶って武器に使えると思いませんか？ぶっといレーザー撃つときの触媒とか、どうですか？

子供は好きですか？ (改) (前書き)

すいません…

勝手ながら少し不自然な所がありましたので話を少し編集し直しました…

本当にすいません…

子供は好きですか？（改）

…俺は、今非常に困ってるいる…

何故かって？それはね…目の前に血まみれの女の子が倒れているからです…

どうしよ…

…発端は永琳の頼まれごとを受けたことから始まる…

――しばし回想――

「ねえ？タナトス、頼みごとがあるの、聞いてくれるかしら？」  
永琳が炒飯を旨そうにほうばりながら二人で向かい合い、んなことを言っていくる

…永琳がこう聞く時は、絶対に言うことを聞けってことである…

あと、炒飯なのは昼ご飯の時間だからです…：ちなみに俺はありません…だって口無いもん…

「…へいへい、分かりましたよ…何でしょうか？」…そして俺は逆らえずに素直に言うことを聞く…だって永琳怒ると怖いからさあ…

「ありがと♪…実はこの近くの森に強い妖力を持った妖怪が現れたらしいの…知ってる？」

あゝ…たしか、なんか研究者の人がなんか森に強い妖力を持つ妖怪が住み着いたらしいって言ってたな…

「んまあ…知ってるけど？」とりあえず、反応する

「知ってるなら話が早いわ、頼みことって言うのは、その妖怪を倒して欲しいの頼んで良いかしら？」  
永琳がニコニコしながら聞いてくれる…

拒否権は無いんですねわかります…

「はぁ…分かりました…」

しょうがないから受けることを承諾する…

…本当にしょうがないことだから受けたのよ！！べ、別にあの笑顔が怖くて受けた訳ではないんだからね！！…

「実はね…これは結構大切なことなのよ…」

んなことを考えていたらなんか永琳はいつもより険しい顔をしていた…

え？シリアスとか無理なんすけどwwwwwwww

「どうして？」

表面上は、とりあえず繕って聞いてみる

「あの妖怪が来た方向から、物凄い量の妖力をリーダーで感知したの…流石に私達にもどうにも出来ない数の妖怪達のね…」永琳は炒飯を食うのを止めて神妙な顔つきで言うてくる…

「？…ちょっと待て、その事と今回のことがどう関係してるんだ？」  
たしかに妖怪が集まっているのは危険だ…だからって関係性は薄い



と思うのだが…

「実は…その大量の妖怪達がここに向かっているのよ…」

な、なんだってー!?

マジかよ!?! 本当に大変なことじゃないか!?! このまま街に妖怪達が一斉に来たらこの街は絶対に壊滅する!!!!!!

「どうして妖怪達が俺たちの街の場所がわかったんだ!?!」

ちなみにこの街のは、隠す程度の能力を持つやつがいるらしくそいつの能力を永琳が作った装置で強くし、街を囲むように発動しているらしい…それによって外の妖怪達から街を隠している、と永琳が言っていました

「たぶん…この街を囲ってる能力を見破る能力を持つやつがいるのだと思うの…」

「成る程…だから強い妖怪に今街に襲って来られたら対策に時間がかかってしまう…という訳だな…?」

「そうなのよ…だからそのまずは先に住み着いた妖怪を倒して欲しいの……」

これは本当に不味い…

妖怪達がここに向かって来ているのに、更に強い妖怪が街をが襲って来られたら対策に手間取ってしまう…

これはやるしかないな…

「わかった、やろう…」

「感謝するわ…作戦は明日に決行する予定よ…頼んだわよ…」

俺は永琳の言葉に対して強く頷く…

―次の日―

「相手のことはいまいちわかってないわ…でもなにがなんでもそいつを倒しなさい…か…」

今俺は街から出て北側にある森の中を歩いてる…

ミッションはこの森に住み着いた妖怪を倒すこと…

…ん？ちよつと待て…こんな重大な任務を俺に託すってことは、永琳は俺のことを信頼してくれてるかな…？

…でも今はそんなこと考えてる場合でひまではない…

「見つけた…」

目の前には強い妖気を放つ妖怪がいる…

…永琳が言ってたのはこいつのことだろう…

あいつが殺ったのだろうか回りには妖怪の血や肉塊が食い散らかしたように転がっている…

奴は興奮しているようで息を荒くしてこちらをじっと見てくる…

外見はトカゲのようだが人のように足で立って、手は鋭い爪を持っている…あの爪は危険だな…

ガオアアアアアア！！！！

奴は突然悲鳴をあげてこっちに突進して来る！！

奴は鋭い爪を持った手を俺に向けて大きく振りおろす！！

だが俺は振りおろすと同時に避ける！！

「チッ…思ったより速いな…だがブレイブザッパー！！」

俺は後ろに跳び、着地と同時にブレイブザッパーを放つ！！

奴もとっさに避けるよう上に跳ぶ！！

とっさのことにより少し大きく跳び跳ねてしまったようだ

…チャンス…!!

「今だ!! マハムドオン!!」

俺は奴が地面に着く前にマハムドオンを着地する場所に発動する

奴は着地すると同時に膝を地面につけた…体力をすぐに奪っていくのだから無理もない…

奴はこちらを焦ったような表情を見せながら睨むような目で見てくる…

俺は奴の目の前に立ち、言う…

「安心しろ、いつまでもそんなことをさせるつもりは無い…一瞬で殺してやる…」

俺は背中の棺桶の先を奴に向けると同時に棺桶の先に魔力を溜める更に、口?の目の前にも魔力を溜める

「…一瞬で死ぬ…」

溜めた魔力を一気に放つ！！  
ドオオオオオオン！！

棺桶からの放たれた八本のレーザーと口？から放たれた太いレーザーが轟音をたてて奴を包みこむ：

「ふう：成功したな：」

奴はあの一撃で完全に消し去ったようだ：

「意外にあっさり倒せたな：」

ちなみにこの技は棺桶を操れると気が付いた時に思い付いた技だ

少しマスパや、ベク〇ーキャノンを懂れて、カッ！！となってやっ  
てしまいました：

反省はするつもりも無いし、後悔もしてない！！

「さて…帰るか……ん？」

…生気を感じる…まだ生きていた奴が居たようだ…

「いた…」

案の定、傷だらけで倒れて呻いている赤毛の女の子がいた…少しだが妖力があるところから生まれてそんなにたっていない妖怪のようだ…

「どうしようか…とりあえずなんとかしよう…」

「うーん…流石に完治はしないな…ここに置いとく訳にもいかないし…どうしよう…」

致命傷になる傷は能力で完全に無くすことが出来るのだが、致命傷にならない傷は治せないのである

どうしよ…

そして物語は冒頭に繋がる訳である…

もうしゅうがない！！連れて帰ろう！！

決してこの娘が可愛いなあとか思ったからとかでは無いぞ！！…このままでは血の臭いを嗅ぎ付けた他の妖怪の餌食になってしまう訳であるからしてだな…

「もういいや…永琳になんか言われても大丈夫だろ…」

そう言って、俺はこの娘を抱えて森を後にしたのであった…





子供は好きですか？ (改) (後書き)

あと一話書いたら少し説明の回にしたいと思います…

本当にすいません…

**別れ…それと色々(前書き)**

第6話です

とりあえず一言

作者のネーミングセンスは0よ!!

以上です…

ほんと0よ…

## 別れ…それと色々

えゝ…今は永琳の研究所で永琳と向かい合っています

前の時よりなにやら大切なことのようにで、とかげみたいな妖怪を倒して帰って来たすぐに連行されました…  
前より険しい顔でありますはい…

「で、今度はなんのようだ…?」

まあ見当はついてるけどなゝ

「ええ、実は月に移住することになったのよ…」

やっぱり来たか…

でも驚かなければなんか言われそうだしなあゝ  
とりあえず…

「なんの冗談だ永琳…冗談はその服のセンスだけにしろ」

ビキビキ（＃＾ω＾）

「あ、すまん口が滑った…なんだその弓は？ちょｗｗｗｗなに向けてるんだｗｗｗｗｗｗそこまで怒るこゝアッー！ー！！  
（ぴちゅーん）

「ふう…随分落ち着いているわね、移住するのよ、しかも月に…」

「まあな…」

そして軽く針ネズミ状態でも普通に立ち上がる俺

「そう…街の上層部が決めたことなんだけど、奴等が来るのにおよそ一週間かかるわ…その一週間の内になんとかして月に向かうロケットを作るのよ…」

流石永琳一週間でロケットを作るとかマジっべー、本当っべー

「ふうん…そーなのかー」

「なんかふざけてない？」

「いやいや!! しっかり聞いてますとも!!」

「はあ…まあいいわ…その間あなたに実験等ないからね」

「おほ!!! マジで!?! やった!?! 了解しやした!?!」  
全俺歓喜の瞬間!!

嬉しくて涙出てくる…出ないけど…

だってさあ…マッドドクターの実験なんて受けたくないでしょ誰だ  
ってS「なんか変なこと考えてなかった?」「イイエイツマセン  
ヨー…」

…しばし沈黙…

「そんなことはあとにして、この子どうするの?」永琳の指をさ  
す所には赤毛の女の子をベッドで寝かせてある

「いや…怪我してたし、あそこに置いてったら食われるかと思っ  
たからさあ…」

「でもあの子妖怪よ？上層部にばれたらどうするのよ？」

あゝ…確かにめんどくさくなるなあゝ…どうしようか…あ…良い  
こと思い付いた！

「永琳のコネでどうかしてくれへん？」

「だったら、いままでの検査もとい実験を更に増やしても良いかし  
ら？」

とニコニコ顔で言う永琳さん

そう来ますか永琳さん…

まあ…俺が頼んだことだからなあ…しょうがないか…

「わかった…」

「わかったわ、ありがと♪」更に笑顔の永琳さん  
わあゝあの笑顔が憎たらしッ！！

「ううん…」

「あら？あの子起きそうよ」

「……ここは……どこ……？」

おお起きたな

「よお大丈夫か？」

まずは軽くあいさつ

「ヒッ！！あ！あ！」

ボタン！！

驚かれた上にベッドから落ちちゃったよこの子……

うーん……怖がらせないようにしたんだけどなあ……

やっぱこの顔かなあ……

「おーい大丈夫かあ……？」

そんなことを思いながら更にアタックをかける

「や、やめて……来ないで……！」 震えながらも必死に逃げようとする

……orz

露骨に怖がられると流石に傷つくわ……俺泣いても良いですか……泣けないけど……！！



「あなたが出るとびっくりするわよ…」

そんなことを言いながらorzをしている俺の前に出てくる永琳さん……流石に慰めてくれて下さいよお…

「嫌よ」

速答といふかなぜわかったし!?

「雰囲気でなんとなくわかるわよ」

そうですか…俺って顔に出るのかなあ…? あり得ないと思うけど…

「ごめんなさいね、驚かせちゃって悪気はないのよ彼はね」

と彼女と目線を合わせるために目の前に座る永琳

「ひっ!!」

「大丈夫…もう大丈夫だから…」

「あ…」

永琳はそっと彼女の手を持つ…

そして永琳は俺には見せないような優しい笑顔を向ける

なんだかなあ…俺の立場ってなんだろうなあ…

「あ…あの…」

「ああ、ごめんなさい、私の名前は八意永琳、よろしくね…そしてこっちのはタナトスよ、こいつがあなたを助けてくれたのよ」

「え…そうなのですか？」

「ええ、そうよ…ところであなた、名前は？」

「あ、はい…私は樺憫かみんといいます」

「寝るのが好きなんだな…」

「？…特に好きという訳ではありませんよ？」

「あ、気にしないで、なんでもないからね」

うーん…見かけは十二才ぐらいに見えるのに意外にしっかりしてるなあ…

「で、あなたはその後どうするのかしら？」

「え？…どうすると言われても…」

「この街はね、今は大量の妖怪達が向かって来てるの、このまま森に戻るとあなたも被害を受けるかもしれないわ…どうする？この街にいた方が安全だけど森に戻る？」

「…この街にいても良いんですか？…私は妖怪ですよ？」

「実際に後ろにいるこいつも妖怪みたいなものだし、そもそもこいつがここに運んで来たしね」

「ちょ！？俺に責任転嫁してないか！？」

「実際にあなたのせいなんだけどなあ…」

「はははあ…そうでしたねえ…」

笑顔で怒る永琳から全力で目を背ける…むっちゃ怖い…

「ふふっ…面白いですね」

「「……」」

心を開いてくれたのかな？

「はあ…で、どうするの？」

「あ、はい、ここに暮らしても良いですか？」

「おk!!! 今日から家族だ!!!」

「面倒はあなたがみるのよ」

「え？なんで？」

「この子は誰が連れてきたのかなあ…？」

「はははあ…そうだねえ…」今日の永琳さんはほんと絶好調みたいだねえ…痛い!!! 痛い!!! 指変な方向に曲げないで!!! マジ痛いから!!!」

「ふふふっ♪」

…ということでも新しく家族が増えました

キングクリムゾン!!

一週間後!!

え? 四話の時に使っとけ? んなこたあ知らんな!!

まあ…あれから色々ありましたが今はロケット内で待機中です

今街の外には数えきれない妖怪達が迫っています…

奴等の声が街の中心部に届くほどってどんだけだよ…

「…こわい……」

樺憫ちゃんが腰を放さまいと握ってくる…誰だって怖いはずだから  
な…

「大丈夫さ…怖がることはないよ…」

落ち着かせる為に頭を撫でる…

「…ん……」

少し落ち着いたようで気持ちいいのか目を細める…

「タナトス!! 樺憫ちゃん!!」

「永琳!!」 「永琳さん!!」

永琳は最後のロケットの調整に出てた為に少し遅れて乗ったのだ

「大丈夫だったか!？」

「ええ…大丈夫よ…でも…」 永琳は非常にばつが悪そうな顔をしていた…

「…でも…? どうかしたのか!？」

「実は…奴等が街に入り込んだんだけどこのロケットが飛び立つ前にここに来てしまうかもしれないの…」

「なんだと!?! どうするんだ!?!」

「今上層部が殲滅部隊を送ったけど、なんの時間稼ぎにもならないわ…」

…ヤバイな…

このままでは逃げるところの話じゃない…

やるしかないな……

「わかった…俺が行く…」

「なに言ってるの!? 無理よ!! あなたでも!!」

永琳はいつもじゃ考えられない顔で怒ってきた…  
だが俺も怯む訳にはいかない…

「なあに、ちょっと時間稼ぎするだけさ」

「駄目よ!! そんなことはさせないわ!!」

「すまない…行かせてくれ…」

「…どうして…なの…」

永琳はどこか悲しく顔うつむかせしていた…

「俺はただ単にお前達を守りたいんだ…今まで共に過ごしてきたお前達を…だからさ…男として女を守るくらいさしてくれよ?」

「……そう…わかったわ…でも…これだけは守って………絶対に死なないでよ…」

「ああ…わかってるさ…」

「一緒に逃げないんですか…?」

まだ腰から離れてなかったのね…樺憫ちゃん…

樺憫ちゃんを放して向き合うように座る

「ああ…すまないな…お前達を守る為なんだ…」

「……………」

必死に涙を堪えようとする樺憫ちゃん

「そうだ…ちょっと待ってろ…（ぼん！）ほら…」

渡したのは魔力で作ったタナトスの人形

ちよつと魔力の練習をした時に出来るようになったのだ

「これがあれば寂しくないだろう？」

ちよつと大きめだったのか抱き抱えるように人形を持つ

「…うん…」

「良い子だ…」

本当に良い子だよ…この子は…

最後に樺憫ちゃんの頭を撫でてあげる…

「いつか会えるさ……………永琳…」

「なに…？」

「色々ありがとな…んじゃな…」

俺は永琳たちの顔を見ないようにその場をあとにした…

「さて…どうするかな…」

いつもたくさんの光りがあつた街は今はとても暗く、無機質さだけが取り残されていた…

「うわぁ…最後尾が見えねぇ…どんだけいるんだよ」目の前には大量の妖怪達がわらわらという

「時間を稼ぐつつたけどこりゃ…多すぎるなあ…」

多いのもあるのだが、かなりの大きさのあるやつもいる

「よし…これで行こう…ブレイブザッパー!!」

ブレイブザッパーをやつらに適当に放つ

やつら俺に気がついたのか次々と襲ってきた

「行くぞ!!」



俺も奴等の真ん中に飛び込む

「ほらほら！？ かってこいよ！！」

奴等は次々と襲ってくるが俺の能力によって妖怪達は俺に飛び掛かってくる前いきなり電池が切れたオモチャのように死んでいく…

なんとかして奴等の気を逸らさなければ駄目だ…  
更に大きな声を出して妖怪達の気を逸らす

ゴオオオオオオオオ！！

飛び立ったか！？ よし！！  
なんとか時間を稼げたな……………さて…どうする…？

完全に囲まれてしまったようだ…

グオオ…ガアア…

「あゝあゝ…そんなに怒っちゃやだよ？」

ガオアアアアアア！！

一斉に飛掛かってくる妖怪達

「クソッ！！キリがない！！」

疲れはしないのだが、数が多すぎる……かなりやつかいだ……

どうする………仕方ない………やったことが試してみるか………

「すうう…」

息を吸って心を落ち着かせる……

そして……

カツ！！

[illegible]

今宵は満月……異形の者が今はもうここにいない者達の為に一人で妖怪達と戦い続けていた……その姿はいつものどこかすっとぼけた彼の姿はなく、奴等の死に飢えた、ただの化け物になっていた……

「……ハッ!?……ここは………そうか成功したのか……」身体を起こして辺りを見る……

ちなみにさっきやったのは精神の強制暴走化だ

このタナトスはペルソナに出てくるものだから、ペルソナの暴走化のようなことが出来るかなあと思ったからやってみたが……少しやり過ぎたかな……?

事実辺りには妖怪達のスプラッタな大量の死体と倒れてたり穴が空いたビルや、粉々に粉碎されたコンクリート片だけになっていた……

「……こりゃ…やり過ぎだな……」

馴染みのあった街の姿はもう無く、ただの廃墟だけになっていた…

『おい？大丈夫かい？』

「だ、誰だ！！どこにいる！？」妙に頭に響いて聞こえる声に構える

『あゝ…そんなに警戒しなくても危害は加えないからさあ安心して  
』

なんだこいつ…すげえイラってくるぞ…

「お前は誰だ！？さっさと姿見せいやあ！！」

『姿はめんどくさいから見せないけど、一応この世界の神でーす』

……はぁ？

テンプレですわわかります…

「で、その神がなんでしようか？」

神らしいのでとりあえず敬語で話す

『あら？随分落ち着いてるじゃない？』

「びっくりしてもしようがないですからね…あとその話し方、カマ  
つばいからやめろ」

『ほいほーいで、君に伝えたいことがあるんだ』

「伝えたいこと？」

なんだろうか？もしかして違う世界の人間だったから消されるとか  
だったらヤバイ！？」

『そんなんじゃないから』

「即答ですか：ちゃんと心読んでるし：」

『まあまあいいじゃないか：で、伝えたいことなんだけど君の能力  
が変化したようだよ』

「え！？マジ！？」

『マジマジ、たしか能力は【生と死を司る程度の能力】だよ』

「……生がついただけ？」

『そうだね、でも凄い能力なんだよ？自分の思ったあらゆるものを  
【生】で生み出し、自分が思ったあらゆるものを【死】で消すこと  
ができるんだよ、簡単に言ったら前までは死だけだったけど生で何  
かを生み出すことが出来るようになった訳だ』

なにそれチートワロス：

『そりゃ驚くよね：あとこの能力は君という人間の魂が身体に定  
着し人間の【生】に触れたことによってできたみたい、今ならいろ  
んな物を生み出せるよ』

「ん？：ちょっと待って下さい：人間ってどうして知ってるんです

か？」

まあ神だから当たり前か：『そりゃ君：面白そうだったから、ボクが君を憑依させたからだよ』

こいつのせいだよ！！でも：

「マジで！？ありがとうございます！！」

『おうふ：感謝されるとは思わなかったよ：』

いや～：チートオリ主原作ブレイクものは好きだったからねえ～  
色々読み漁ってたなあ：

『そ、そうなんだ：まあ：こっちの方が都合がいいけど：』

「で、伝えたいことはそれだけですか？」

『ううん、もうないよ』

「そうですか、ありがとうございます  
とりあえず一礼

『言うことといえば、君は死神なんだけど、特に仕事とかなないからさ、適当に過ごしてくれていいから、なにしようがなにを犯そうが君の勝手にしな』

「分かりました」

『うんじゃねえ～ばいびー』 そんな軽いテンションで神からの通信  
っぽいものは終わった

「……良いのかなあ……これで……まあ……悩んでもしょうがないか……」

そんなこんなで俺は廃墟になってしまった街をあとにした……

## 別れ…それと色々（後書き）

次は主人公と樺憫の設定を載せます

あとタナトス擬人化のデザインリクエストあれば受け付けます…

作者にはセンスの欠片もくそもありませんから…



## ―キャラ設定―（前書き）

一回途中まで書いたやつが全部ぱあになりました…

とりあえず、頭の中にあるやつを突っ込んでおきましたのでおかしいと思うことがあれば言って下さい

## ―キャラ設定―

### ―主人公―

名前タナトス（現在）

彼はもともと生粋のオタクで友達とそれなりに充実した高校生活をおくっていた高校生だったが、神のおもしろ半分によって、神自身がつくった神に憑依させられた。

人間だったころの名前は彼いわく、どうせだからということで記念に（記念？）そこら辺に捨てたらしい：

### ―能力―

【生と死を司る程度の能力】

操るのではなく、司っている為に生と死は彼そのものである。

死の能力を使えば、自分の任意の範囲内の生物が勝手に死んでいき、生の能力では様々な物を生み出すことができる。

他にも生と死に関係することは大抵のことができる。

### ―種族―

神（死神）

小町のような魂を運ぶ死神ではなく、その上司に値する地位を持つ

死神らしいが特に仕事とかが無く、する事が無いため基本暇…

とりあえずは魔力や霊力を使っているが、基本能力で神力でも妖力でも生み出せるのであんまり意味が無いらしい…

武器には、タナトスの刀を使い、魔力などの力を使う時には棺桶を媒体に使い、砲台に見立てて使う。

ちなみに永琳のおかげで素手でも戦うこともそれなりにできる。

性格は少し押しに弱く、気分で行動することが多いが基本面倒見はいい方。

永琳が月に行くためのロケットを作っている時には、樺憫を街に色々と連れて行って一緒に遊んでいたらしい

―オリキャラ―

名前  
かみん  
樺憫

―種族―

妖怪

妖怪と言っても人をただ驚かしたりするが好きな妖怪らしく、おとなしめの妖怪である。

森の中で倒れてたのは、トカゲのような妖怪に一方的にやられたからである

格好は少し大きめの真っ赤な着物に真っ赤な髪を背中の中辺りまで伸ばしている

全身真っ赤。

タナトスから貰ったタナトスの人形をいつも持っていて、背負っていたりする

見た目は十二才くらい

――能力――

【?????】

（実はまだ決まっていないというのは秘密だ…）

性格は少しおとなしめで礼儀正しいが、頑張り屋

タナトスのことは父親のように慕っていて、永琳も母親のように慕っている。

出会ってばかりの時はタナトスの外見によくびびっていたが、遊んでいるうちに馴れてきたらしい

今回はこれ以上です

## ―キャラ設定―（後書き）

まあ…こんな感じですよ…

次は本編ですが、キングクリムゾンしようかなあど少し思っています

樺憫の能力どうしよっかなあ…

無理には言いませんがリクエストがあれば言って下さい！！！！

いつでも歓迎します！！！！

／す、諏訪子だー!?!／（前書き）

今回は短いです

どのキャラが出るか題名でバレバレですね W W W W W

…これからはもっと時間をかけてじっくり書いていこうかな…

／す、諏訪子だー！？／

どうも／（へωへ）お元気でしたか？皆大好きタナトスでえす！！  
え？そこまで好きじゃない？…またまた／照れちゃってえ／……

……ゲフン！！ええ／…話はかわりますが永琳たちが月に行ってから一億ぐらい過ぎました……あれ？二億だっけ？……そもそも本当に一億だったっけ？

…まあいいか♪

とりあえずまあ、なが／い時が過ぎたと思ってくだせえ…

で、今は旅の傍ら原作キャラを探しています



たしか今は時代的に日本が魏とか言われてた時代かな？そもそも魏だっけ？…まあそれは置いて…その時代辺りなら神奈子とか諏訪子とかがいるかな？…って思ったしついでにあの戦争がある筈だよなあ……そうだ！参加しよう！と、そんな軽い気持ちで諏訪神社に向かっています

…ん？そんな軽い気持ちで大丈夫か？だって？

…ちよつと古くないそのネタ…

…まあ大丈夫だな、あれから何千年、何万年たったから昔と比べて魔力、さらに霊力、ついでに妖力が格段に増えたからな！！

…でも神力はさっぱり増えないんだよなあ……やっぱあれか！！信仰が必要なんか！？…まあ神力が無くても大丈夫だけどなwwww

あ、着いたみたい……行くとき思ったけど神力放ち過ぎだろ…まあこの方が妖怪は寄り付かないけどさ……ちよつとむずむずする…  
あ、普通の妖怪やそこら辺の神だったら神社に入ることもしないから

んじゃとりあえずお参りしとこ……ちなみに他の人達に俺の姿は  
見えてないから、能力で気配を消してるわけなんだけど、ほら隠れ  
る時に気配を殺すとか言うじゃない、だから死の能力を使って気配  
その物を殺したってわけ、わかった？え？意味不明？デスヨネー…

「ちょっとあんた誰？」

電波を受信してたら誰かに話しかけられたようだ…あれ？能力は？

「能力切れてるよ…」

あれ？電波受信してたせいかな…今度からは気を付けよとりあえず  
礼を言わなければ…

「あ、ホントだ、いや…教えてくれてありが…と……」

「ん？どうかした？」

目玉のついた大きな帽子をかぶり見た目は十才かそこのロリコン  
が騒ぎそうな幼女…そうですね諏訪子ですねありがとうございました

「いや、なんでもない…」

ここここここ落ちて着かなければ！！ふ、二人目の原作キャラだからと言って興奮するなよ俺！！あえてクールになれ俺！！

「で、あなたは誰よ？」

シャベッタアアア！！諏訪子がシャベッタアアアアア！！！！！！  
おおおお落ち着け俺！！冷静に対処するんだ俺！！

「俺はタナトスつつうもんだ、とりあえず死神をしちよる」

「タ、タナトス！？あの死神のタナトスう！！？」

二回も言わなくても大丈夫ですから：

言い忘れてたけど俺は神の中でもかなり名を知られてるらしい：原因は俺をタナトスに憑依させたあの神せいだ：なんでも人間を憑依させたのもあるが、更に昔の妖怪達との戦いであまりにも凶暴過ぎたために神達を作ったあの神自身が止めに行ったかららしい：まあ強制的な暴走状態だったから記憶にないので凶暴も糞も知らないけどね：

「そうですけど：ってそんなにも怯えなくてもいいから：

神社の柱にガクブルしながら隠れる諏訪子

はあ：流石に怯えすぎでしょ：あれ？なにこのデジャヴ？

これでは話がつかないな…

「おーい…神の威厳も糞もないぞー…」

「ハッ！？そ、そうよ！私はあの恐ろしい祟り神なのよ！？ミヤシヤグジ様なんだからこ、こんなところで怯えてちゃ駄目よ！！」

恐ろしいかは置いといて戻ったようだな…

「で、そそそその死神さんはなんのよう？」

しっかり震えてるよ諏訪子さん…ギリ神としての威厳が諏訪子を支えてるって感じかな…すげえ脆そう…

「ああ…最近ここの神社が有名だからちょっとお参りにね♪」

「そ、そうなんだ…なんか大変なことだと思った…：良かったあ…：へなへな」と座り込む諏訪子

大変なことねえ…

「でも最近色々ともっと大変なことになりそうなんだろ？」

「…よくわかったわね…そうよもうすぐここは戦場になる…神々の戦いのね…」それから諏訪子は黙ってしまった…

…沈黙だな……チャンスっちゃチャンスかな？

なら…

「一緒に戦おうか？」

「えっ！？いいの！？」

すげえ早さで立ち直ったなおい…

「いや、相手はあの八坂神奈子だからちょっと戦力が不安だったのよ。でもあの死神がいればこっちは百人力よ！！…あ、神だから百柱力かな…？」

飛び回って喜ぶ諏訪子さん…可愛いッス……

………言つとくが俺はロリコン（ry

まあ上手く誘導できたな…これで神奈子とのエンカウントも取れるな！！いよし！！

心の中でガッツポーズ…

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね！私の名前は守矢諏訪子、よろしくね？」

諏訪子はそう言って手を出してきた

…ああ…握手ね…しゃがんだ方がいいかな…

「ああ、よろしく…」

そして俺たちはしっかりと握手を交わした

あ、戦争の作戦なんも考えてね…

／す、諏訪子だー！？／（後書き）

守矢諏訪子ってこっちの守でいいでしたっけ？

こっちの洩はあとになるの筈でしたから

諏訪子さんの口調わかんねえ…

## 決戦前夜…（前書き）

どうしても短くなってしまふ…

とりあえず書いたので見ていって下さい



## 決戦前夜…

諏訪神社に来てから二週間ほどたった…

諏訪神社では特にすることがなく、ごろごろしていたらいつのまにか決戦前夜になってしまった

それで俺はその夜本殿から綺麗な満月を眺めていた…

「なあにやってんのー？」と、そんなかるーいノリで一升瓶を持った諏訪子が聞いてきた

…明日戦いなんだぞ…酒飲んで大丈夫かよ…

「大丈夫！大丈夫！少しだけだからさ！」  
地味に俺の心を読みながら隣に座ってきた

「どう？飲む？」諏訪子は一升瓶を持ち上げて聞いてくる  
というか今の時代一升瓶なんてないだろ…

「あー…俺は無理だわ…」

「む…私のお酒を飲まないっていうの！？」

ドンッ！と床に一升瓶を置く諏訪子。

顔も少し赤く、少し酔ってるみたいでおっさんみたいなことを言ってきた…

「いや…俺、口無いから」

「あ……なんかごめん…」

「まあいいさ、俺は月で十分だしな」

「そっか…」

しばし沈黙が包みこむ…

「ほんと綺麗な月だねえ…」

そう言いながら酒を煽る諏訪子：だから明日はt（ry

「ああ：だな：あいつらを思いだすよ…」

「あいつら？」

「俺の友達つつうかまあ友達こと」あまり友達って感じではないな  
…特に永琳とか…

「なんで月見て思い出すの？月のうさぎさんでも友達なの？」

「いいや：月に移住したからだよ、あいつら元気にやってるかなあ  
…」

まあ：あいつらなら元気そうだけどな…：樺憫どうしてるかねえ：

「ふうりん：ゴクゴク…：ぷはあ！…：まああんたも元気なんだから  
その月の友達も元気にやってるって！！ケロケロケロツ！！」

ばしばし！！と背中を叩いて変な笑い方をする酔いどれ諏訪子さん

笑いながら背中叩くとかもうおっさんだよ…：とかそういうの神  
奈子さんのキャラじゃね？

「くつくつく…：まあ：そうだな」

と、苦笑しながら返したら諏訪子さんはなぜかじつと睨み付けてき  
た…

なんで？

「…あ、ごめん、なんかさタナトスって顔無いけど表情がよく出るよね？」

は？

顔無いのに表情が出るってなにそれ怖い…

「えーっとね…なんだかよくわかんないけど、雰囲気が出てるんだよ。雰囲気が」

「雰囲気ねえ……」

雰囲気ってなんだよ…

「そうそう…ゴクツ…ふい…」

「流石にもうやめとけ…」

ひょいっと一升瓶を諏訪子から取り上げる

「あっ！私のお酒がっ！！…あうー……」

「ほーら子どもはさっさと寝た寝た！！」

「子ども扱いされた！？」

「ほらさっさと行った行った！！」

「あうー…わかったわよ…もう寝る…」

子供みたいにむすつとした顔でとぼとぼ歩いてく諏訪子…

……可愛いなあ……まあ事実何十年生きようと俺にとってはまだ子供同然だしな

「…さて、俺はもう少し眺めてることにしますかあ…」

その夜俺は少し懐かしい気持ちになって夜風を感じながら満月をじっと眺めて過ごした…

—諏訪子side—

ほんとあいつは考えが顔によくでる  
あ、と言っても顔があるわけじゃないよ？ 雰囲気さ雰囲気

あいつは楽しい時には声を出して笑ってなくても微笑んでるような感じがする

人間だったというのもあるかもしれないが

でも今日はあいつの、タナトスのいつもと違う表情を感じた…

そうあれは、寂しさ…

悲しさと寂しさを感じた…

タナトスはじっと月を眺めながら

「あいつらのことを思い出すよ…」と言った

この時タナトスはなにかを思い出すようにしていたが寂しそうだった  
いいや…寂しそうではなくて本当に寂しがっていたかもしれない

私は彼の言う友達のこととは一切知らないし、こういう事情があつて  
月に移住したのも知らない

でもこれだけはわかる…

彼は友達と別れてから私に会うまで一人ぼっちだったということを…

彼は死神だ

しかも普通の死神とは違い死を操れるなんて言ったら普通のものなら近づかないだろう：

さらにあの姿だ

骸骨を思わせる顔に深い藍色の服のような姿

あんな人のようで全くかけ離れてる異形のもの友達になろうなんて思うやつはある意味馬鹿なのかもしれない

そうだったら私も馬鹿なのかもしれないね

でも何十年、何百年も一人ぼっちでいることは神でも相当辛いことだ：

兎は寂しいと死ぬ

別に月の兎と掛けてるわけではないが、寂しさで死ぬのは兎だけではない

そうやって生きてきた彼の気持ちは少なからずはわかる

私も崇り神だ

そんな崇り神の頂点に立つ私に自分から友達になろうとするやつは

一人も居なかった

でも私には人間たちの信仰というものがあつた  
人に恐れられ、崇められてたから人は自然と周りにはいた  
だから自分は一人ぼっちではないとずっと思っていたが彼にあつた  
ことでそれはたんなる嘘っぱちだったことに気がついた：

彼とあつた時、彼には私と同じ物を感じた

まあ同時に恐怖心も感じていたが：

一人ぼっちということを感じた

明日は戦争だ：でもそこで死ぬわけにはいかない



だって折角彼と友達になれたのだから…

— 諏訪子 side —

決戦前夜…（後書き）

タナトスを擬人化したいんですが服装がいまいち思い付きません…

私はアー○ードさんみたいなコートにライダースーツのようなピチツとした服に白めのブーツと長い手袋を想像しましたが、なんか微妙な気がする……

服装でリクエストを受けるのもし良ければ送って下さいm  
m  
〔

やっぱスーツを気崩したやつなんかも良いかな…

**決戦当日…（前書き）**

ちよつと主人公が鬼畜になってしまったかも…

そつとしておこう…

## 決戦当日…

ただ今、目の前には神奈子ひきいる神達がいま

正直言ってクソ多い…なんだよこの量…神ってこんなにいるのかあ  
？あ、聖獣とかも含まれるからか…

俺と諏訪子はその神達の軍勢のまん前に並んで立っている

いつか戦った妖怪達よりは少ないが一人一人力が強いのが断然わかる  
まあ俺にとってはあまり脅威にはならないのだが、問題はあの神奈  
子だ…神奈子の力を特に強く感じる…

俺はただの助っ人に過ぎないから実際に神奈子戦うのは諏訪子の方  
だろう…

しかし…この量だ…俺が他の神達をどうにかしなければ…

そんなことを考えていると背中に黒い翼の生えた男が前に出てきた

「私は神奈子様に仕えるヤタガラスです。どうぞお見知り置きを…」と、言ってペコリと頭を下げた後更に続けて言う

「実は少しお話があるのですが良いですか？」

あれか、まずは交渉でどうにかするってわけか？  
さあどうする諏訪子？

すると諏訪子は前に一歩出て話す

「：ヤタガラスが今更何のようだ、話など聞かぬぞ」うゝん：諏訪子がカリスマ性たっぷりでも一緒にいた俺には違和感が凄いな…

「貴女にも有益な話だと思うのですが良いのですか？」

やはり交渉か…まあ断ると思うけど

すると諏訪子は少し眉をひそめ言う

「どうせあんた等の仲間にでもなれって言うだろう？そもそもこの戦争を吹っ掛けて来たのはあんた等なんだからそんなのお断りよ！」

と、語気を強めながら覇気を飛ばす諏訪子  
覇気により少し空気が振動する

するとヤタガラスも覇気に圧倒されたのか少し身体を仰け反る

「！?…：…そうですか…分かりました：ならあなた方を今から敵としてみなします。良いでしょうか？」

「ああ構わないわよ、いつでもかかって来な！！」

「分かりました…行くぞ者共オ!!!」 オオオオオオオ!!!  
奴が鼓舞するかのように神達が吼えると同時に俺達に向かって走ってくる

「…そうこなくちな（ニヤリ）」俺は少し笑いながら言う

「んじゃあんたは目の前の奴等よろしく、私は大将さんと殺り合わないといけないからね」  
と言って俺の方を見る

「ああわかってる…それじゃ…行くぞオオオ!!!」

俺は刀を構え勢いよく神達に突っ込む!

「オラァ!!! ブレイブザッパァ!!!」 前方の奴等にブレイブザッパァを飛ばし奴等を薙ぎ払う!

更に俺は奴等の真ん中に飛び込み死の領域を広げる

神達はなす術もなく膝をつけて死んでいく…

それを見て奴等は少し攻撃をするのを躊躇しているようだ

「うろたえるな!!! 一定の距離から攻撃を食らわせばやつの死など恐れるに足らないわぁ!!!」  
と、言うと同時に大量の弾幕が飛んでくる

チツ：流石に俺の存在はばれていたか：

俺は大量の弾幕が飛んでくるが気にせずに進んで行く  
死の領域によって弾幕に当たる前に威力を殺すことによって弾幕に  
当たる前に消えてしまうから俺には効かないから気にせず突き進む  
ことができる

更に横から来る奴等はマハムドオンを使い足止めをする

：ああもう、うざったいな：いつそのこと飛ぶか

ビュウウウン！！

俺は上空に飛び神奈子の目の前に降りる

ザッ！！

すると神奈子に直々に仕えてる奴等かな？そいつ等が俺を囲む

「：少しあんた等の大将に話をさせてくれ」

「敵の話など聞かn「いいだろう！！なんの用件だ？今更仲間にな  
ると言っても遅いぞ？」：」

と言う神奈子さん

太っ腹でよかった：

「そんなことは言わないさ：ただ戦い方を変えたいだけだ」  
：さてこれから俺の正念場だ

「戦い方？どうする気だ？」ちゃんと聞いてくれるとはな…まあ有難いがな

「いやあなお互いの大将どうして戦ってほしいだが…いいか？」

「はじめ交渉を仕掛けたのは犠牲を最小限に防ぐ為なんだろう？やっついてなんだが俺だって殺すのは少し心苦しい…ということかどうか？」

すると腕を組みながら言ってきた

「確かに最小限に防ぎたかったのは言う通りだ、でも今更仲間を殺されて相手の条件をはいそですかって言うのは無理というがあるそれに今お前は私達に囲まれている…この好機を逃がす訳にはいかない…ふふ…どうする？タナトスよ？」ニヤリとほくそ笑む神奈子

「クク…あっはっはっはっはっ!!」

だが俺は声を上げて笑う

「なんだ？気が狂ったか？」周りの神達もざわつく…

「クックククツ…まあ確かに囲まれているがあいつ等は大事なことを忘れてるぞ？」



「なんだ苦し紛れに言い訳か？」

「いいやあんた等は大事なことを忘れてる、あんた等あそこで倒れてる仲間達のことを忘れてないか？クッククック…」

俺は倒れてる奴等の方に親指でクイクイっと指を指す

「ハッ！？も、もしかして！？」

「クッククック…そのもしかしてだ、あいつ等は俺の技によって力を奪い取られている…その気になればあいつ等の命なんて一瞬に…  
…なあ…？」

「クソッ！？卑怯だぞ！！」 険しい顔で睨む神奈子

よしこの調子だ…

「卑怯？この戦争はあんた等が仕掛けて来たんだぞ？それに迎え撃つ為の戦略の一つや二つぐらい良いじゃないか？なあ？」

「クソッ…承諾すれば命は取らないよな…？」

「ああ…良いだろう…交渉成立で良いんだな？」

辛そうな顔し、腕を組み考える

「……わかった承諾しよう…」

よし！上手くいった！

「…別にこの戦いを終わらせようとしてる訳ではないんだ、まだいい方だろう？」

「……………」

更に険しい顔で睨んでくる神奈子さん

あゝ…やりすぎたかな…まあしょうがないか…

「おおゝいタナトゝス成功したかあ？」

すると諏訪子が飛んできた

俺は諏訪子に返事をする

「ああ！成功したぞ！」

スタツ…

諏訪子は俺の前に降りて言う

「…でも全くあんたも酷いことするね…」

苦笑いをしているが目はちょっと笑ってないな…まあそうだろうけど…

「まあ作戦だ、作戦…で、神奈子さん決着を着けようじゃないか？」  
神奈子の方に振り向き聞く……まだ険しそうな顔してるな

「…わかった」

渋々という感じだな、わからなくもないけど

「ならついてきてくれ、今度は正々堂々やるから安心しな、あ、それに殺してしまった仲間達も能力で生き返らしといたからさ」

「!? 貴様始めからそのつもりだったのか!？」

神奈子はギョッと目を見開きこちらに叫ぶ

「さあな…」

俺は見向きもせずと言う

死神移動中…

「ほら!ここだ!戦い方は 大将の諏訪子と神奈子が対一の一切手出し無用の戦いを行う!これでいいか?」俺は諏訪子に聞く

「ああ…これでいいよ…あんたもいいかい？」  
と神奈子に聞く

という神奈子も

「ああ…文句はないよ、だから今すぐやろうじゃないか？」

「そうだね…タナトス！」  
いきなり俺に振ってきた！

「なんだ？遺言か？」  
俺もそれなりに反応する

「アホかお前！？冗談にならないから！？それ！！」それを聞いた  
諏訪子はぶんすか怒った

「冗談さ…：頑張れよ」

「…ああわかってるさ…」  
という神奈子前に立ち構える

「とりあえず聞くけど私が負ければこの場所に一切手を加えない、  
その代わり私が勝てば…わかってるね？」

「ああ…わかってるよ」

「んじゃ合図を頼むよ！」と神奈子も構える

俺はそこら辺にあった石を拾い、

「わかった、この石が地面に落ちたら開始だ！…おらっ！」  
と言って石を真上に投げる！！

ダッ！！

石が地面につくと同時に二人は勢いよく突っ込んだ！！

ガキン！！

神奈子の御柱と諏訪子の鉄の輪が勢いよくぶつかる！！

「流石崇り神の頂点に立つ者だな…でも負けないよ！！」

「こっちだって負ける訳にはいかないわよ！！」  
二人とも激しくつばぜり合う

こりや二日や三日ぐらい続くな…制限時間つければよかったかもな…

案の定戦いは三日三晩続いた…

俺は神奈子の部下とただ戦いを見つめてた…

そして…

戦いは諏訪子が途中で倒れたことで終わった…

「…あれ…？ 私は…？」

「起きたか？ よっと…」

俺は諏訪子を抱き抱える

「…どう…なったの…？」 少し辛そうな顔をして聞いてくる諏訪子…そりゃ三日も戦い続ければ当たり前か…

「ああ…神奈子勝ちで終わったよ…」

「…そっか…私…負けたんだね…神奈子」

「なんだい？ 約束は守ってもらうよ」

「…わかってるさ…潔くこの土地の信仰はあんたに受け渡すよ…」

悲しそうに言う諏訪子…

無理もないな…

でもそこ俺が言う！

「話してる途中で悪いのだがたぶんそれは無理だ」

諏訪子はギョッと驚き、神奈子も睨み付けてきた

「な、なにを言うの！？ 私達は負けたのよ！それでいいじゃない！」

「別に約束を破るとは言っていない、でもたぶん信仰は無理だと思うんだ」

「『どういうこと？』だ？」

と二人できょとんとした顔で聞いてくる

「考えてみるよ？いきなり神が変わって信仰しろなんて言ってもすぐに人々が聞いてくれると思うか？無理だろう？しかも諏訪子は言わずと知れた崇り神だ、そんないきなり信仰の対象を変えてしまっ  
ては崇り神の諏訪子に崇られてしまうかもしれないって人々は思う  
と思うんだ、だからこの地での神奈子の信仰は無理だと思うんだが  
…どうだ？」

「『……………』」

それを聞いた二人は黙り込んでしまった

「でも二人とも損をしない方法が一つだけある…」  
俺はピンつと指を立て言う

「『…言っておくれ』」

「えっとな…表上は諏訪子が祀られてることにして裏では神奈子が  
信仰を貰い働きかけるという方法なんだが…」

「私は良いと思うよ、それなら私にはなんも影響ないしさ」と諏訪

子が言う

「…私もそれで良いと思う…でも良いのか？信仰は諏訪子、あんたにいけないのだよ？」ちよつと心配そうに聞いてくる神奈子

友情フラグでも建ったかな？

「それなら新しい神としてここで私を含め祀られれば良いし、それが嫌なら半分ぐらい貰っても良いかい？」と諏訪子は冗談混じりで軽く返す

「フ…わかったよ…そうしようか」

「よし！決まり！！それじゃあ改めて私は洩矢諏訪子！これからよろしくね！！」

「なら私も改めて八坂神奈子だ！よろしく！」そして二人ともお互いにガッチリと手を握った…

俺空気だな…まあ新しい諏訪子と神奈子友情が出来たんだしまあいいか



そして改めて諏訪神社は洩矢の字を守矢に変え、八坂神奈子を加え  
新しい諏訪神社になった：

**決戦当日…（後書き）**

うーん…神奈子の口調がいまいちわからない…  
あと鉄の輪って名前ありましたっけ？

それは置いて…読んでいただきありがとうございました！！

宴会じゃーい!! (前書き)

少し遅れました

山田の口調がわからない…間違っていれば言ってお下さい…

宴会じゃーい!!

あー暇だ…あ、どうもタナトスです

ただいま諏訪神社にて、宴会が行われています

なんでも諏訪神社に神奈子が加わるということで諏訪子が宴会を提案したらしく神奈子とその部下、更にそのことを聞きつけたその他の神達が出来ました

そんでもって今は酒やら盃やらどぶくろやら一生瓶が飛び交い、酒臭い臭いを撒き散らしながら神達が肩を組んで歌い、笑いあっているような状況である

正直騒がしいったらありやしない

ちなみに一生瓶は俺の能力で作った物である

あれ？あそこにいるの秋姉妹じゃね？…酔って変なダンス踊ってるし絡むとめんどくさそうだから顔出すのはやめておこう……

あ、四季映姫もいるじゃないか、あとで顔出しとくか…

神奈子と、諏訪子は無礼講だかなんだか言って神達と相当な量の酒を飲んでるみたいだ

かという俺は、なにもせずに座ってるだけだ

なぜかって？

…口が無いのどうやって飲み食い出来るんだよおおおおお！！？

…ということでは、どうしようもなく隅っこでただぼーぜんと座っているのである

どおーせこんな宴会に不釣り合いな顔してる俺が居てもテンション下がるだけだしー？…どおーせ、どおーせ…

「ほれほれ…もっと飲め…!!」 「よっ!! 良い飲みっぷり!! そこに痺れる憧れるう…!!」

「あっはっはっはっ!! そうだろそうだろ!! あっはっはっはっ!!」

ああ、…：笑い声がうるさい…神奈子の酒の中にブレアズ・16ミリオン・リザーブ入れてこようかこんちきしょー!!

あ、ちなみにこのブレアズ・16ミリオン・リザーブっていう調味料だけど本当に、本当に危ない調味料だから友達に冗談でも絶対に勧めないで下さいね?

笑い事じゃすまないからいやマジで

というかこれ、そもそも売ってるのだろうか?

うん、気にしないでおこう

よし…行くか…

「お…い! タナトスう…!」 すると諏訪子が真っ赤な顔をして呼ん

できた

チツ：折角能力でブレアズ・16ミリオン・リザーブ作ったのに作戦の支障がががが：

「で、あんたなにこんな隅っこで何してんのおく？折角の宴会なんだからさあーぱっー！っと行こうじゃない！ぱっーっと！！？」

そんなことを言いながら諏訪子が隣に座る

酒くせえ：相当飲んでやがるなこいつ：

「だから：俺口無いから飲めねえって言ってるだろ：」

嫌がらせかこの宴会は嫌がらせか

その為の宴会なのかこれは

「あゝそういえばそうだったねゝあははは♪」

「うわすげえうざい：」

「まあまあ楽しもうじゃないか♪なあ？」

するといつのまにか現れた神奈子も一升瓶を煽りながら言ってきた

というか酒ってそんなに旨いのか？

事実、人間の頃は未成年だったし、子どもの頃にふざけて飲んだ記憶があっても味までは流石に覚えていない

「楽しめって言ってもなあ…」

あ、良いこと思いついた…♪

「そうだ、これあげるよ」

ブレアズ・16ミリオン・リザーブの瓶を神奈子投げる

「なんだこれは？」

「酒が旨くなる調味料だ。ほんの少しだけでも入れると酒が何倍も旨く代物だ。折角だから使いな、どうせ俺が持っても意味の無い物だからな」

さて…あとは食いつくかだけだ…

「お？そんなのがあるのかい！是非くれ！！」するとそれに興味を惹いたのか神奈子が目をキラキラさせ嬉しそうに言って食いついてきた

よし…今日は無礼講なんだからこれぐらいしてもバチは当たらない  
だろ…クツクツクツクツ…

「ああいいぞ。あ、ちょっと俺席外すわ」

神奈子が一生瓶にあれをちゃんと入れたか確かめると、素早く立ち上がり俺は席を外した



さっさと逃げよ W W W W

「さあゝて、旨くなったかなあゝ♪ゴクッ…ゴクッ…!!!!? ? ? が  
ああああああああああああああああああ!!!!」

「ちょ、ちよつとどうしたのよ!!!? 神奈子!? 神奈子おおおお  
!!! ?」

そんな断末魔を無視しながら俺はその場から逃げた  
宴会って楽しいもんだな♪

さて四季映姫とエンカウントでもとるか…

「あなたが四季映姫様でしょうか？」

ちびちびと酒を呑む四季映姫の隣に座る

もっとロリペドっぽいと思ってたけれど見た目は十六そこの女の

子のだった

「ええ、私が四季映姫・ヤマザナドゥですが、死神が何の用でしょうか？」

と言って少し睨んでくる山田

俺なにかしたっけ？

「いや死神の上位に値する四季映姫様に顔を出した方がよろしいかと思いましたので…」

ここは敬語で話した方が無難だな

「そう…」

と、またちびちびと酒を呑みながらそっぽを向く四季映姫さん…だからなんでえ…？

「あのー…なんで機嫌がそんなに悪そうなのでしょう…？」すると静かにコップを置くキツ！と言った感じでこっちを睨んできた

ちょっと怖いからその顔…

「貴方のせいでね部下の死神達が騒がしいのよ…なんであの死神だけ仕事がないんだ！？やら、あの死神だけずるいのやら、陳情が毎日毎日くるの…全く仕事があるのにそんなこと言ってる場合じゃない

いのよッ!！」

机にバンツと手を叩きつける山田

それに反応して周囲の神達が少し体をビクつかせる

ちよつと酒の勢いで語気が強くなってみたいだ

「あー：なんかすいません迷惑かけてしまつて…」

ここは、素直に謝る

謝らないとありがた〜い話を延々と二時間、三時間ぐらいされそうだからな…

「オホン：それで貴方に少し忠告しに来ました。今後このような目立ったことはしないでいただきたいんです。部下達が騒ぐので：よろしいでしょうか：？」

「そんなこと言われてもわからないしなあ…」

「さきほど断末魔が聞こえたようですが貴方のせい：ですよね？それを含め有り難い話（説教）をしてあげましゅうか？」

そう来るかあー：ありがた〜い話とやらも聞いてみたいが：うん、まあいいか。大きな出来事ことなんて当分ないと思うし

「わかりました、なるべく善処していくようにしますよ」

「感謝します…私は仕事があるのでこれで帰ります。それでは…」

と言うと山田は立ち上がってスタスタと歩いてどっかに行ってしまった…

というか、宴会に来たのってそれだけの目的だったのかよ…

…さて、それじゃあ、俺はなにしy「ふらあああ!!ふああほおふううう!!ほおへほはへのふえいふああほおお!!?ほおふおふああほおんはあああああ!!!!」

するとなんか変な奇声を上げ周りのモブ神達を巻き込みながら神奈子さんが御柱を両脇に抱え、襲って来た!!

他の神を巻き込むなよッ!?

あんたそれでも神だろ!!辛さぐらいなんとかしろ!!

「ヤバイっ!逃げなければっ!!加速装おおおおお置!!」

そんなこんなで楽しい時間は過ぎていった…

**宴会じゃーい!! (後書き)**

どうでしたか？今さらですがコンセプトは楽しくというのがモットーなので気に入らなければすいません：でもシリアスはちよくちよく入れていけるように善処して行こうと思います

ありがとうございました

**そうだ都に行こう（前書き）**

少し遅れてしまいました  
すいません…

短いですかどうぞ

そうだ都に行こう

あれから五百年ほどたった…

とりあえずこの五百年間何があったか報告しておこう

なんか巫女がいた方が神社っぽいというなんともまあしょうもない  
諏訪子の考えによりの東風谷の巫女の一族ができた

東風谷の一族ができた理由が適当すぎる…

だからそのことを諏訪子にちょっと説教しといた…

東風谷の一族よ…俺に出来ることはやっといたさ…

あとこの五百年間で神力が異様に増えた



知らないうちになぜかぐーんと増えていたからとりあえず神奈子辺りに問い詰めたら

「あー…なんでだろうねー…あははは…」

妙な反応をしやがる…

「神力が殖えるし別に良いんだが勝手に何をしたんだ？」  
俺が問う

「あー…あのね…諏訪子がさ、どうせだからタナトスもここに祀ろうぜ！…みたいノリでとなり小さめだけど社作っただよ…」

ははーん…やはり諏訪子のせいか…

「でも予想以上にお前を信仰するやつが多くてさ…」

神奈子の言うには神力が結構増えた理由はあの諏訪大戦で活躍したために更に名が知れ渡ったため一部の人達からは闘神みたいに崇められたりしているらしい…闘神ってなんだよ明王みたいなもんか？でも明王ほど乱暴じゃないと思うのだが…

「うそつけ…」

「む…なんか言ったか？」

「い、いや！なんでもない！」

…あと生を司る能力があるから医神みたいな扱いもされてるらしいと教えてくれた…

医神はちよつと無理あるんじゃない？……………

「とりあえず何かしらする時は言ってほしいのだが…」  
なんか喜んでいいのかよくわからない感じだ…

「あー…すまん…」苦笑をする神奈子さん  
苦笑したいのはこっちだ…

そのあと諏訪子は説教しといた

まあ軽くだけど…

諏訪神社では基本的にごろごろしていたが、周辺の妖怪退治などしていたから結構神力以外の能力も増えたりはした

あと暇だったから技を作ろうとして色々なことをしていたら死亡遊戯が出来るようになった…

…ゲームちげえよ…

確かに死がついているから出来るかもしれないけどよ…

しかもどれぐらいの威力があるのかなーって思ってちょっと本気でやったら前方にあった森の木がさっぱりと全部切れてしまった……これはやり過ぎた…

（。D。）↑たぶんこんな顔になってたね…わからんけど…

そのあと神奈子にたつぷりと説教させられたよ…

逆に説教させられるとはなんとも情けない…

まあこんな感じで五百年はあっというまに過ぎた…

んで今は東風谷の巫女さん諏訪子、神奈子にちょっと集まってもらっている

「で、要件とはなんだタナトス？」

と少し怪訝な感じで聞いてくる

そう怪訝になるほどじゃないと思うのだが：

「…ゲフン…まあ簡単に言よう俺旅に出るわ」

さてどんな反応をするのやら：

すると三人は少し顔を見合わせたあと：

「「「…ふうくん…」」」

って言った…ふうくんて…興味無しかよ！

すると神奈子が続けて言う「タナトス、お前がどこへ行こうが別に  
かまわないがとりあえず聞く、どこに行く気なんだい？」

あ？やっぱ心配してくれてんのか

「とりあえずは都に行こう思っているな」

「あー：なら尚更言わなければならぬな…」  
となんか呆れつつんなことを呟く神奈子

あれ？馬鹿にされてるのか？

「ん？何を言うんだ？」

とりあえず気になるからな

「あんたさ：その姿のまんま都に行く気？」

と横から諏訪子が言ってくる

あー：何が言いたいかわかった：

「わかったみたいだね：で、どうするんだい？」

「やっぱ人間の姿になるんか？」

「まあそれしか手はないだろうな…」

と呟く神奈子

「なら諏訪子教えてくれ」

と俺は諏訪子の方を見る

「なんで私！？…まあいいけど：…んじゃそこに座って…」

「おk」

諏訪子に言われた通りに座る

「んで目瞑って自分が人間というイメージをして…そうすればできるはずだから………たぶん」

たぶんですかい…諏訪子さん……

まあやってみる価値はあるな…

俺は座った状態から目を瞑り人間の身体をイメージする…

「「「おー!!?」」」

すると三人の声が聞こえてきた

あ?なに?もうできたの?早いな…

「なあもういいか?」

「ああ…大丈夫だよ」

俺は立ち上がり目を開け自分の姿を確かめる…

ふむ…時代にあわせて着物にしてみたがちょうどいいな…

能力で鏡を生み出し顔を見る

髪は黒色で少し短め、外見での年齢は二十、四、五歳ってところか…

…うん…まあ…予想通りかな…

「まあ色男だと思うけど…あんた目付き悪いね」

「一言余計だ…」

とりあえず人間の姿になって色々準備をしたあと諏訪子と言う

「んで、もう今日行くのかい？」

「ああ…今までありがとうな」

五百年間居座らしてもらったんだこれぐらいは言わないとな

「ありがとうなんていいよ照れ臭いじゃないか…またいつでも帰ってきていいからね！あんたは私の友達なんだから！」

と笑顔で言う諏訪子

なんか申し訳ないな…

諏訪神社の入り口に立って諏訪子達に言う  
「んじやいってきます!」

「」「いってらっしゃい!」「」

こうして俺はまた旅に出た

さてこんどは誰に会えるのだろうか…



## そうだ都に行こう（後書き）

とりあえず主人公擬人化？しました！

あと死亡遊戯は技のバラエティーを増やすためにできるようにしました

今後増えるかわかりませんこの小説を見て下さい m ( m

## キャラ設定追加（前書き）

とりあえず追加設定をまとめました…短いですが…

最近少し色々とありまして少し更新が遅れましたが、また前のペー  
スで更新出来そうです…（^▽^；）…

わかりませんが…

## キャラ設定追加

ただ今十二話の主人公の追加設定です…

―名前―

タナトス

―年齢―

たぶん一億から二億そこら

―性格―

最近落ち着ついてきたとのこと

原作キャラに会った時は興奮してしまいそうになるが一時的な物なためすぐに落ち着くらしい  
年の功というやつですかね？

―姿―

175から185ぐらいの長身

髪は黒で少し短めでシュツとしているが筋肉は適度についているらしい

顔はイケメンだが神奈子曰く目付きが悪いらしい

着物は黒っぽい紺色で腰には刀を差してあり棺桶と鎖は無くなって

いる

着物を着ているが本人は草履が苦手らしくなぜか着物の下には黒の革のズボンとブーツを履いている

―技―

今まで使ってた技にプラス死亡遊戯が追加

今まで戦闘で使わなかったが生を司る能力を使って武器など生み出したり、大量に棺桶を生み出して極太レーザーの弾幕なんてのもできるとなったらいい  
おお怖い怖いwwww

今まで出会ったキャラ

八意永琳

洩矢諏訪子

八坂神奈子

以上追加でした



## キャラ設定追加（後書き）

こんな感じですよ

なぜ普通の草履にできなかったのはタナトスは日本の神ではないのでどこか洋風ぽい所が欲しかったですし、タナトスはブーツのイメージがありましたので：作者の勝手ですいません：

なんとなく着物の下の服はバージルお兄さんコートの下服のイメージしています

それでは！

ちょー!? スキマはアッー! (前書き)

久々の投稿です

新しくゲームを買ったので浮かれてしまいました…

とにもかくにも新作です

ゆっくりしていいね!!!

**ちょー！？スキマはアッ！**

「ちょっと聞きたいことがあるのだけど、いいかしら？」

そんな感じで都に向かうためにぶらぶらと森の中を歩いていたら俺はいきなり後ろから女性の声で呼び掛けられた

：こんな夕時に女性がふらつくとは不謹慎というか危ないというか  
なんというか：

もしくは妖怪か：

ふむ：いや待てよ：そもそも今森の中だからとりあえず妖怪に会わないようにあえて少し多めに神力を放っているのにわざわざ妖怪かははいこんばんわみたいなのをする野郎などいるはずがいるか：？

いや：いないだろ：



「あの…いいかしら…」

おっと…というか俺はなんでこんなにも警戒してたいんだ？女性相手には紳士的に振るまうのが男性だというのに…待たせるとは全く情けない…

「はい、なんででしょう…：…か？」

俺はなるべく目付きの悪さをカバーするようにしながら後ろに振り向き言ったのだが…

「あら？いいかしら？」

いたのはくぱあ…とあいたスキマから上半身を出している艶かしさ漂うニコニコ顔の女性だった…

八雲紫でしたありがとうございます…

八雲紫か…

幻想郷を造りし妖怪の賢者か………なんだか原作が懐かしいな………

「どうしたのかしら？ 元人間のタナトスさん？」と胡散臭い笑い方をしながら聞いてくる八雲紫  
胡散臭さは昔からか…

そんなことは置いといて…

「どうしてそんなことまで俺を知っているんだ？ 妖怪には知られていないはずだが…」

実際俺は神達に色々なんか言われてたりしているが、妖怪や人間にはそう俺が神達に特例的存在みたいなこと言われてることは知られてない

だから実際神として知られていても真実は知られてないはずだ

ちなみに神達にはあの神を通して俺のことは知られている

「さあ？どうしてかしらね？」

……しらをきるつもりかい…

「俺のこの姿を見てタナトスかしら？って聞いてきたということはその能力で覗き見してた訳だな？」

まあゆかりんの能力的に色々和小耳に挟んだか興味本意で俺を調べたのだろう  
確かに人が神に神格化するのは聞くが神に憑依するのは珍しいこと限りなしだ

「どうせその能力を使って盗み聞きでもして聞いたんだろ？」

そんな風に少しニヒルっぽく言うと紫は顔をムツとしながら言ってきた

「初対面の女性に対してそんな言いぐさは無いと思うけど？」

「いや…事実だろ……」

「確かに色んなところから盗み聞きをしてきたのは事実だけど少し

ぐらい言い方があるんじゃない？」

手に持った扇子を口にあてておよろみたいな感じな仕草をするゆかりん

仕草が古臭い&胡散臭え：

え？なに？ここ俺が謝らなければならぬのか？

例え俺がフェミニストでもここで謝るのは絶対におかしいだろ：

「で、雑談はこれぐらいにしましょうか」

あ、あっちから切り上げてくれた

「今までののが前座というなら本題もちゃんとあるんだろ？」

「ええ、もちろんよ」

ふむ…どんな用だろうか：

「あなたは人間と妖怪と神の関係をどう思う？」

ふむ…難しいことを聞いてきたな…

俺は数分間、腕を組み考える

「俺は神に妖怪、更に人間の関係はもちずもたれずの関係だと思う  
すると紫は意外だと言わんばかりの顔をして更に聞いてくる

「…どういうことかしら？」

「まんまだ…妖怪、神、人間はいずれも欠けてはいけない存在だと思う…例えば妖怪が人間を襲い人間を全滅させたでしょう、そうすれば妖怪という存在は人間の恐怖や様々な感情からできた存在、だから人間がいなくなれば妖怪も共倒れで消えてしまうだろうな…まあ推測だけだな…それに神だって人間がいなくなれば信仰が無くなってしまう力を失いいずれ消えてしまうと思ってる…まあ簡単に言ったらこの三竦みを崩してはいけないと思ってる…まあこんなところだ俺の考えは」

紫は俺の顔を見ながら聞いていたが、顔が険しいものになっていた

「…なら…どうしたらその三竦みを崩さないようにできるかしら？」

…ふむ…

「あれだ…どの種族も友好関係を築けばいいと思う…まあできるか知らんけどな…」

更に紫の顔は険しいものになる…

「そうね…でも私はそんな世界を作りたいと思ってるの…」

…幻想郷のことだな…

「そうか…頑張れ」

すると紫は目を見開き驚いた表情をした

「…あなたは私の夢をバカにしないの？」

「ん？バカにしてほしいの？」

「い、いえ…結構よ…それにあなたにこんなことを聞いたのも私の夢の現実に手伝ってほしかったのもあるのよ」

幻想郷を作ることに参加できることは非常に嬉しいがどうして俺に？

「…どうして俺なんかに？」

「あなたの存在よ」

「は？俺の存在？」

「貴方は元は人間だが現神という特例の存在。それなら私の目指してる人間、妖怪、そして神も関係無い世界にぴったしだわ。それに

色んな観点から物が見えるじゃない？さっきも貴重な意見も聞けたし…それに…それに…」

そう言うとき紫はうつ向いてしまった

はて？どうしたのだろうか？

「…でも俺に手伝えることってあるのか？土地を創造するとかしかできないが…」

だがそんな紫を気にせず言う俺

「土地の方は大丈夫よ、ちゃんと準備はしてあるからあとには人を集めなきゃいけないわね………あとその言い種は手伝ってもらえるの？」

と顔を上げ首を傾げながら聞いてくる紫

この仕草は可愛いな…

「あ、ああ…手伝おう…まっ、あんたのその夢の世界ってやつも気になるしな」

俺はその質問に笑顔で答えた

「そ、そう…ありがとう…」ん？紫の顔が赤くなってるな…フラグ…いや…もうこんな時間だ、少し肌寒くなって来たのだろうか…

「それじゃあ俺は何をすればいいんだ？」

「あ、ああ……そうね……これからあなたは旅をするんでしょう？　な  
ら旅で出会った人にその世界を紹介してくれないかしら？」

「了解した、あとこんな時間だから帰った方がいいぞ風邪引くかもしれないしな」

「?…そうね今日は帰るわ色々とうね…：…そういえば自己紹介がまだだったわね、私は境界を操る妖怪八雲紫よ、気軽に紫って呼んでね♪?」

と言い手を差し出す紫

そういえばしてなかったな……

「まあ知ってると思うがタナトスだ、よろしく」

お互いに手を握り俺達は友になった……

— 紫  
S  
i  
d  
e  
—

彼のことを知ったのは偶然のことだった……

初めて彼の存在を聞いた時耳を疑った



元は人であり今は神に憑依した存在：

その存在はどうしても疑ってしまう

…気になる

…気になる気になる気になる気になる！！

彼はいわば神にも人間にも属さない存在…どちらかと言えば神になると思うがそれは異常、異質みたいなものだ

そう異質で下手したら悪質な存在…

まずは彼について色々と調べた

彼は現死神で元は人間ということのはわかった…でもどういう経歴で死神になったということはわからなかった…彼の今の噂や昔のあることないことは聞いたが神に憑依した経歴まで聞くことはなかった…

そのあと私は彼の居場所を調べた

場所はすぐにわかった…

私は境界の能力を使いバレないように彼の生活を見ていた

姿形は見たことなかった為に初めて彼を見たときには驚いてしまった…

異形の怪物…いや、異形の神と言うべきかわからないが人間のような姿で人間ではない姿になったのだから元人間の彼には想像以上に辛い事だと思った…

でも彼は違った…

至って普通に振る舞い、その姿も気にせず悠然と過ごしていた…

彼はかなり長生きというのは聞いたことがあったがああ姿で何百、

何千と過ごしていたということはその自分の姿に抵抗は無かったの  
だろうか…はたまたただ長い時間を過ごしてくうちに吹っ切れたの  
か……

結局このことは気にしないようにした

ある日彼は神社を出てくと言った

…これは会う絶好のチャンスだと思った

ふとあることを思い付いた彼に私の夢のことを聞いてもらおう、彼  
なら種族ともに私の夢の世界なら理想の存在、きっと彼なら様々な  
種族を感じて何か私にはわからないこと見つけたかもしれない…

なら聞いてみるのが一番じゃないか…？

と思い私は行動に移した訳である…

…今から思えば私はこうも彼にいつから魅せられたのだろうか…

わからないがひとつ、言えることがある

私はいつの間にか確実に彼に魅せられていた…

—紫side—

ちょー!? スキマはアッー! (後書き)

紫は大好きです、本当に好きです

はい…いきなりすいません…

とにかく読んで頂きありがとうございます

紫にフラグを建ててみました

ハーレムにするかはわかりませんがとにかく書いていきまっせ

ではでは(＊´ω＊)ノシ

神とは…人とは…（前書き）

遅くながら投稿です

今更ながらデモンズソウルにはまってしまい遅れてしまいました…

今回はあの方を出してみました

基本行き当たりばったりで書いてますので下書きも糞もありません  
では、本編を楽しんで下さい！アンバサツ！

神とは…人とは…

時々ふと思うことがある

それは人と神の違いである

ある人に聞けば力が有るか無いかの違い  
またある人に聞けば違いなど言うほど無いと言う人もいるかもしれない

神であること、人であること、はたまた妖怪であること…

そのことに正しいとか正しくないなど関係無い

そこでどう生きているかが大切だなんだ

俺は都に向かう為に川沿いをゆったりと歩いていた

空を飛ぶという方法もあったがあっさり着いてしまうというのも味気が無い、  
ということでは歩いている

すると前から金髪の女性が歩いて来た

その女性は今の時代にはひじょーに合っていない黒いゴスロリっぽいようなドレスのような服を着てステッキのような物を手に持っている

原作キャラにこんなキャラいたか…？

…いや…いないはずだ…



…関わらない方がいいか？

とそんなことを考えながらその女性を横切ったその時

「タナトス…」

「ッ!？」

俺はすぐに振り向いたがそこには誰もいなかった…

確かに通りすぎる時にタナトスと言われたはずだが…

彼女からは妖力は感じられなかった…なら人間か？

いや俺のことをタナトスと呼んだからその線はないか…：…なら神しかないな…

：

後か！

俺はうしろを向くと彼女は微笑みながら立っていた

「あんたは何者だ？」

腰の刀をいつでも抜けるように構える

クスクスと手を口に当て笑っている彼女に聞く

「紹介してもいいけれど立ち話もなんだからちよつとあそこの店ま  
で行きましょう？」

彼女は自分のうしろにあるだんご屋を指を指しながら言った

「……………」

「……………」

なにこの空気が……

「はむっ！むぐっ！むぐっ！むぐっ！むぐっ！はあっ！もぐもぐ！」

「……ズズッ…」結局だんご屋で話を聞くということになったが…  
「もぐもぐ！うー♪」

…良い食べっぷりですこと…  
というかあんさん食べ過ぎとちやいまつか…？

美人なのに花よりだんごもありやしない…いや…これは花でもだんごと言うのかな？

まあどうでもいいが

「あ、ごめんなさいついここの団子がおいしくて  
と言いながら笑って誤魔化そうとしてるよこの人

「…であんたは誰なんだ」  
彼女はまだ団子を口に運んでいる…だから……まあいいや

「むぐ…そうだったわ…ごく…私の名前はニュクス、簡潔に言ったらあなたの母…いいえ、違うわね正確に言ったらあなたの『身体』の母になるわね」

「あと夜の女王と呼ばれる神よ、よろしく♪」  
…ニュクス……ニュクスうううう！？  
タナトスのお母さんご登場！？

…ハッ！？まさか！？この身体を取り戻したm「違うわ」……心読まれた…

「じゃあなんの用なんだ？」

「私の息子の身体に憑依した人間はどんな人かしら？って思ったから会いにきただけよ」

「は、はあ…」

「それに言いたかったこともあるしね」

「言いたいこと？」

すると彼女は真剣な顔つきでこちらを見つめてきた

「ええ…あなたは…そのタナトスの身体に憑依した」

「ああ、そうだが…？」

「…なら、タナトス本人の意思はどうなったと思う？」

タナトス本人の意思…？

まさか！？タナトスはこの身体の中で意思が眠らされているということか！？

「まさか…タナトスはこの身体の中で……」  
俺は恐る恐る聞いてみる

「と、言ったらどうする？」

「それなら早くタナトスを起こしてやって下さい！！今更じゃあ遅いかも知れませんが勝手に他人の身体を奪ったんですから謝らせて下さい！！」

俺はニュクスに頼むと彼女は意外そうな顔をして驚いていた様子だった

「いいの？そんなことして？」

すると彼女は意外なことを聞いてきた

「…へ？」

どういうことだ？

「もしここでタナトスの意思を呼び起こしたらあなたはその身体から出ていくことになるわ、そしたら魂だけ存在になってしまって能力の低下、力を弱体化させてしまうのかもしれない、下手をしたら今あなたの持っている能力、神力、霊力その他もろもろが根こそぎ無くなってしまうかもしれないのよ？」

え？なにそれ？それって結構どころか、かなりヤバイことではないか！？

でもタナトスには申し訳ないって気持ちはある

どうしようか…

よし！

「…別にいいです、そんなこと、俺はただタナトスに申し訳ないという気持ちを伝えたいんです…その時はその時でどうにかなると思いますから…たぶん…」

「フフツ…そうか……うん！まあ合格かな！」

「は？合格？」

「ごめんね〜？実はタナトスはとくにその身体から出て違う身体になってるのよ〜」

手をひらひらさせて笑うニユクスさん

…は？え？なに？どういうことよ？え？

「よくわかんないって顔してるわね？実はあの神がタナトスに憑依させる前に用意した身体に魂を移してあるのよ」

「うんじゃあ、今のは…嘘…？」

「ええ、ごめんなさい少しあなたを試してみたただけなの」

「はああ！？なんだよ！無駄に心配してた俺がアホみてえじゃねえ

か!!」

流石に怒りたくなってきたよ…こっちは下手したら生死にかかわる  
っていうのに…いや…魂の状態で生死とか関係あるのか…? どうで  
もいいか…

ん?なんでタナトスを変わりの肉体に入れたんだ?どうして俺では  
なくタナトスを入れて俺の魂をその後、タナトスの肉体に入れるな  
どとめんどくさいことをしたんだ?

「ちょっと待てよ…!タナトスは変わりの肉体に入れたなら俺をそ  
の変わりの肉体に入れた方がややこしくならない筈だ…どういうこ  
とだ…?」

「ああ、それはね…『知らない肉体に入れるより彼が知ってる神の  
肉体に入れた方が面白くない?』だそうよ…」

暇を持て余した神の遊び…まさにこの事だな…

「タナトスは自分の肉体を使うことを許可したのかよ…」

「あー…抽選で決まったから半ば神の強引な決定だったのよ…流石  
に私の息子になった時は怒ったわよ」

あんたが怒ったらかなりヤバイんじゃない?ゼウスすら持て余すほ  
どの力を持ってるんじゃないかなかったけ?

「まあ変わりの肉体とタナトスの同意によって、戦争とかにはなら

なかったけど…」

戦争って…どんだけやねん…

「そうなのか…」

「あともう一つ言いたいことがあるの」

「なんだ？」

「あなた、神の肉体に入っただけど魂は人間のままだから」

「え？　どういうデメリットがあるの？」

「まー…なんて言うか…少し弱体化？」

「なんで疑問系…」

「だって！　それなりに憑依してから時間が経ってるから力が戻りつつあるのよ！」

「というか、そんなこと言わなくてもいいんじゃない？」

「そういう訳にもいかないわよ…あなた、他の神があなたに畏怖しているところ見たことある？」

「まあ…なんどか…」



諏訪子とか…初めてあつた時かなりビビってたからな…

「あれはあなたに畏怖してる訳じゃないの」

「へ？」

どうということ？俺に畏怖してないけりゃ何に畏怖してるんだ！？

「あなたの、能力の方よ」

「は？なんで？」

「その能力はあの神が弱体化したあなたをカバーするために付け足した能力よ…あ、生の方もね」

…マジで…？

「生の方はただの少し不安だからって理由で後から付けたみたいね、まあおもちやに死なれたら困るからじゃないかしら？」

「結局なんだ、俺はただあの神のおもちやにされてただなんだな」

「でもあなた今の現状に満足してるでしょ？」

「まあたしかにそうだが…」

「決して肉体は神でも魂は人間風情のあなたが相手にするものじゃない…あれでもとりあえずは創造神なんだから…」

「いや歯向かう気などさらさら無いだが…」

「あっそ」

…ズズッ…どっちかて言うとおの神には感謝してるしな…このお茶旨いな…

「というか魂は人間のままなのか？どーせあの創造神の命令だろ？」

「…ズズッ…ええ、そうよそっちの方が面白そうだからってさ」

デスヨネーw

まあいいけど

団子ウマー…

「それじゃ！帰るわね！」

「あ、そうすか」

そう言ってニユクスは立ち上がり一瞬で消え去ってしまった…あ、

代金は置いといてくれた：

なら俺はもう少し食うか：

「おばちゃん！団子追加ー！」

―ニュクス side―

「…で、そういうことでまあ彼は大丈夫よ」

「そうか…それならいい」

「まあ、彼は悪いふうに力を乱用する人間ではないわ保証するわよ？」

「まあ母上の言うことだ…信じるつもりだ…」

「…あ、あと彼あなたに謝りたいって言ってきたわ」

「ほう…変わったやつだな」

「彼も肉体を奪ってしまっただけに…してたのでしょうね…ところで…その小さい身体で大丈夫？不便なの？」

「ああ…確かに童子の身体が新しい肉体とは少し抵抗はあったが…まあ…慣れた」

「慣れちゃったんだ…まあその方が可愛いからいいけど♪」

「…母上くっつかないでくれ…邪魔なんだが…」

「別にいいじゃない♪」

「はあ…」

ニクス一家は今日も元気そうです  
W

神とは…人とは…（後書き）

ニクスさんはゲームのまま出そうと思いましたが…流石にあのザギンのママは…

ということで自分の妄想のにしました

タナトスさんはどうせならシヨタにしようぜ！！という独断により決まりました

あっ！石投げないで！ちょっと気持ち良いから！

…ゲフンゲフン…タナトスさんの兄弟はたくさんいるので出そうかは決まってません

ではではノシ

これはウサギですか？いいえ、う詐欺です（前書き）

お久しぶりです

首凝りです

色々とすいませんでした…とりあえず新作です、どうぞ

これはウサギですか？いいえ、詐欺です

……

「迷った……」

いきなり何をほざいてるの？馬鹿なの？死ぬの？とか思わないでくれ……とにかくあれだ……絶賛道に迷い中なんだ……

経緯を簡単に話すと……



適当に都に向かうためぶらついてた↓なんか竹林みつけた↓行って  
みよー！↓迷ったw＼（＾q＾）／↑今ここ new！

「ハハッ……ふざけんなよ…俺」

…どうしようもないからとりあえず歩くか…

…  
…  
…

…

明らかさまな行稼ぎですねわかります…

ゲフン！とにかく早く竹林を抜け出さない…

ん？竹林？迷う？

…

…此処、迷いの竹林か？

…で、だからどうしたって言うんだよ俺…

でもどうやっても迷う理由はわかったな

でも此処意外にいい場所だなー…なんて言うか静かって言うか…

…？あれは…うさぎか？やはりてゐるが居るのだrのおわッ！！

どっしーん！

いったー…こんなところに落とし穴ってことは…

「あは♪引っ掛かったw」

穴の上から俺を見ながら、んなことをつぶやくうさ耳の少女が現れた

あれはてゐだ絶対にてゐだ

「ぷぷ W W こんな初歩的な落とし穴引っ掛かるなんて W W W W W W W W」

イラッ

「うおわッ！だってうおわッ！ W W W W W W W W」

イライラッ

「しかも変な格好 W W W W W W W W ぷぷ W W W W W W W W」

イライライラッ

うぜえ…果てしなくうぜえ…

ちなみに落とし穴は頭から落ちた

「おい…」

「なーに？ W W W W W W」

「お前誰だ、名前言え名前」

とりあえず名前を聞く  
意味ないけど

「よくわかんないやつなんか名前なんて教えないよーだw」

ほんとウザいのですが、どうすればいいのでしょうか…

…

『仲良くなればいいんじゃない?』

あんたはいきなり出るな!!

…でもあながち間違っていないかもな…

『でしょ?』

感謝するけどとりあえず帰れ

「…よっと」

俺は軽くジャンプをして落とし穴からでた

てゐるは逃げたようだな…だがこのままだと竹林から抜け出せないし…

「はぁ…てゐを探るか…」

神（笑） 搜索中…

やっと追いついた…いつの間にか夕方になってるしよお…あいつ落とし穴以外にも色々仕掛け過ぎなんじゃボケエ…

「…てか寝てるし…」

てゐるは竹にもたれるように寝ていた

二次とかだと悪戯で迷惑ばかりかけてう詐欺う詐欺言われてるけど  
寝顔はまるで子供だな…

まあ外見が子供なのもあるけど

## 因幡のシロウサギ

有名な話かは知らんが、鯨を騙して本州に渡った為に怒った鯨に毛を剥ぎ取られて、その上オオクニヌシの兄弟に騙されて酷い目に合い、オオクニヌシに助けってもらったシロウサギの話だ

ちよつと待てよ…てゐるも下手したら諏訪子とか神奈子と同じぐらいの歳なるかもしれないんだよな…

…悪戯ばっかりしてるのに…

「ん…あ、お前は…」

目を擦る仕草をしながら起きるてゐ

仕草だけはいっちょ前に可愛い野郎だ  
でもんなことは関係ない

「やーっと起きたなうんちくしょー…」

脅しをかけるように言う俺端から見たらあんまり教育上良くない構図

「ひい…!」

ビビったのか小さな悲鳴ををあげるてゐ

たぶん今日が笑ってないからだと思う

「…とりあえず名前言え」

「え?」

「さっさと言え!」

「ひい!?!」

ビビってるみたいだけど、こいつは何をしでかすかわからん!!



「……てる…因幡てる」

「てゐだな、さっきまで色々なトラップに引っ掛かってイライラしているがちゃんと自己紹介したから今回は許してやろう、わかったか？」

座ってるてるに指を指して言う俺

本当だったら頭に一発いれたいところだが…女性に手を上げるなんてことはしたくない  
仮にでもフェミニストだし

「う、うん…」

まあ戸惑うだろうな  
いきなり許すって言われたら

「…ね、ねえ…」

「なんだ？」

「…怒らないの？」  
ふむ…さっき許すって言ったから怒る気が失せたな

それに怒ってもこいつなあ意味無いと思うし、というか絶対に意味無い  
これは絶対ニダー！

「まあ許すって言うてるから許してやるよ。その代わり…」

「その代わり…?」

「この竹林の出口まで案内してくれないか? ほら、追いかけて回して  
たせいで余計迷ってしまったからさ?」

「……………」

「そんな目で見るな」ぺしっ!

「いたっ!?」

「…で、ぶらぶらしてたらこの竹林で迷ってたわけね？」

「そうだ…」

今、てゐに小馬鹿にされた気がするがとにかく案内してもらっている

移動中、てゐと話しながら歩いてたが思った以上に思った以上に会話が弾んでしまっていた  
こいつなんやかんやで友達作るタイプだ！！

「あ、今日は満月みたいだね」

「そうだなって満月か…」

「…？なんか大変なことでもあるの？」  
首を傾げるてゐ

言ってなかったが実は言う俺は満g■■■■■■■■■■ツツーーー  
！！！！

喋ってる時になんだよ！！？

「こっちもちよつとまずいことになっちったね…?」

「あらー…」

いつの間にか妖怪達が俺達を囲んでいた…

妖怪達は満月のせいで息を荒くし殺気を飛ばしてくる

よし…久々に暴れるか…

「ちよつとてゐ、離れてろ」

「お前に倒sってなんだその姿はアアアアッー!!?」

「いきなり大声出すな」

「だって!だって!なにその姿!?!」

「んー…真の姿?」

「なにそれ怖い」

さっき言いかけたが満月の夜、俺は人の姿から元のタナトスの姿に戻ってしまうらしい

ペルソナ3が満月と関係あるからか?

でもそこまで困らないしちょっと面白いから、うん…嫌いじゃないわ!!

「とりあえず頑張れ!私は逃げるから!」  
と、言ってるは飛んで逃げてしまった

まあ邪魔になるだけだから丁度良いか…

グルルルルルウ…

唸り声をあげながらじりじりと近づいてくる妖怪達

そこまで強いやつではなさそうだな…

「じゃあ暴れますか!!」

■■■■ ツー……!!!!

俺が声をあげると同時に合わさって声にならない声をあげて一斉に向かってくる妖怪達

「ブレイブザッパー!!」俺も向かいうつ為にブレイブザッパーを放つ

斬ッ!!

■■■■ ツー！！？

何匹かに当たったようで数匹の妖怪が悲鳴をあげながら倒れる

「チィ！！少し外してしまったか…！」

ブレイブザッパーを避けた妖怪達は止まらずに俺に向かってくる

「ちよいと試してみるか」

バツ！！

いきよい良く手を頭上に上げる

「……………」

目の前に妖怪達に向かって来てるが気にせず力を溜める  
そして頭上にある手を一気に降り下ろすッ！！

ひゅ…

ザザザザッ！！！！

■■■■ ツー！！！！？？

すると次々と妖怪達の体上空から落ちてきたトランプ兵の槍で突き刺されていった

そう、アリスの閻属性の最強の技【死んでくれる?】である

■■■■ ツー!?!??

次々と落ちてくる槍の雨になす術も無く食らい倒れゆく妖怪達

もはや惨めとしか言い様のない光景である

ちなみに死んでくれる? は死亡遊技ができたからやつつけでやってみた

不発したら相当カッコ悪かっただろうな…  
成功して良かった…

あと流石にこの姿で「死んでくれる?」と言うのはやめた

だってタナトスが死んでくれる? なんて言うの聞きたくないでしょ?  
そういうことだ…

というか、やってみる物だな…

……今度は八艘跳びとかやってみようか…

「お前、何者だよ…」

俺がそんなことを考えていると横からそんなことを言われた

「ああ、戻っていたのか」

手に持っている刀を鞘に戻しながら声のする方を見る  
案の定、そこには竹に隠れるようにてゐがこちらを見ていた

「あー…というか名前も言ってなかったな。俺はタナトス、とりあ  
えず神？だ」

「肝心な所をあやふやにしてどうするの…」

「……まあ神だ」

「なるほどね」

納得したのか首を「うんうん」と頷きながら言うてゐ  
それだけで納得するなよ…

「まあ助けてくれてありがとうね？」



と、俺を見上げながら言うてゐ

「別にお礼をされることでもねーよ。お前が死んだら俺がこの竹林から出れなくなるだけだしな」

「あははっ！ そうだね！」

俺とてゐはそんなことを言いながらお互いに笑い合いまた出口に向かった：

兎と神 r y

「ここが出口だよ」

「ああ、ありがとう。出会った時の印象は最悪だったがまあ楽しかったぜ」

「こっちも楽しかったよw」

「それじゃあな」

少し名残惜しいが帰るか…

「あ、あのさ！」

するといきなりてゐが大声をあげた  
その声に俺は振り替える

なんかもじもじしてるな…

「あのさ…ここつての兎達もいるけど…やっぱりさ他の話し相手も  
ほしいからさ…」  
言いかけてまたもじもじするてゐ  
意外と可愛いらしい

「…ああ、また来るよ」

俺もそこまで意地悪ではないので普通に返す  
え？つまらん？知らんがな！！

「！！？」　　パアア…！

今度は顔が明るくなったな実にこれも可愛いらしい

「ぜ、絶対だからな！？破ったらまた落とし穴に落とすからね！？」  
しゃべり方はちとキツイが顔は嬉しそうに話すう詐欺実に可愛いの  
う可愛いのもw

「ああ、絶対だ」

そこをクールに返す俺クオリティ

「あ、あとさ、この竹林から早く出てきたかったなら空飛べば良かったんじゃない？」

「……………あ…」

「……………」

(。Д。)

(。Д。)

「顔怖いからこっち見んな」

そんなこんなで長い一日は終わった…

**これはウサギですか？いいえ、う詐欺です（後書き）**

てゐの口調がわからなくて半ば自問自答を繰り返してました…

更新スピードは上がるかわかりませんが、とりあえず頑張っていきます

それでは…

## 俺的竹取物語 上（前書き）

最近下痢をよくする首凝りです

更新速度が亀なので本当にどうするか悩み中です…

とりあえず新作なのでどうぞ

## 俺的竹取物語 上

「先ほどは本当に助かりました、感謝します」

「いえいえ、そう気にしないで下さい。たまたま居合わせただけですから」

どうも、タナトスです  
たった今、都に着きました

流石都というだけにかんりの量の人、人、人！

久々にあんなにも人を見たのは五百年ぶりぐらい前になるな…

「先程の戦いっぷりからして…戦いに慣れてますね貴方…？」

ちなみに今話してる人は、藤原不比等

気付いた人もいるだろう

「それなりに色々ありましてね…」

そう、竹取物語に出てくる人物の一人だ

「そうですか…あまり詮索しないでおきましょう」

それと普通にイケメソなのがなぜかムカつく

別に悪い人ではなさそうだがイライラしてしまうのがもと元非リア  
充の性なのかもしれない

今？今は普通に友達いますけどなにか？

「ええ、そうしてください」

だがこのイケメソ、実は藤原妹紅のパパさんに当たる人である

これはエンカウントの香り！？

で、なんでそんな人と話してるかって？



回想するのもめんどくさいから簡単に言うと…

都歸りの藤原さん御一行が妖怪に襲われていた所にたまたま居合わせて助けてあげたら、お礼をしたいと言われてこのまま、はうくお持ち帰りいゝ！されて、今はそのお屋敷で話してるという訳だ

「ところで、藤原様はどうしてあんな所にいたのですか？」

「藤原様なんて止してくれ恩人にその様に言われると流石に少し違和感がありますしね」

苦笑しながらそんなことを言うイケメン藤原氏

別に恨みはないが、あんた絶対たらしだろ  
顔でわかる

「はぁ…わかりました。それでは…」

「あとその敬語も止めてくれないか？あなたは私の恩人ですからそんな畏まらなくていいですよ」

「それに楽な姿勢でいいから」

そんなことを言いながらニコツと笑う

うん、たらし確定だわ

「…わかった」

催促されるまま俺は正座してた足を崩す  
ちよいと痺れた…

「それで先ほどの質問だが…言って良いが内密にしてほしい…」

…なんかやつと本題に入った気がする

…ちよつと待て…ただ都を出てただけなのに秘密にすることなのだろうか？

都を少し離れるという行為は別に秘密にすることではないだろうに…

もしくは…出掛けた先になにか秘密があるのだろうか…

「わかったが…秘密にするほどのことか？」

すると俺の質問に少し顔をムツとさせる不比等パパ  
それほどのものなのだろうか？

「言ってもいいですが内密にお願いします…」

今までののにこやかな顔だった不比等の顔が真剣なものになる

「……実は言うところ職人にあるものを作るよう依頼をしております…」

「そのあるものとは？」

少しだけ空気がピリピリする

「…蓬萊の玉の枝です」

なるほど…そういうことか…それは内密にする必要があるな

蓬萊の玉の枝…

確か…仙人が住むと言われる蓬萊山にあるとされる枝…だったはずだ

ということはその藤原が作るように頼んだ蓬萊の玉の枝は…

「なるほど、偽物だな」

ということになる訳だ

「……まあ、はっきりと言ってしまえばそうなりますね……」

「だろうな」

藤原は苦笑してるが、どこか焦ってるようだな

「ですが…偽物でも今は必要なんです！」

パンツ！と強く床を叩く

先ほどの冷静さはなく、興奮状態になってしまっているようだ

「だがどうしてそれほど執拗に蓬萊の玉の枝が必要なんだ？」

冷静に聞き返す

「……………すいません取り乱しました…話を戻しますと…」

俺の対応を見てか、落ち着きを取り戻したようだ

必死というかなんというか…完全に魅せられてるな…あのニートに…

「……………輝夜姫のことは知っていますか？」

やっぱりあの自宅警備員のことなんだ…

「ああ、今都で話題騒然の絶世の美人のことだろ？」（笑）

「…はい」

少し暗い顔で頷く藤原

真剣なご様子である

「俺もあまり深くは知らないがそこら辺の沢山の貴族が嫁に貰おうと必死こいてあの手この手で申し込んでるが、靡もしない揺らぎもない、ガードのお堅い姫様のことだろ？」

「というか今の時代ってあのお姫様のいちばんのモテ期じゃないか？」

「だから原作では婚期逃して干物ニートになってるとか………なんてなw」

「しかもかなり難癖がある姫様らしいな」  
俺は頬づえをしながら聞く

「ええ、実はこの蓬萊の玉の枝を持ってくるように言われたは輝夜様でして……」

「注文した物を持ってこれば嫁になってもいいとかいう条件なんだろう？」

「ええ……ですが……蓬萊の玉の枝などと言う物などは探し回りましたが見つかりませんでした……だからこの蓬萊の玉の枝を作るように命じたのです」

藤原は後ろにあった風呂敷に包まれた物を前に持ってくるとおもむろにその結び目を解く

「見事と言えば見事だな」

その蓬莱の玉の枝は芸術品と言えばかなり値が付くような実によく出来てるものだ

少し細目の枝には色とりどりの玉が付いており、まんまあのニートが手に持つてるようなデザインの綺麗な玉であった

「…偽物だな」

俺がジロジロと偽物の蓬莱の玉の枝を見てみると、不比等がおもむろに口を開いき話始めた

「…しかも輝夜様はこのようなことも言いました…」 不比等は肩を震わせながら俯く言う

「……」

「次の満月に月より使者が降り月に戻るでしょう…」と

「なるほど…ね…」

「本当に月に戻るとかどうかなんて私はわかりません…ですが！もし注文通りの物を持って来なければ輝夜様に二度と会えなくなってしまうのは絶対なんでしょう…だからッ！！だから…偽物でも持つて行かなければならないんですッ！！！！」

不比等はダンツと強く床を叩き体を震わせながら言った  
感情的になってるな

「…と、言われたところで俺にはなんも出来ないしなあ…用心棒ぐらいしか…」頭をかきながらそんなことを呟く

月人とは知り合いだからってどうこう出来る話ではなさそうだし、神の力を持っているから暴力沙汰ならなんとかなるが、人事的なことになるとなあ…：：：賄賂とかぐらいしかできねえしなあ…：：：というか賄賂今回意味ないし…

「用心棒…：：：それだ！！」少しだけ沈黙を保っているとなんか思い付いた様子のパパさん

え？なんか言ったか俺？

「妖怪をも容易く倒してしまう強さを持つあなたを用心棒として雇えば、月の使者が来ようとも簡単に撃退できる筈です！！」

ずいずいずいと寄ってくるパパさん  
ちょ!?!怖いって!?!?

「どうなんですか!?!タナトスさんなら出来ますよね!?!?」  
更に顔を近づけながら聞いてくる  
マジで近いって!?!!

「ま、まあ、それぐらい!?!」

「よし!?!それでは今日からあなたを用心棒として雇いましょう!  
!?!そういえば都に來たばかりで泊まる所がないでしょう??!それな  
ら、うちの客間を使って下さい。あ、そういえば都に來てから何も  
食べてませんね??!すぐに食事を用意しましょう!?!少し待ってて下  
さい、すぐに侍女に言ってきますので!?!いやぁー本当に今日はつ  
いているなあ!?!」

「え…あ…あ、あれ?」

……………勝手に決めたあげく勝手にどっか行きやがった…  
というかなんやかんや圧倒されて返事をしてしまった…やべえWど  
うしようW



…どうしよう…

「なんだかあ…」

「すみません…あんな父で…」

そんな風に途方に暮れてると後ろから女の子の声で声を掛けられた

「ん？」

その声のする方に振り向くと、そこには十五歳ほどの黒色の長髪の少女がいた

えーっと…誰だ…？原作にいたか？

「…あゝ…」

掛ける言葉も思い付かず変な声を出す俺

「あ、すみません…自己紹介してませんね…私、藤原妹紅といいます。お父様を助けていただき本当にありがとうございます」

深々とお辞儀をする妹紅

…ん？妹紅？はて？妹紅とな？…妹紅…妹紅…も、ももも妹紅！  
！？

え！？うそお！？あの妹紅！？もこたん！！？え！？もこたんイン  
したお！？つか！？いや違うだろ！！んなことじゃねえ！！という  
かゼツツツんぜん印象ちげえーーーーッ！！！！

……って当たり前か…不死の薬飲む前だし…何言ってるんだ俺…

「あ、ああ、別に気にしないでくれ、たまたま助けただけだしな」

ちよつと戸惑いながらももこたんに返事を返す

ん…黒髪のもこたんとは…なんか新鮮だ…

「そ、そんなことはありません！！本当に感謝しているんです！！…  
あの時、お父様が妖怪に襲われたと聞いた時は本当に…不安で…不  
安で…心配で…」

…えっ？えっ！？ちょ、ちよつと！！そこで泣いちゃう！！？泣い  
ちゃうの！！？なんかオジサンが悪いみたいな構図なんだけど！！  
？というか誰がオジサンだし！！？別に俺まだオジサンじゃないん  
だけど！！ま、まだイケイケだし！！二億だか、一億だか、何歳か  
わからないけどまだイケイケだし！！というか誰がオジサンって言  
ったんだよ！！ふざけんな！！…あ、俺が言ったのか…って  
ちげえーーーーよ！！？えっ！？もこたんどうするの！！？まだ泣いて  
か…？ど、ど、どうするの！！？どうするの俺！？もう駄目だ

あー……

「す、すみません……もう……大丈夫ですから……」

俺がぼのぼのみたいに絶望してる内にもこたんは手で目尻を拭いて泣き止んでいた……

うわぁー……情けねーなぁー……俺……

「えっと……タナトスさんでしたよね……失礼ですが……変わったお名前ですね」

「ま、まあ変わってると思うが気にしてないよ」

「そう、ですか……」

「うん」

「「……………」」

え？なにこの沈黙？

「「……………」」

重苦しッ!!

…と、とりあえず何か言わなくちゃ何か言わなくちゃ何か言わなくちゃ…

「そ、そうだ、もこもじやない妹紅ちゃんは「妹紅で良いですよ」  
お、おう…妹紅は父さんのことが好きなのかい？」

なに聞いとんの俺

「え？あ、はい！大好きです！！カッコイイですし、優しいし、大好きです！！」

……なにこの子…めっちゃ眩しいんですけど…純粹過ぎでしょこの子……

「…ですが」

さっきまでのキラキラしていた顔が寂しそうになる

「ですが？」

「私は…隠し子なのでまともにかまって貰ったことはあまりないんです…」

「あ…」

あっちゃー…変なこと聞いてしまったなあー…やっちゃったよこりやー…

「でも今はこうやって侍女としてお父様近くで働かせてもらってるだけで十分ですよ」といって満面の笑みで微笑む妹紅

…あかん…この子めっちゃええ子や…ええ子過ぎるやろ…オジサン泣きそうやわ…（；ω；、）ブワッ

「そうか…」

俺は微笑みながら妹紅の頭を撫でる

「…………あっ…／＼／」

たぶん頭を撫でもらう経験があまりなかったのだろう、顔を赤らめて俯いてしまった

うむ、実に可愛い

流石にずつとしてる訳にはいけないので離す

「あっ…」

「ん？」

「い、いいえ…なんでもありません…／＼／」

「？」

まだ撫でてほしかったのだろか、ちょっと名残惜しそうだな

すると何かを思い出した様に口を開いた

「あ、実は言うとか心配なことがあるんです…」

気がかりなこと？あのニートか？

俺はこの子が住所不定であるの一級自宅警備員と危ない喧嘩するよう

な子にならないか心配だ

なるのだろうか

「お父様はあの輝夜姫に夢中なのですが…姫がもし月に帰ってしまつたらお父様は壊れてしまふかもしれないんです…」

：確かに、あれだけ執拗に輝夜姫のことを依存、もしくは執着、もしくは中毒になつてゐるのに輝夜がもし居なくなつてしまつたら…壊れるのは時間の問題だろうな…

本当だつたらそこで復讐の炎に燃えあの妹紅ができるの筈だが、それは置いてこう

「ですから！！私からも今回の依頼のこと、頼みます！！お父様の為に！！」と、頭を下げる妹紅

もこたんの頼みだが…今考えるとなんか複雑だ…

嘘前提で女が行くのを止めようと父と、それを応援する娘…なんじやそりゃ

なんか昼ドラ臭えな…

「わかつた…」

しょうがないから素直に答える

すると妹紅顔が明るくなり嬉しそうにこちらを見てきた

「ありがとうございます！本当に感謝しきれません！！」  
また一礼をする妹紅

もういいってば

「それでは、私には仕事があるので」

そういうと妹紅はそそくさと障子を開け、部屋を出ていってしまった

部屋にぽつーんと残される俺

ちようど良い…今までを考えをまとめよう

「色々二次創作を見たがこのパターンは初めてだな…」

人間だった頃はよく二次創作を読み漁ってた身だ、だから様々な二次創作を見てきた

しかし今回ののはちょっと違った



あの不比等パパが輝夜姫の為に奮闘するのは置いとこう  
：だが妹紅が積極的に父を応援するなんて二次創作なんて見たこと  
がない

見てきた中では輝夜姫を嫌悪したり、父に呆れる物もあっただが：  
積極的に父が女の尻を追いかけるのを応援するなんてなあ：

「なんだろうなあ：

足を伸ばすように崩し、手を後ろにやり、床に付ける

とりあえず様々な問題があるが、結局はまあ：

「：やるしかねえんだろうなあ：」

## 俺的竹取物語 上（後書き）

?? 「あと一週間もすれば満月ですね」

?? 「そうみたいね」

?? 「あの人は元気なのでしょうか…」

?? 「あいつのことだから元気にしてるわよ」

?? 「そう、ですね…きっと…そうですね」

?? 「ええ…きっと…」

俺的竹取物語 中（前書き）

どうも 最近肩凝りが酷くなってきた首凝りです

とりあえず新作です  
どうぞ

## 俺的竹取物語 中

「……はぁ……」

たった今まで俺はニートこと輝夜姫をどうやって月に返さないようにするか考えていた

「……ふーむ……」

で、一昼夜寝ずに導き出した結論はと言うと…

お手上げ侍／（＾Ｏ＾）／

…うん、別にふざけてはない…

…ただ…ただ思い付かなかったただけだ…

「はあ…これじゃあダメじゃん…」

大の字で寝転がる

…確か永琳が来て、ぐやと一緒に共謀して月の使者から逃げるとい  
う流れだったはず

ただしあれは原作のことだ

この世界が原作通り動くとは限らない

事実、俺という本来いない筈の存在がいる

はっきり言えば二次の存在

だから永琳と輝夜が親友だからと言って『絶対』に永琳が迎えにく  
るとは限らないという訳だ

最悪の場合は月の兵隊だけが来る可能性もあると言えはあると言え  
るだろう

さらにもしも創造神がちよっかい出せば変わってくるかもしれない

…うーむ…極力戦闘を防ぎたいというのが第一なんだが…まあ無理だろうな

…はあー…どうなることやら…

なるべく被害が及ばず、尚且つ輝夜を帰らさない方法…

原作通りに世界が動くのかはたまた動かないのか…

あ、

輝夜に聞ばいいじゃん

月の使者がどうやって来るかわかるかも知れないし、一番手っ取り早くエンカウトも取れる  
まさに一石二鳥だ

よっしゃよっしゃとりあえず決まったな

「なら善は急げだ」

大の字で寝てた姿勢からよつと言いながら立ち上がる  
いやぁー…初めからこうすればよかったじゃん…

「あ、やば…輝夜が何処にいるか聞いてなかった…」  
ということでは不比等から輝夜の居場所を聞き、輝夜の住む屋敷に向  
かった

死神（嘲笑）移動中…

「結局一日無駄したなあ…」

輝夜が住んでいる屋敷はかなり大きな物だったので迷わずに着けた

まあデカイちゃあデカイ

……ざわ……

ざわ………

…ざわ……

屋敷の門にはかなりの人数の人が集まっている

都一の美貌を一目でも見ようと野次馬が集まっているという訳だな

入りにくいなあおい……

「ん？あるえー？」

よく見ると野次馬の集まっているところに妹紅がいた

中の様子が一目見ようと必死に背を伸ばしたり、跳ねたりしているが野次馬が邪魔のようで見えない様子

……可愛いからこのまま見ていようかな……

いやいやそうじゃないそうじゃない、仕事中になーにやってるんだもこたん



「あ！タナトスさん！」

すると俺に気が付いたようで走って向かってくる妹紅

もう少し見ていたかった：

「どうしてこんなところに来てるんですか？」

「どうしてこんなところに来てるんですか？じゃないよ：仕事の方は？」

「あ、あう：」

やっぱり仕事サボってきやがったな：まあ可愛いので許す

「まあそんなことはいい、此処に輝夜がいるんだろ？」

「あ、はい、この奥にいるみたいですよ」

「ほーん」

屋敷の方を見るが野次馬で中は何にも見えない：

「この人の量では見えませんがね：」

野次馬がどうこう以前にどっちみちこんな門から輝夜が見える筈がない

「いうことで：ちょっと行ってくるわ」

「え？行くって…この中ですか？」

顔ををキョトンとさせる妹紅

「あったりめーだろ。この為に俺は来たんだから」

「だ、大丈夫なんですか!？」

ビククリしたような顔をする妹紅

「大丈夫、色々準備してきたから」

身分も糞も無いのに入ろうなんて思っていない

無理矢理入るなんて流石にねえーよWWW

ということで…

「不比等に俺でも入れるように証明書書いて貰った」

袖から一枚の紙を出す

手回しは十分さッ!!

「おー!」

感嘆の声を漏らす妹紅

さっきから表情豊かですなあお嬢さん

可愛いから良いけど

ざわざわ…

「ちょっとすいませーんはいはい退いて下さーいちょっと通りますよー退いて下さいnイタッ!? 誰だ!?! 足踏んだやつ!」

「あ、すいませんタナトスさん…」

「お前かよ…」

むらむらざわざわ

「む…誰だお前達」

野次馬の最前列に來ると厳ついやつちゃんみたいな門番さんがドスの聞いた声で話しかけてきた

ちゃんと仕事してるな関心関心

「おい、茶化すな」

「あーすいません」

「で、なんの用だ」

「輝夜姫に会わせてほしいのですが…」  
率直に言う

「ダメだダメだ、庶民が入って良い訳ないだろう」  
顔を歪ませるやっちゃん門番

まっ、これが普通だわな

フッフッフツ…だが、俺には秘策がある…

「はいこれ」

不比等から貰った証明書を門番に渡す

「なんだこの紙は……！？………わかった入って良いぞ」

やっちゃん門番が紙を読むとさっきの厳つい態度は何処かへ無くなり、潔く入るのを承諾してくれた

おー流石藤原一族、一発オーケーとは…

貴族生まれって凄い

俺は改めてそう思ったね

「はッ！？どういうことだ！？」

もう一人の門番が声をあげる

すると門番が近づき耳打ちをする

「ッ！？そういうことか…わかった、そこの二人入れ…」

「わかりました」

ん？ちょっと待て…二人？

「二人ですって…誰でしょうか…」

妹紅が聞いてくる

あっちゃー…これはマズイかもしれない

「…えーっとな…たぶん妹紅、お前だと思う…」

「わ、私ですかッ!？」

いや、俺と居たんだしあんたしかいないでしょ…

「そこまでびっくりするかよ…」

ほんと可愛い生物だな

あとで不平等に承諾してもらおうかな……ん？なんの承諾って？そりゃあ…ねえ…？

「とりあえずまあ入ろうか」

「そ、そうですね…うー…緊張するうー…」

―妹紅side―

私はタナトスさんに促されるまま屋敷に入った

屋敷の中はとても広く、藤原の屋敷に匹敵する程の広さあるらしいです

ちなみに藤原の屋敷はこの屋敷の二倍ぐらいはあるみたい

ちょっと勝った♪

「…どうぞこちらです」

「はい」

侍女の人に案内してくれるみたいで、それに着いていくタナトスさん黙って着いていく

スタスタ…

すると部屋に着いたのか襖の前に座り込む

「輝夜様、お客様です」

「ええ…通して」

すると輝夜姫と思われる澄んだ声が聞こえると、襖が開けられた

「それでは…」

というと侍女は何処かに行ってしまった

「失礼します」

そんな侍女のことも気にせず部屋に躊躇なく足を踏み入れるタナトスさん

どうしてそうも堂々としていられるのでしょうか？

「し、失礼します！」

私も緊張しながらも部屋に入る

そこは輝夜姫が一人だけにいるには十分過ぎる大部屋だった

そしてその大部屋の奥に輝夜姫がいるのか、簾で輝夜姫で遮られている

「……………」

ただ立ち尽くす私達

えー…えつと…どうしましょう…

外の人達の声はまったく聞こえず、ただ静けさだけがこの部屋を包み込んでいた

「適当に座って」

沈黙に耐えきれなかったのか輝夜姫様から声を掛けた

ちよ、ちよつとだけ安心しました…

「……………」

「は、はい！」

言われた通りに適当に部屋の真ん中辺の畳の床に座る

うう…緊張してお腹が痛くなってきました…

「……………」

そしてタナトスさんは、妙な顔つきのじつと輝夜姫の方を見ながら黙っている

先程からどうしたのでしょうか？



何か癪に障るようなことはあったのだろうか…

それとも、タナトスさんもお腹が痛くなってきたのでしょうか？

少しだけ沈黙の流れると輝夜姫の方から口を開いた

「様々な貴族が私目当てでここに来たわ…私を一目見ようとする貴族、私と婚約目当てで来る貴族、大抵そんなくだらない理由で来る貴族ばかり…」

いきなり口を開いたと思うと輝夜姫はそんなことをぼやいた

はつきりとはわからないが呆れた顔をしてるのでしょ

うですが、なにを言いたいんでしょうか？

「でも、貴方は違うようね…」

「ええ、その通りでございます」

ようやく口を開きもののしく敬語で話し始めた

そういえば、どうしてタナトスさんが輝夜姫に会いに来のでしょうか…？

気になるところです…

「ところで、失礼な話ですが…お顔を出して頂けませんか？非常に話しくいので…」

……タナトスさん!?! いきなりな、なに言ってるんですか!?!

私はずうずうしく、無礼承知で輝夜姫に頼むタナトスさんに驚いてしまった

「そんなこと無理に決まっていますよ!?! 都一の美人なんですよ!?! 無理ですよ!」

輝夜姫に聞こえないような小さな声でタナトスさんに言う

「いやあゝ…話にくいからあゝ…」

タナトスさんも輝夜姫に聞こえないような小さな声で照れるような感じで言う

て、照れるところじゃありませんよ!?!

「ええ、良いわよ。私もこの方が話しやすいしね」

「ほら駄目ですって……えっ?」

輝夜姫がそういうと輝夜姫の姿を隠すようにしていた簾が動きはじめた

ど、どういうカラクリなのでしょう?

「とりあえず初めましてね。私が輝夜姫よ」

「…あっ……」

……私は輝夜姫を見て絶句してしまった…

輝夜姫は私とそう年も変わらない同い年ぐらいの女の子だったのだ…

しかし、魅力という物は年など関係なく、そこに存在していた…

艶やでいてそれでいて綺麗な長い髪、どこか気品の感じられる仕草、そして常識離れした美しい顔…

着ている裳は庶民には一生手に届かないようなとても高価な物だと私でもわかる

だが、その着物すら彼女の美貌ではただの布切れにしか感じられない…それほどの美貌…

お父様が様々な女性を屋敷に招き入れることがあったが……今まで見た女性の中でも比にならないくらい美しいものだった

が…

「…うんまあそうだよな」

タナトスさんはじっくりこないのか、何故か自己解決をしていた

「ど、どうかしましたか？」

タナトスさんだけに聞こえるように聞く

「あ、いやなんでもないこっちの話」

「そ、そうですか…」

一体なんだったのでしょうか…

タナトスさんって時々何を考えているかわからないです…

「それで何の用？嫁にしてくれーって頼みに来たわけでもないみたいだし？はつきり言っでめんどくさいのよ、さっさと用事を済ませて帰ってほしいわけ。わかった？」

めんどくさそうに呆れ顔で煙たがる輝夜姫

…もっと大人びた人だと思ったのに意外に子どもっぽい…

…こんな人をお父様は酔いしれ、憧れ、狂おしく求めたのですか…？

い、いえ…まだ私は輝夜姫のことをはっきりと知りませんからまだ決まった訳ではありません…もっと関わっていけば…きつと…きつと…

―妹紅side―

「どうかしたか？俯いて？」

さっきの輝夜の話を聞いてなのか、なぜか妹紅は俯いてしまった

「い、いえ…なんでもありません…」

…確かにさっきの輝夜の態度は理想と違ってげんなりすると思うが…それほど落ち込むものだろうか？

「で、本当になんの用かしら？」

そんな妹紅も気にせず話をまた切り出す輝夜  
そもそも妹紅は眼中に無しという訳だな

「実は藤原様から用心棒として雇われてる者でして、輝夜姫、貴女が月に帰る時に月の使者から貴女を守るように言われています」

とりあえず今は妹紅を気にしてる場合ではない

敵の情報を得ることが優先だ

「そう…用心棒ね…」

「ええ、用心棒です」

「とりあえず宜しき」用心棒なんて無駄よ」…はあ…」

俺が話していると力無く輝夜は話を遮ってきた

「どうしてでしょうか？」

とりあえずどうして無理か聞く

「月の人間はこの地上の人間が想像出来ない技術を持つわ。そんな技術力を持った奴等に弓とか槍なんて玩具も同然、そんな奴等に勝てると思う？否、勝てない、絶対に勝てないわ」

確かに火器に弓や剣が勝てる筈がない

だが、それは普通の『人間』だったらの話  
神の俺には銃も剣もへったくれもない

「では、一つお伺いしても宜しいでしょうか？」

結局このまま話しても拉致があかない、だから：

「…？ええ、良いわよ」

手っ取り早く話すでしょう

「…八意永琳」

少しだけ声を落としてそっと呟く

「ッ！！？どうして永琳の名前をッ！？」

勢いよく立ち上がる輝夜

そんな着物着て立ち上がり難くない？

「永琳を古くから知る人物…と、でも言っておきましょか」  
口元に薄ら笑いを浮かべる

「くッ…シラを切るつもりかしら？」

顔を苛つかせながら聞いてくる輝夜  
その顔には焦りも出ているようだ

めんどくさくなってきた：無理矢理、話を繋げるか

「カツ！敬語で話すのもめんどクセエな、まあ兎に角シラを切る気はこれっぽっちもねえよ」

足を崩し、ずうずうしく言う

「：ならなんのつもりかしら：？」

少し顔をムツつとさせる輝夜

「ああ？さっきも言っただろ？俺はただあの不比等に雇われた用心棒だよ。お姫さまをお月様の兵隊さんから守れてなあ、だからお前にその月の兵隊さん達がどう来るか教えてほしいって訳でここに来たって訳よ、お姫さん？」

うん、これぐらいはつきり言った方が伝わり易いな

渋々と言った感じで輝夜が座る

「：な、なら貴方の正体を教えて頂戴？流石に正体がわからない人を信用する訳にもいかないわ」

そーいえば言ってなかった

「ああ：タナトスってもんだ。永琳と知り合いなのは昔色々、世話になったもんでな」

驚いたのか目を見開く輝夜

「あ、貴方がタナトスなの：？」



あ、そっかこの姿になったのは最近のことだったからな

「永琳から聞いてたとは全然違うわね…」

「そこんところは後で詳しく話そう。おい妹紅、聞いてるか？妹紅」

話をするのはおいおいで良いとする、だが妹紅がいるのは非常に話  
しにくい

だからとりあえず妹紅には席を外してもらおう

「おい、寝てるのか？」

何故かまた俯いてしまってる妹紅に肩に手を掛け、呼び掛ける

ほんとうにどうかしたのだろうか…？

「ふえ？あ！はい！？すいまふえん！…あう…」

可愛らしく囁んじやってるよこの子

あとで抱きついていい？あだめ？やっぱり？

「な、なんででしょうか？」

「実はさ…ちょっと輝夜姫と二人だけで話したいんだが…先に帰っ  
てくれるか？」

「え、ええ…良いですよ」

と言ってすっと立ち上がると、少し考えるように顔を歪ませながら襖を開けて、一礼だけすると出てっていった

「…それでは、一つ伺おう」

「なにかしら？」

「月から使者が迎えに来るようだが…人数や注意することがあるか聞きたい」

輝夜は一旦考える仕草をすると、あっ…と声を漏らし、何か思い出したような顔をした

「…人数は聞かされてないけれど、永琳も来るようにとだけは言っているわ」

ふむ…敵の人数が少し気になるところだが…永琳も来るなら少しはどうにかなるだろう…

少しは安心できるな

「そうか…わかった、すまない」

「気にすることではないわ…それに死神の貴方なら私を守ることなんて簡単でしょう？」

少し楽しそうに話ながらコロコロと笑う

うーん…ニートとか言われてるのにやっぱり女の子だから可愛く見えてしまう…あ、ニート関係ないか

「ほんと可笑しいわね、もう一生死とは関係無い身なのに、その死から守ってもらうなんてね？」

「……………」

輝夜と永琳は蓬莱の薬で、もうこれから、今後永遠に死ねない体になった

それはあまりに優しくて、残酷で、酷という物だ

『生』という辛み、重みを一生背負い、『死』という名の解放から未来永劫永遠に別れた

ある意味『生』ではなく『死』の方に彼女達は縛られているのかもしれない

だからこそ、その重み、辛みが生き甲斐なのかもしれない…

「まあ…な…」

「ええ…」

「…そうだ、輝夜姫の話聞かせてくれないか？あいつらとは、何千年あってないことやら」

暗い気分を変えるべく輝夜に聞いてみるが、何処かに少し恥ずかしさがあつた為に目を逸らしながら笑ってしまった

「ふふ…そうね、話しましょう…貴方達、私達の話…」

「ああ…」

そういつて日が沈み始めた中、何処か嬉しそう笑う輝夜を横目にしながら懐かしく、そして新鮮な話に俺達は何時間も浸っていた…

## 俺的竹取物語 中（後書き）

最近なぜか咲夜さんを見るとロベルタさんを思い出します

ナイフも良いですが、マケット銃を使う咲夜さん……うーん……良  
いッ!!

それでは

## 俺的竹取物語 下（前書き）

若干、永琳の性格がおかしくなってるかもしれませんが、気にしないで下さい…

とりあえず新作です  
どうぞ

## 俺的竹取物語 下

「よう、おかえり…?」

今、不比等が輝夜に蓬来の玉の枝を渡し帰ってきたところだ

「あ、ああ…」

だが、ちゃんと渡せたのに不比等の返事は弱く、顔は暗い

どうしてそうなるかは見当は付いている

「…とりあえず座れよ」

「…そう、ですね」

不比等の部屋で待っていたのでそのまま不比等を座るように催促する

「バレたようだな」

「……はい…私としたことが職人への金の払い忘れて蓬萊の玉の枝が偽物だとバレてしまうとは思いませんでしたよ…」

「それ、お前のせいじゃね？」

「……ま、まあそうですね……」

Orz状態で落ち込む不比等

その姿はある意味やりきった男の姿そのものだった

まあ女に、未練たらたらなところは男とは言えないけれどある意味男だ

たらしの意味で

……いや待てよ……作戦は失敗したが、あながち悪い方向には進んでいないかも……

俺がいない状態だったら、不比等は輝夜が帰ってしまうことに更に落ち込み、完全に壊れ、手に負えようのない状態になってたかもしれない

だが俺という存在が輝夜を月に返さないようにすることによって少しでも希望があると思っているのだろう

「そう落ち込むってまだチャンスはある」  
不比等に近づき、肩に手をぽんっと置く



すると、不比等は顔を上げ表情を和らげると

「そうですね…」

と、言って微笑んでみせた

「……その微笑みなんかムカつくな」

「えっ!?! なんで!?!」

―輝夜side―

「今日は満月…か…」

そう、今日は満月

約束の日であり、忌々しい日

「…はあ……」

私の周りを囲むようにある帳の隙間から見える景色はいつもと変わらず、何事もなく平凡のままだ

「つまらないわ…」

いつもと違うところと言えば、少し洛中の方が騒がしいところだけ

「私が月に帰ることに騒いでるのかしら…？」

そうだったら、私は軽く国を傾けたことになるのだろうか？

「ふふっ…永琳に自慢できるかもね？」

事実、たくさんの権力者が私を求めた

財を使い、身を使い、ありとあらゆる手を使い、私を求めた

はつきり言えば面倒だったけれど悪い気はしなかった

「でも、暇なのはどうしようもないわ…」

月での暮らしは暇はしなかったけれど、退屈だった

退屈しなかった時といえば永琳と話してる時か、樺憫ちゃんと遊んでいる時ぐらい

「…………ふう…」

永琳は私の世話係として色んなことを話してくれた

あまり多くは語らなかったけど昔のこと

今作ってる機械のこと

樺憫ちゃんやタナトスのこと…

まあ昔のことはタナトスからたくさん聞けたからいいか…

「ふふっ…ついつい口元が緩んでしまうわ…」

手で笑っている口元を押さえる

樺憫ちゃんの方は、私が小さい頃から遊んでくれたし、月で唯一の妖怪とか最古の妖怪とか言われてたけどそんなこと気にすることじゃない

彼女は私の友達の一人であることは確かだ

でも、満たされないものが心のどこかにあった

温室でぬくぬくと育った野菜の様な私には満たされなかった物

「刺激なんて求める物じゃなかったのかもね…」

そう、刺激だ

だから私は、自ら蓬萊の菓を飲むという…罪を、贖罪を、大罪を…犯した

今考れば愚考の愚行、アホらしいはなはだしいことだったのかもしれない

でも、今はよくわからない

不死になることは、自らの命を絶つ行為よりも、酷く醜いことなのはわかってる

それは、自分から進んで怪物になるようなものだ

そうまでして、生きる価値のある世界なのか？

逆にこの世界にとって私は生きる価値のある人間なのだろうか？

まあ考えてもしようがないことかもしれないけれど、幸い、考える時間なんてこれから嫌と言う程たくさんあるし：

「これから、じっくり考えればいいわ」

# ―輝夜side―

ただいまたぶん七時  
夕方といわれると微妙な時間帯だ

んでもって今、輝夜の屋敷の庭に来ている

夜の都は予想以上静かで、屋敷の庭では、鈴虫やらの虫達が綺麗な音色で鳴いている

秋の夜は涼しくて好きだ

「ねえ、一人でいいの？」

そんな感じでぼけーっとしていると、屋敷の縁側で座ってる輝夜が聞いてきた

輝夜の言う通り庭には俺以外の人は、ひとつこひとりもない

「ああ。どうせ人がいても邪魔になるだけだろうし、それに今日は都合が悪い」

今日、約束の日は満月だ

人がいれば俺の本当の姿を見てめんどくなことになること限らない、それに戦闘になったら邪魔になるだけだ

「ああなるほど、元の姿を見られたら、めんどくさいことになるわね」

「そういうこった」

というか、早く来て欲しいくらいだ

正直言うと、すぐにでもタナトスの元の姿に戻ってしまいそうで、それをなんとか能力で押さえつけているのが現状である

「確か結構前に、永琳に貴方の映像を見せてもらったけれど、あの時の貴方は神というより化け物の方がしっくり来たわ」

「……そうツスカ」  
化け物と言われるのは覚悟していたが、流石にはっきり言われると  
なんだか複雑な気分だ

「拗ねちゃったかしら？」

「拗ねるかよッ!!」

「ふふふふっ…」

久々にキレちまったよ…屋上行こうぜ…

「そういえば、永琳と会うなんて相当久しぶりなんじゃない？」  
笑うのを止めると輝夜は聞いてくる

「まあ…そうだ、な…」

「…あまり長くは感じなかったけれど」

確かに永琳に会うのは久々になる

何千、何万、いや何億か？たぶんそれぐらい会っていない  
というか、単位がアホみたいに大きすぎだろjk  
それだけ生きてるの俺もアホみたいなものだが

「…ふーん」「普通の人にとっては途方もない時間なんでしょうね」

「お前も薬を飲んだ時から俺や永琳と同じく何万、何億生きる運命になったから、覚悟しとけよ？」

輝夜にそう言うのとニヤリと笑ってみせる

「おお、怖い怖い」

「絶対舐めてるだろお前」

――輝夜 side――

彼と話していると時間が早く感じる

まるで録画したテレビを早送りしているみたいにな…

なぜ、そんなことを言ってるんだ？って？

彼と、なんとなく話してたらいつのまにか、月の向こうから月の迎えが来ていたからだ



うっかりしてたわ…

「おーおー、来てるじゃねーかー」

タナトスが緊張感の無い笑い方をしながら言う

「永琳がいるんだからまだ攻撃しないでよ？」

月の使者達は絵本から飛び出したような神秘的な雲状の物体に乗っている

まるで地上の人間達に格の違いを見せつけるように…  
地上を嫌う月の住人らしいというか…

「それぐらいわかってるって」

すると、こっちに向かって飛んでいた使者達の動きが止まった

「…輝夜、誰かこっちに来るぞ」

と、タナトス言う頃には二人組の人物が飛んできた

そう…あの二人だ…

「どうだったかしら？地上旅行は？」  
そう言いながら二人は庭に降りる

「なかなか暇だったわよ永琳……」

「そう、それは良かったわね輝夜」  
そう言い微笑む永琳

もちろん降りてきたのは永琳と樺憫の二人だった

「そんな呑気に話してる場合かよお二人さん？」

「そ、そうですよ！話してる時間なんてありませんよ！？」

タナトスと樺憫が言う

それは一理ある

すると永琳は不思議そうな顔をしながらタナトスの方を向く

「あら？ここの防人はたった一人だけなのかしら？」

「警備がザルなのでしょうか？それとも輝夜様が我が儘過ぎて嫌わ

れたとか？」

「…樺憫あんたねえ…はあ…まあ元気そうだなによりだわ…」

「ハハッ言われたな輝夜」

無邪気に笑うタナトス

「うっさいわね…」

確かに『少し』我が儘なのは否定できないけど…

「んー…？その人と随分仲がよろしいですね輝夜様？…もしかして結婚相手とか…？」

樺憫が不思議そうに呟く

「……ぷっ…くくく…w」 「永琳…あんた」

「くく…ごめんなさいw貴方が結婚するなんてちょっと想像出来なくて…ww」

お腹を抱え口を手で押さえ笑い声をあげないようにする永琳

「永琳…本気で怒るわよ……」

私は笑う永琳をキッ！と言った感じで睨む

「ハッハッハッ！仲が良くて結構結構！」  
すると空気をあえて読まなかったのかタナトスが割り込む

「……………」

「……………」

「……ぷっ  
w」

――輝夜 side――

――永琳 side――

「…って、そんなことをしてる場合じゃないわ」

「誰のせいですか…」

私達と一緒に来た使者の方を見る

奴等は私と輝夜の地上に逃げる計画を知らない  
言うならばその計画の障害、はつきり言えばお邪魔虫

…だが、こちらには私と樺憫がいる  
まあ戦闘覚悟で立てた計画だからなんとかなる

輝夜は不死だからそこはなんとかなるが…

第三者の雇われた侍被れの落ちぶれた浪人みたいなやつを巻き込む  
のは少々面倒なことになる可能性もある…

用心棒を雇ったことは輝夜から連絡されていたけれど…  
どう撒こうか…

…いつそのこと殺す？

いやいや、協力者を消すのは流石にやり過ぎなところがある  
あまりにも非人道的過ぎるわ…

「貴方…戦えるのかしら？」

「あ？ああ、あれぐらいなら大丈夫だ」

…輝夜言うにはかなり手慣れらしいが………

「やるのか…？」

浪人が私に聞いてくる

「…ここは考えるよりも行動した方が早いわ」  
「…やるわよ」

「YES マム！」

「おっけ」

「任せたわよ」

私の言葉にそれぞれの反応を返す

「頼りにしてるわ。樺憫」

返事をする樺憫の頭を私は優しく撫でる

「…：／／／／」

樺憫もまだ子どもっぽい所もあるが随分頼もしくなった…

「タナトスも宜しくね」

「ちょWおまWW名前WWW」

……ちよつと待てちよつと待てちよつと待て…

…タナトス？

「ちよつと待って輝夜、貴女今タナトスって言った？というか言つたわよね？」

そう言うとき輝夜は思い出したような顔をする

「あ、そう言えば言っていなかった。彼、タナトスよ」と言い、タナトスと呼ばれた浪人の方を向いた

「輝夜…あんたって…」

タナトスと呼ばれた浪人は私の顔を見ると表情を引きつらせ、顔を青くする

「…あんたって人はあああああああああああああああッ！

「？」

「な、なに！？いきなり叫んで！？」

「タナトスがいるなら言っておきなさいッ！？  
ガッ！」

私は輝夜に拳骨を食らわせる

ちなみに私の教育方針は『怒る時には徹底的に怒る』  
それがモットー

「イタッ！？…あ、うん、それはごめん」

「あ、うん、それはごめんじゃないわよ！？タナトスがいるならもう少しまともな計画を立てることが出来たのに、貴女って人はッ！」

「ちょっと待て！待てよ！待つんだ！？永琳も怒りたい気持ちを抑えて…びーくわいえっとびーくわいえっと…おk？」  
そこにタナトスが仲裁に入る

でもそんなこと関係無い

「あんたもあんたよッ！！今の今までのほほんと地上で生活して！？連絡ぐらいしなさいよ！！」

「れ、連絡なんて出来る訳ないだろうッ！？今の地上にそんな技術力  
は無いのはわかってるだろ！？」

タナトスも必死に食い掛かってくる

「…私達の町に連絡手段なんて物たくさんあったと思うんだけど



？」

実際私達がロケットで月に逃げた時、町はそのまましておいた筈だ  
それにその連絡手段が動いてなくてもタナトスの能力ならなんとか  
出来る筈

だが、タナトスは私と目を逸らした

「あゝ…えーっとな…お前らが逃げた後、襲ってきた妖怪達を死体  
の山にしたんだが…町も瓦礫の山にしてしまったから…その…  
まあ！そういうことだ！」

「…上手いこと言って誤魔化したつもりみたいだけど無駄よ…ペッ」

「吐き捨てられたッ!？」

「まあそんなことは置いというて」

「置いとくなよッ!?! たぶん感動の再開だぞ!?!」

…タナトスは相変わらず変わってないわね…

「…しょうがないわね…樺憫、言ってやりなさい」  
樺憫をタナトスの前に行かせる

「…えっと…お久しぶりです。…髪切りました？」

「お前はいつタモさんになったんだ…」

「噛み切りました？」

「何を噛みきったんだッ!？」

「……………」

「……………」

「…………フッ…」

「…なかなかのボケだったぞ樺憫」

「タナトスさんこそなかなかのツツコミでしたよ」グッ!!

そう言って二人は強く手を握った

え？なにこれ？

—永琳 side—

「で、どうするんだよ」

散々色々話してたが、全く話が進んでない

まあさっきまでの茶番は楽しかったけれどな

そういうことで俺が話を切り出す

すると永琳がめんどくさそうな顔をして口を開けた  
「もうタナトス、あんたが特攻してきて」

「…まあいいけど…」

「あら？素直ね？」

「前までこんな調子で付き合わされたからな…」

「嫌味かしら？」

暗黒微笑を浮かべる永琳

笑顔が素敵ッスよー（棒）

「でも良いのかよ？彼処の奴等部下みたいなもんだろ？」

「良いのよ…犠牲は付き物だから」

という割りには少し悲しそうな顔をする永琳

「…そーかい」

「じゃあ頑張って」そう言うとは今度は優しく笑いかけてくれた  
というかまともに笑い掛けてくれたの初めてじゃないか？

「おう！」

永琳に答えるように言うとは元のタナトスの姿に戻り俺は飛んだ

「ブレイブザッパー!!」

月の奴等と輝夜達との距離は割りに近い  
だから永琳達が逃げる準備をしてる間、なるべく月の奴等の注意を  
俺に向けなければならけないけない

「人使い荒いのはほんと変わってないけどねッ!」

そんなことをぼやきながら月の使者を薙ぎ倒していく  
人数はそう多くないが、銃のような武器を持ち、それを撃ってくる

ダダダダダッ!!

「あ、ヤバ…」

ドカアアアァン!!

月の銃は小型だが、威力は相当な物で派手な爆発音とともに俺の頭  
が吹っ飛んだ

「物騒過ぎるだろおい」

だが、頭が吹っ飛んでも俺にはなんともない  
すぐに元に戻るしな

でもよお……地上にそんな銃なんて物持ってくんなよ…

どれだけ警戒してるんだよ月の奴等は…

とりあえず【貫通無効】のスキルを使い、爆発は無理だが銃撃だけでも無効にする

ダダダダダッ！！

不死の俺にはあまり使う意味は無いが、邪魔な攻撃を防いでくれるので非常に便利だ

「…円月殺法！！」

刀で描いた円からレーザー状の赤い光が飛んでいき敵を貫いていく

月の兵隊はなすすべもなく赤い光に貫かれる

「…これで最後だ！」

最後の一人を叩き切る

斬ッ！

「…ふう…戻るか…」

血の付いた刀を振り払う

まるで神の奇跡によって産み出されたような神秘的だった雲の上は、  
血の付着したズタズタの布や肉の塊が散らばり見るも悲惨な光景を  
強調させるような死刑場になっていた

神秘的の言葉の欠片もない

「ん？…あれは…」

と、戻ろうとした時何かを見つけた

俺は惹かれるように肉片の中の混じってる何かを手取る

「…キルゴア中佐？」

キルゴア中佐とは黒い全身タイツみたいな服を来た某魔女っ子（笑）  
が使う武器だ

簡単に説明するとトンファー型の対戦車グレネードランチャー

「なるほど…これで俺の頭が吹っ飛んだのか…」

だが、キルゴア中佐とは少し違い月の技術で作られた物だからか、

霊力で弾が発射されるようだ

ぼんっ！

ひゅゝゝ

ドカァァン！

「使えそうだから持っていくか…」

キルゴア中佐を持ちながら俺は輝夜達のいる屋敷に戻った

「…で、準備とやらは出来たのかよ…」

屋敷の庭に降りたが準備という準備はしておらず、樺憫が大きな唐草模様の大きな風呂敷を担いでいるだけ

あ、上に俺の人形が…

「まさか…準備って…」



「そうよ、荷造りよ」

「やっぱりかいッ!!」

荷造りというだけあって、中には主に輝夜の着物が入っているらしい

月の技術でなんとかならないんかい…

「いいじゃない! 私だって女の子なんだから!!」  
と、しおらしい?ことを言う輝夜

…どうせ将来あんた干物ニートになるんだから見せる人なんていないだろ…」

「五月蠅いわね!!」

おお…心の声が盛れてたw

「樺憫重くないか？」

輝夜のやつはほっという樺憫の前にしゃがんで聞く

「いいえ、これぐらい平気ですよ♪」

おお…重たいだろうに笑顔で返してくれるとは…永琳はちゃんとした教育をしてくれたんだな…ほんとええ子や…

「……はぁ…」 チラッ

「な、なによ…こっちなみながら溜め息なんてついて…」

「いんやなにも」

「危ないッ!!!!」

まさにその時だった

ダアアアン!!……

「ッ!？」

「なんだッ!？」

…一発の銃声…

「な、なんで…!？」

…そこに居ない筈だった…

「…ぐっ…お怪我は…ありま…せんか…輝…夜様…っ…」

…どうして気付けなかったのか…

…彼は彼女を助ける為に…

「う、嘘だろ！不平等アアアアア！！」



## 俺的竹取物語 下（後書き）

真面目に書かずにもう少しネタを増やそうかな…

## 俺的竹取物語 後日談（前書き）

ネタが無いのではなく、ただ書くのが遅いので更新が遅くなる首凝りです

まあ今回は早かったですけど  
とりあえず言います

永夜抄組キャラばっかじゃね？

## 俺的竹取物語 後日談

「あの時は生きた心地がしませんでしたよ」

不比等がそんなことを言いながら俺の横で茶を啜り、笑う

「そりゃあ体にあんな大きな穴がぽっかり開けば、生きた心地なんてしないだろうな」

みなさんどうも、ご存じの通りタナトスです

え？ 挨拶はどうでもいい？ 輝夜達はどうしただつて？

そう急かさんなって…

実は言うとおの夜からは二日程経っている

もちろん、輝夜達はちゃんと逃走に成功した

最適な逃げ場として迷いの竹林と協力者を紹介してある

「正直今生きていることに驚きですよ」

で、今は、地上に来たんだから楽しみましょう！

…と、まあ修学旅行で生徒よりテンションが上がってる先生みたいなノリで、女子三人水入らずの旅行に出てるとか出てないとか…

行動力のあるいいが…あいつ等本当に逃げる気あるのかよ…

ちなみに輝夜は旅に出るのは反対した

彼女曰く、めんどくさいということらしい

もうこの時代から既にニートが始まっていたのか…

「ははっ俺が死神だったことに感謝してくれよ？」

「ええ、ありがとうございます」

お互い冗談混じりに笑いながら言う

…笑い話で終わってるが本当に不平等は一度死にかけた



あの夜、輝夜を庇い不比等は一発の銃声により撃ち抜かれた

見事輝夜には当たらなかったが代わりに不比等の半身が吹っ飛ぶ程の穴が空いてしまった

しかし!! (マダオ風

死神の俺がすぐに治しましたW

うはW W W Wメシアライザー強すぎW W W W W W W W W W W

「でも私が死にかけだったのにも関わらず「なに諦めてるだよ!」とか言って躊躇なく蹴りましたよねタナトスさんは」

「…ま、まあ生きてるから良いじゃないか」  
苦笑いで答える俺

そのまま死ぬとかねえーよ!!とかツツコミたくなったからした

反省はしている、後悔するつもりは特に無い

「確かにそうですね」そしてなんやかんや言って笑って許してくれる不平等

いつかその優しさが身を滅ぼすぞ…

あ、一回死にかけてるか…

「そうだな…」

今更思ったが不平等とは何故か馬が合う

本当に何故か…

今だって縁側で茶を飲みながら俺の能力で作り出したカステラを食っている

うむ、実に旨い

食べれるっていいね

「あの：お届けものが：」  
すると妹紅が横に立っていた

何故か不安そうな顔で：

「ご苦勞様、妹紅：？どうかしたのかい：？」  
不比等も心配するような顔をする

「あの：その荷物が：輝夜姫様からなんです」

「な、なんだって！？」 不比等はいきよく立ち上がると湯飲みを地面に落としてしまった  
勿体ね

「その荷物を持ってくるようにすぐ言ってくれ！！あと！妹紅もこのお菓子残しておくから後で食べていいからね！」

「は、はい！？」  
そういうと不比等と妹紅すたころと歩いていってしまった

「：うん、実に旨いお茶だ」

「これです…」

「壺だな…もぐもぐ」

「みたいです」

部屋の真ん中には綺麗に包容された壺が置いてあった

「えーっと…一緒に手紙もありまして…」

という妹紅はおもむろに懷から一枚の紙を取り出した

「読んでくれ…」神妙な顔つきの不比等

「えー…拝啓不比等様…この前ことは本当に感謝します。それと意地悪な問題を出してしまつてごめんなさいね？別に試す気はなかったんだけどつい…ね？色々迷惑をかけてしまつたようで本当にごめんなさい。お詫びにこれをお贈りします 輝夜より」

輝夜…お前謝る気ないだろ

「……中身は？」

「…今開けます」

しゅるしゅる…

かぱっ

中を見ると明らかに怪しい茶色の液体が入ってた

「なんですかこれ…？」

「めんつ y じゃなくて…蓬莱の薬…不死の薬だ…」

「「ふ、不死の薬いい！！？」」

流石親子、リアクションがぴったりだ

「これを飲んで今日から君も不死にキラッ☆ みたいな？」

「そんな簡単になるものじゃありませんよ！！」

と、ツツコミを入れる不平等

妹紅のツツコミは父親譲りなのね

「で、どうするんだ？飲むのか？それとも捨てるのか？」

「確かに不死は憧れますが憧れるだけです、それ以上に魅力なんて物は感じませんよ…」  
と、呟く不比等

意外と冷めた反応

「…そうか…なら一つ聞いていいか？」

「ええ、なんでしょう？」

「…輝夜に会いたいかな…？」

「ええ、当たり前ですよ」

すんなりと答える不比等

やっぱり男だわあんた

はあ…正直に言うか…

「…月に帰ったとか言ったがありや嘘だ」

「えっ!?!? どういうことですか!?!?」

実は言うとは不比等には月に帰ったと言ってしまったのである

輝夜が逃げたあと不比等にどう報告しようか悩んでいたんだが…結局嘘の報告をしてしまった

十年越しの真実ならぬ二日越しの真実という訳だ

まあそんな気分で嘘の報告をしたのは俺が悪いのは自負してるけどな

「いやあ…なんか本当のことを言うのがめんどくさくて…」

「めんどくさいってなんですか!？」

「とにかく輝夜はまだ地上に居るから捜しに旅にでも出たら?」  
ジャブ

「…で、ですが…」

「ついでにそれも飲んじゃえぼ?」  
ジャブ

「い、いや流石にそれは!!」

「輝夜に再会できるのが何十年後になるかもしれないぞ?」  
右ストレート!!

「……………」

うつ向く不比等

うむ、綺麗に決まった

「まあ勝手にしな、時間は沢山あるんだ…」と、颯爽と部屋から出ていこうとしたその時！

「私も男です！これぐらい飲みますよ！！ええ飲みますよ！！」

なぜか今の言葉に触発されたのか壺を掴むとそれをがぶ飲みしはじめた！？

お前はアホかッ！！？

「ゲホッゲホッ！？」

「言わんこっちゃないよ…ほら、置いて置いて…」

「ゲホッ…ずいゝまゝぜんゝ…ゲホッ…」

むせる不比等の背中を摩る

ヤムチャしやがって…

「本当に不死の薬なんですかこれ？どう見ても腐った水ですよこれ…ごくろ…」妹紅は残り少ない不死の薬を手で掬うとそれを飲んだ！？

「腐った水じゃなくて」「おまあああああああああ！！！！」



飲んじやったよこの子!?!? 原作通り飲んじやったよこの子!?!?  
腐った水って言うわりには飲んじやったよこの子!?!?!?!?!

「妹紅…お前ッ…!?!?」

「あ! お父様! 髪の毛が!?!」 妹紅が言うともみるみる不比等の髪の色から色が抜け、真っ白になっていく  
と、同時に目も兎のように真っ赤な燃えるような紅色になった

「妹紅ッ!?!」

すると、妹紅も不比等同様に白髪になっていく

「わっ!?!? わっ!?!? なんですかこれ!?!?」

「はあ…」

こいつ等もこいつ等で大丈夫かよ…

…翌週…

藤原親子が旅に出るということで一週間程、稽古をすることになった  
不死になったとはいえ、スペックは人間のままだ  
筋力面とかは今更どうにもならないのから、主に霊力などの基本から  
応用などを教えることになった

自分を守る力が無ければ生きていけない

不死に対して変な話になってしまいが、事実そうなのだから仕方が  
ない

…んで、

「お父様あー♪わあー♪」

「妹紅ー！気を付けるだぞー！」

「はーい♪」

一週間経つ頃には風をビュンビュン切りながら、縦横無尽に空を飛  
べるようにまでなっていた

もちろん弾幕も撃てるまでにした

うむ、俺の教え方がよかったんだな。うんうん…

「…もうそろそろ出発日ですね…」

「ん？…ああ」

不比等と並びながら妹紅を見守っていると、寂しそうな顔をして言  
った

「まあ精々頑張るんだな」

「ええ…」

「妹紅に心配させるなよ？」

俺は顔をにやつけながら不比等に聞く

「ははっ、そんなことさせませんよ。……確かにあの子は隠し子で  
したが巻き込んでしまった以上、私があの子を……いや…私の大  
切な娘を何があろうと絶体…絶体…守りますよ」

「…ああ」

不比等はいつも通りの笑顔を見せると妹紅に視線を戻し、自分の中  
の何かが吹っ切れたような、どこか哀愁の漂う清々しい顔付きでじ  
っと妹紅を見つめていた

ああ…

…こいつも親なんだな…

…翌日…

「…ここでお別れですね」

「ああ、俺はこっちだからな」

都を出て、今は都のはずれにある道にいる

「なら私たちはこっちなので一緒に行くことは無理ですね…」

妹紅が寂しそうに呟く

「お前にはお父さんがついてるんだ。だから大丈夫…な？それにまたいつか会えるんだしよ」

と、言い妹紅の頭を優しく撫でる

「……はい…」

笑いかけてやると妹紅も悲しそうな顔をやめ笑ってくれた

「…本当にお世話になりました」  
深々と一礼をする不比等

「大したことなんてしてねえよ。俺には旅の餞別を渡すぐらいしか  
できねえからさ」

「そんなことはありません」  
不比等の後ろにはキルゴア中佐が背負ってある

流石に武器を持たずに行かせるのは少々不安だったのでとりあえず  
一丁渡しておいたのだ

ついでに使い方は稽古をしてる時に教えた

「私は貴方に二回も命を助けてもらっている。貴方には本当に感謝  
しきれないんです。本当でしたら私から何かしてあげたいくらいな  
んです！」  
語気が強くなる不比等

そう言われてもなあ…

「そうだな…恩人のままは少し嫌だからな……そうだ。なら、俺の  
友人になってくれよ。」

「喜んでなりますよ。というか、そもそも友人じゃなかったのです  
か？」

「ま、まあな…」

「クスッ…タナトスさんらしいですねW」

今更なことは重々承知してるわ！

「あ、あの！？」

笑っていると、妹紅が声を上げた

「ど、どうかしたか？」

「あ、あの…私も…友達ですよね…？」

恥ずかしいのか両手の人指し指をちょんちょんさせがなら聞いてくる妹紅

正直辛抱堪らん

「ああ、当たり前だろ」

妹紅にニカッと笑い掛ける

「は、はい！」

すると、妹紅も顔を上げ嬉しそうに返事してくれた  
妹紅さんが嬉しそうで何よりです

「とりあえず言いたいことも十分言えたし！頑張れよ二人とも！」

「ええ！タナトスさんも」

手を握り、笑いあうお互いその場をあとにしたのだった：

俺的竹取物語 後日談（後書き）

タ「なあ永琳。不死の薬の正体って一体なんなんだ？」

永「昔、貴方の体から結構な量のサンプルを取ったじゃない」

タ「ああ、あんまり良い記憶ではないが」

永「あれの煮汁」

タ「えっ」



神々の集会（笑）（前書き）

みなさんがどう思うかわかりませんが、私は香霖は好きな方です

とりあえず新作です  
どうぞ

## 神々の集会（笑）

神無月：旧暦で言う十月にあたる月であり、日本中の神々がこの出雲の国：まあ出雲がどこにあるか知らない人はいないと思うが、現代で言う、鳥取県の出雲大社に集まって集会を行う月でもある

「はあ〜…」

で、

「そうため息などするな。…まあ気持ちはわかるが…」

「同情するならなんかくれ…」

死『神』である俺も毎年好例の如くこの会合に出るのである

どうも、若干鬱気味のタナトスです  
ただ今出雲大社に來ています

流石に日本中の神々が一斉に集まるということはあってもの凄い人数の神達がこの出雲大社にいる

初めて見る人だったらまるで田舎から都会に初めて上京して、人の多さにびっくりした若者みたいな気分になるだろう

と言うか、毎年思うのだから、出雲大社じゃあ狭くないのだろうか？

そこは神様クオリティな能力でどうにかしてるのか？

…気にしないのが一番だな

「今回の集会はなにか重要な話があるらしい」  
項垂れてる俺の横に座ってる神奈子が呟く

…へえー…

というぐらいしか言い様がない

何故かと言うと、

…重要な話をした試しが無いからだ…

どうしてなのかは後々話そう…

「重要なお話？…一体なんだろう？」  
神奈子の隣に座っている諏訪子が呟く

言うのを忘れていたが神である諏訪子と神奈子も、もちろん参加している

ちなみにどんな感じに座っているかというと、大きな円型のテーブルにそれぞれ力の強い神々が座っており、それを大量の他の神達が囲んでいると、言った感じだ

四季映姫に秋静葉、秋穰子も居るようだ

俺は大きさに座れないので神奈子の横で立って待機している

なら人間の姿になれば良いじゃないと思うだろうが…そういう訳にはいかない

理由は後々わかるさ…

「増えてきた人間の間引きとか…」

「涼しい顔でさらっと怖いこと言わないでよ神奈子…」

「…お前そういうキャラだったか？」

「冗談よ」

「せめて顔だけでも笑ってて…」

そんな風に俺達が駄弁っていると

「静粛にッ!!」

一人の神が叫んだ

その声で騒がしかった会場が急に静かになる

そして一息の間の後

「…天照大御神様が御入りになるぞおお!!」

先程よりも声が響く

「なッ、なんだって!？」

「ど、どういことだ!！」

ざわざわざわ…

ざわ…ざわざわ

その一言にまたに神達が騒ぎ始める

「…そうとうのようだな」神奈子が真剣な顔付きで言う

天照が集会に来るのは珍しいことでもなんでもない

だが、天照がこうも『早く』集会に来るのは非常に珍しいことであ  
った

普通、天照はどの神よりも大抵一番遅くに来て、一番最初に帰ると  
いうのが定番だ（俺から見ればただのサボりにしか思えない）

実は言うところ、諏訪大戦の年の集会でもこうも早く集会に来ることは  
なかった

…それ程のことだろうか

…うーむ…

…カタッ…カタッ…

そんなことを考えているとその張本人が来た

「道を開けろ！！」

誰かの一声によりザッ！という感じで道を開く

「ありがとう」

天照がそんなことをにこやかに眩きながら、黒髪を靡かせて、こちらに向かってくる

天照は花魁が着ている様な無駄に豪華な着物を着て、背中には雷神のでんでん太鼓のやつ、太鼓の部分を、これまた豪華な鏡に変えた様な物をを背負っている

無駄に豪華とさっき言ったが、その豪華な着物が似合ってしまうほど美人なのも確かなのである

だが、俺にとっては美人だからこそ困ることがあるのだ…

いや美人の方が良いんだけど…

「あら？」

そんなことを考えていると天照がこちらを向いていた

「あ、」

俺も思わず声を上げてしまう

嫌な予感…

そして長めの沈黙が続いたと思うと

「ターナートースうううううううううう！！！！」

めっちゃめっちゃ嬉しそうな顔をして勢いよく抱き着いて来たのだ

俺は避けないで、そのまま凸ってくる天照を受け止める

「おひさ〜タナトス〜♪」

天照は嬉しそうな顔をして俺の横腹辺りをスリスリしてくる



「…お、お久しぶりです天照様」

俺もスリスリしてくる天照にガッチガチになりながらも挨拶をする

「ん〜？そんな畏まらなくても良いのに〜♪」

ゆっくりゆっくりと焦らす様に後ろに回ると耳元（耳無いけど）でニヤニヤしながらそんなことを呟く天照

非常に辛い…主に視線が…あと顔近いッス…

本当だったら顔が緩みっぱなしだっただろうが、これ程表情が無いことを感謝したことはなかった…

「そりゃまあ…天照様ですから…」

すると顔を少しムツつとさせた後、すぐにニヤニヤ顔に戻り、腕を肩から入れ自分の絡めさせると

「いつも言ってるでしょ〜？様なんて付けなくてもいいって…？」  
と、耳元で色っぽく言ってきた

諏訪子、頼むからそんな目で凝視しないでくれ…神奈子も神奈子で

呆れないで…

「まあどっちでも良いんだけどね♪」

「は、はあ…」

どうしてこうなったと、まさにピッタリの状況だが…

説明すると、天照様は俺のタナトス時の姿が非常にキュート(?)  
…なんだそうな

…だから俺のことを異様に猫可愛がりしてくるのだ

恋とかとは違うみたいで、どちらかと言うと、人間が犬とか猫とか  
の動物に向ける愛に近いから余計に質が悪い

なんか顔をすりすりしてくるし、勝手に俺の口(?)の部分のカタ  
カタさせて遊んだり、しまいには首輪までさせられそうになった程  
だ…

まあ…どれもナチュラルに抵抗して全部ダメだったけど…

それに集会がいつもまともに出来てないのも、大体この人のせいだ

あと関係無いが、いつも非常に密着してくるので天照の豊満な…む、む、胸がガガガガガガ…

「どうかしたのかしらあゝ？固まっちゃって…♪」

絡ませてた手を戻したと思うと、その手でいやらしく体を触ってくる

理性が冥界まで吹っ飛びそう（迫真）

俺はこの状況を打破する為に、SOSの合図を諏訪子に送る

すると諏訪子は俺の合図に気がついた様で、天照に緊張気味に声を掛けた

「…あ、あの…ほ、他の神達が見てますからその辺で止した方が…  
…ほらパルパ r」そんなこと私は気にしないけれど？」…さいですか…」

「↑俺

諏訪子…いや諏訪子エ…

「…御戯れ中に申し訳ありませんが…重要なお話というは…」

諏訪子の助け船が虚しく撃沈していると、神奈子が痺れを切らしたのか天照に話し掛けた

神奈子：あんたは天使か：

：いや神か

「あ：そうだったわね。なら報告するわ」

その前に退いて下さらない？天照さん？

「注目！！」

元々注目を浴びていたのに更に視線が俺に降り注ぐ

なに？俺を視線で蜂の巣にしたいの？

「私達神は人間から信仰を貰い！願いを叶え！共存してきた！」

すると先程の色っぽい声とは違い、透き通るような声で、俺を演説をする机の様にして話始めた

「だが！！私達の存在を脅かさんとする存在が現れた！それは！仏教である！」

ガヤ：ガヤ：

：ガヤガヤ：

天照の力強い言葉で更にざわつく

「神奈子！！現在の状況を教えなさい！」

「はい。現在の信仰の分布状況を調べたところ、仏教信仰の勢いは留まらず、全国の四割を占める勢いです」

「嘘だろ…」

「だ、大丈夫なのか…」

ざわ…ざわ…

ざわざわ…

神奈子の報告により更に騒がしくなった

確かに信仰が貰えなければ神にとっては死活問題だ

「しかし！！」

だが天照は意外なことを言いはなった

「私はその仏教とは争いたくはない！もっとお互いに良い関わり方をしたいと思う！」

「お互い信仰を掴む者同士！好敵手にはぴったりではないか！！」

…あのさ…カリスマ性バリバリだけどさ…そろそろ離れてくれない？

それが無理ならとりあえず俺の頭の上にある二つのデカイマシユマ  
口を退かしてくれ…

「お互いに意識し合い！お互いに高め合う！我々神は仏教と！人間  
と！共に生きようではないか！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！」

会場の神々が一斉に声を上げた

「以上！！今日は解散ッ！！」

最後の一言を天照が言うと神達は帰っていった

「ねえ神奈子」

「なんだ？」

「…さっき思っただけど…これ、集会じゃなくて報告会じゃない？」

「……だな」

…数時間後…

「ねえ、頼みがあるのだけど」

全員が帰った後、何故か俺だけ天照によって居残りさせられた…

なんで俺が…

「頼み？」

「まあ頼みというより仕事みたいな物ね」  
何かを考えるような顔をする天照

いい加減は  $n(r, y)$

「どういう仕事内容でしょうか？」

「うん、さっき仏教とどうたらこうたら、とか言ったけれど…一つ問題あってね…」

「問題…？」

「そう、問題よ」

すると、天照は人指し指をぴんっと伸ばしたあと、俺の顔を両手で持ち上げる

「それはね…」

「遅いなあいつ」

「天照様のお気に入りだからしょうがないんじゃない？」

「…お？戻って来たみたいだぞ？おいタナトスー！」

「あ、ああ…すまない」

「？…どうかしたの？」

「ん？ああ…ちょっと頼まれ事をされてな」



「頼まれ事？どんな頼まれ事？」

「暗殺だよ…」

「暗殺？誰の？」

「…聖白蓮の暗殺だ」

「「え？誰？」」

**神々の集会（笑）（後書き）**

なぜだろう…BBA率が高いようn（ぴちゅーん

**聖★お姉さん（前書き）**

小説を書いてる時に、何故か偏頭痛を起こした首凝りです

とりあえず新作です  
どうぞ

## 聖★お姉さん

「そうですか…」

少し間沈黙が流れる

「わかったか？」

そして俺は沈黙を破るように聞き返しながら、暗い顔で下唇を噛みしめながら考えている聖に目をやる

そして聖が顔を上げると

「…はい、私を…私を殺して下さい」

俺の目を真っ直ぐな真剣な眼差しで見つめていた

ども、タナトスです

いきなり殺してくれなんてよくわからない冒頭から入ってしまったから、ここはちょっととした回想をしよう

あれは二時間ぐらい前…

「妖魔の尼だあ？」

「そうなのよーお兄ちゃん。事実、最近この町じゃそんな噂話ばかりなのよー」

今俺は、聖が居るとされる寺の山の麓近くにある村の団子屋の婆ちゃんの話を茶を啜りながら、聞きいているところである

「なんでまた物騒な名前が付いてるんだ？」

すると婆ちゃんは周りを気にするようにキョロキョロと見まわした後、顔を寄せて小さな声で言ってきた

「詳しい話はよくわかんないんだけどね、あのお姉ちゃん、妖怪となにかしらの関係があるとかないとか…」 「事実、寺に参拝しに行った人が、寺の内で人間らしからぬ者をみたらしいって話なんだよ」

「人らしかぬ者ね…」

正直、妖怪と関わりがあることがバレているとは思っていたが…ここまでバレていると非常に不安でしかたがない

近くの村にそんな風に伝わっているならのこと尚更である

「そうなのよ。私は何かの見間違いじゃないのかいって言ったんだけど、その人はずっと妖怪だ、絶対妖怪だって言い張るんだよ」

「見間違いねえ…」

俺は持っていた湯のみを横に置く

「なんだったかしら…動物、…確かネズミの様な耳をした子供を見た…とか言っていたような…」

「……………くッW…」

その言葉に俺は先程の不安さえも忘れてしまい、ついニヤついてしまった

「ナズーリン…もうちょっと警戒しろよW」

「ん？ なにか言ったかい？」

「…あ、いやなんにも…じゃ、これお駄賃」

婆ちゃんにお茶代を渡し、立ち上がった

「ありがとよ」「あとあのお姉ちゃんの所に行くつもりならくれぐれも注意しなよ」

それに対して俺はなにと言わず片手を軽く上げて婆ちゃんに合図を送った

「暗殺ね〜…」

で、俺は町を出た後、聖に会うために聖が居るとされる寺の山を登った

「俺はどっかのアサシンの末裔かだっつーの」

実は言うのと、別に聖を絶対暗殺しなければならない訳ではない

実際、天照からは暗殺せよ言われてるが、本当の所は我等が好敵手、仏達の頼みだったのだ

しかし、仏達も暗殺が目的ではなく『聖の俗世からの追放』というのが目的だった

なら、なぜ天照は暗殺と言ったのかと言うと…

「暗殺って言った方がかっこよくない？」

…と、まあ彼女の遊び心かららしい

紛らわしいわ！！と心の中で叫んだのは秘密である

「着いた着いた…」

そんな感じで思考をめぐらせていると寺の門のところに着いていた

「ムム、結界か」

案の定、寺を包み込むように結界が張ってあった



たぶん、誰かが来たときに知らせる為の結界だろう

「知られると面倒だな」

ということで、能力でペルソナにも出てくる某裏切りの魔女の持つナイフ【ルールブレイカー】を造り出し結界に穴を空ける

ザシュッ!!

「よっこらせ」

結界の穴を跨いで中に入る

「本殿はあっちか」

中は予想以上に広く、静かなものだった

「…怪しいな」

某どこかの諜報工作員の蛇さんみたいにコソコソせず足を鳴らして、堂々と歩いているが、全く人に会わずにいる

聖ではなくても他の村紗とか一輪とかに会ってもいいと筈思うんだけどなあ…

とりあえず本殿の扉に手を掛ける

「先ずは入ってみるのが一番」

そうすれば中に誰か居るだろうと考えていたが…

ガラッ

「はいッ!？」

「oh…」

中にはよくわからんが、何故かすっぽんぽんの産まれたままの姿の寅丸星がいた

「クソッ…あの時、カメラも作っておけば良かった…」

「キ、キアアアアアアアアアアッ!!?」

俺がそのユートピアみたいな光景を後悔しながら眼球内と脳内に永久保存（削除不可）をしていると、寅丸はけたましい叫び声を上げながら物（何処から取り出した?）を手に取り、もの凄い勢いで投げてきた

「ちよっ!物投げるなW危ないだろW」

俺はそれを【物理反射】で全て寅丸に跳ね返す

だが、それがいけなかった…

寅丸が投げた物に、あの宝塔があったのだ…

しかし、気付いた頃には時既に遅し、寅丸の投げた宝塔は既に目の前

【物理反射】で反射された花瓶が宝塔に向かっていく

「あっ…」

そして、派手な音を発ててぶつかると宝塔は…

「フツ…ヤムチャしやがつぬわーーーーー……ツ!!!!!!」

…爆発したのだった…

「今の爆発音はなんですかって…なんじゃこりやあああ!!!?!」

遠くの空では松田○作みたいなそんな声が響いていた…

「…で、星の宝塔が爆発したと…」

「はい…」

爆発から数分後、ナズーリンの叫び声に気が付いた村紗と一輪がすぐに駆けつけた

聖もその数分後に寺に到着し、今は聖が星に説教をしようとしているところである

「うう…」

しよぼーん顔で落ち込むの寅丸

「…はあ…お話でもしたいところですがお客様がいるので今日のところはやめましょう」

そういうと、慈悲ぶかい聖さんは立ち上がるとこちらを見て微笑んだ

「初めまして 聖白蓮と申します。先程はこちらの寅丸が迷惑を掛けてしまったようで…」

と、言って一礼をしたあと申し訳なさそーな顔をする

原因寅丸だけどな

「そう気にしないで下さい。怪我人も出なかったことですし…それに私が確認せずに入ってしまったことが原因ですから」

「いいえ、そういう訳にはいきません。これは私達の不始末なのですから、迷惑を掛けてしまった以上、私達が責任を取らなければなりません」

お互いに一步も引かず、自分への責任の擦り合いをする聖と俺

結局のところ、俺は美味しい思いも出来たし、別にどっちでも良いんだけどな

「聖ッ！！その人から離れて！！」

そんな風に話しているといきなり寅丸が聖の前に出るように飛び出てきた

その顔は、いつも宝塔を無くしてアワアワしている寅丸からは想像できない程の警戒の顔をしていた

「…どうしたのですか？ そんな大声を出して…お客様に失礼ですよ？」

だが、聖は聖で悠長に話続ける

「そんなこと言っている場合ではありませんッ!!」  
寅丸も叫ぶように言う

「さっきの爆発でうやむやになってましたが、この人が結界内に入ってきたということが分かりませんでした…この人間…ただの人間ではありませんよ」

まるで虎の如く、更に強く睨む寅丸

「知ってますよ？」

「…………へ？」

しかし、聖の返事により寅丸の言ったことが全て盛大にズッコけた

ちなみに俺はここで吹き出しそうになりかけた

「結界を解かず、それでいて誰にも知られずに寺に侵入、お見事です。」寅丸のことも気にせず淡々と言う

「ちょ！ちょっと待って下さいよ！！敵なんですよ！！分かってるんですか！」寅丸も必死に返す

少し驚いた顔を見ると聖は小さくため息をついた

「：まず、敵意が感じられません。それに強い敵意があるのなら、すでに貴女に攻撃をしてる筈です：違うかしら？」

「そ、そうですが：」

寅丸も聖の身の安全を考えて言っているのだろう

しょうがない、ここはてっとり早く話すか：

「寅丸の気持ちも分かるが聖の言う通り、俺は話があってここに来たんだ」

「言った通りでしょ？」

「……………」



しかし、まだ警戒するような目で見てくる寅丸

そりゃあそうだな

「お客様に立ち話させる訳にはいきません。どうぞ奥へ：」

そういうと俺は本殿とは別の客間に通された

寅丸も部屋の中に居るが、他にも外から数体のピリピリとした緊張にも似た気配を感じる

聖は黙ったまま、寅丸もこちらを睨んだままで話を切り出さない為、俺が話を切り出す

「とりあえず自己紹介しておこう。俺は死神のタナトスというものだ」

すると、寅丸は驚いたように目を見開きながら俺を見てくる

しかし、聖は方は納得と、言ったような顔をした

「なるほど、だから誰にも知られずに侵入出来たのですね」

何かなるほどかは、わかんないんですけど…

「なら私達も自己紹介をした方がいいですね。私は聖白蓮といいます。こちらで尼をしている者です。隣に居るのは、この仏様の替わりの仏様、…代仏と言った所でしょうか…寅丸 星です」

「先程は失礼しました。我同志と知らずに…」  
というと深々と礼をする寅丸

ん？同志？神と仏って違う存在だろ？

「ど、同志って…」

「あれ？知らないんですか？この日の本の国では、仏のことを外国の神、蕃神として受け入れてもらったんですよ。だから神も仏も人間にとっては同じようなものなんです」

「は、はあ…」

あらやだ。寅丸ってこんなキャラだっけ…？

…まあいいや

「まあそんなことは置いといて、本題に入ろう」

「そうですね」

その後俺は聖を俗世からの追放すること、その指示を出したのは仏達だったということ、俺の知っていることすべてを話した

——そして物語は冒頭に戻ると言う訳だ

…彼女ははっきりと殺して下さいと言った…

まあ世間的に殺してくれという意味だろう

だが、本当にそれで聖は良いと思っているのだろうか？

「あんたはそれで良いのか？」

「…仏に身を託す者、仏の示す道ならば私には二言はありません」  
しれっと当たり前田のクラッカーよろしく、普通に言う聖

「なら…あんたの願い…いつになったら宿願するんだ？」

「……………」

だが、俺が刺激するようなことを言うと、少しだけ体を反応させ黙ってしまった

はあ…しょうがない…もうちょっと刺激するか…

「あんたの夢ってのは誰もが平等である世界なんだろう…？それを叶える為にあんたは色々としてきた筈だ…だが、あんたはその夢を諦めるのか…？…ハッ！！それならさっさと諦めてしまえ！そんなことで折れてしまうような夢なんて持つな！口だけのそんな夢なんてそれは単なる幻想、理想でしかないんだよ！！」

俺はその夢をぶち壊すように、嘲笑するように、蔑むように言った馬鹿にし、踏みにじるように…

「…貴様ッ！！！」

その言葉に最初に動いたのは寅丸の方だった

だが、寅丸が立ち上がろうとしたその時、

「なっ！？聖！？」

聖がずっと手を寅丸の前に出し、静止させた

「黙って」

「…で、ですが…貴女の夢を…」

「黙ってて…」

聖は優しい話し方のままだが、同時に強い怒りを感じる

「……………」

渋々と言った感じで寅丸は座ると、聖は手を膝の上に戻し、ゆっくりと瞑っていた目を開かせた

そして、俺を真っ直ぐと見据えると

「貴方の言う通り、無茶で無謀な夢かも知れません。それに、私が軽い気持ちで夢を語っていたということにも気が付きました。ですが、それに気が付いた今、尚更私はその夢を叶えなければならないと強く、確信いたしました。」

先程とは違う、力強い声で確かに言った

「フ…初めからそう言えば良いのに……回りくどい言い方したのは俺だけど…」

「…どういことですか…」

まだ睨んでくる寅丸

どうしよう…なんだかくどいを通り越して、クセになって来そう…

「ん？ああ、俺の友達にな聖、あんたと似たような夢をもつ大妖怪がいるんだ」

「…………へ？」

さっきのこととは打って変わって、逆のことを言う俺に、はい？みたいな顔をしてお互いに顔を見合わす聖と寅丸

「それはどういふことなんでしょうか…？」  
不思議そうに尋ねてくる聖

だが俺はそんな聖を気にせず続ける

「まあ時間は掛かると思うが少なからずその夢を叶えると思うぞ？」

「は、はあ…」

なんのことやらみたいな返事をする寅丸

異論でもあるなら、議会でも開きなさい

「そこでだ、聖、あんたに頼みがある」  
と言いながら立ち上がる俺

「頼み？」

そして聖が不思議そうな顔をしたまま聞き返してくると

「その妖怪の夢の世界とやらを作るのを手伝ってくれないか？」

俺は聖にニカッと笑い掛けた



**聖★お姉さん（後書き）**

タ「なんであんな所で裸になってたんだ？」

寅「えっと…水浴びをしていたんですが、着替えを持って来てないことに気が付いて急いで戻ったらタナトスさんが…」

タ「どうしてナズーリン辺りに持って来させなかったし」

寅「あ…その手がありましたね」

タ「今更気が付いた…だと…」

## 乙女は夢見がち（前書き）

夢見る女ってのが一番質が悪い気がする

彼女とかいないから知らないけど

## 乙女は夢見がち

——その後、聖は紫を手伝うこと快く引き受けてくれた

彼女の夢を果たせる唯一の機会

それに自分と似た夢を持つ者がいたことを彼女自身、とても喜んで  
いた

——しかし——、

世間から身を潜め、隠れ住むことはどうしても免れることは出  
来なかった

その代わりになるとは思わないが、手伝うことを条件に新しい移住区と身の安全を紫に提供してもらうことになり……まあ……おあいこというかなんというかそんな感じに終わったのだった

で、

……新しい移住区を提供した所で聖達と別れたのだが……

「貴方いつも暇そうよね」

誰も居なくなった寺の縁の下で座りながら、俺は、紫とおしゃべりにしゅれこんでいた

寺とかそういう所は殆んどが静かな場所だと思うのだが

「……はあ……」

地主である聖達が居なくなった今、俺の溜め息が小さく響いていること以外は、ネズミの足音すらも聞こえない程、静寂に包まれていた

「…事実暇だしな」

だが今はそんなことよりも、地味に俺のことを草根なしの浪人みたい。だと紫に言われた気がしたのでそっちのこと方にテンションが下がった…

「ならちよつとぐらい私の仕事を手伝ってよ」私だって色々大変なのにと愚痴を溢す紫

「だからその暇を潰す為に時間を掛けて旅をしてる訳じゃないか」

我ながらスゲー見苦しい言い訳をしたなあおい

「旅ね…私もしたいわ…」

はあ…ため息をつきながら頬ずえを付く姿は、まるで金と時間を持て余した昼下がりのOLみたいで、意外とさまになっていた

紫にとっては何気ない仕草だが、俺から見たら十分過ぎる程魅力的な仕草だ

結構理性がヤバイ

「なら一緒に来るか？」

すると、紫は俺の言葉になんともだらしない声で

「へ？」

と、驚いたように反応した

「も、もう一回、言ってく、くれないかしら…？」

「いやだから、一緒に来るかって言ってるんだが…」  
なぜか激しく動揺し、同時に興奮してるようにも見えない紫の様子に、俺も少し動揺しながら言うと

ガバッ！

「お、おい…」

カリスマガード、貧乏ガードのポーズで、ぶつぶつと何か呟きながら頭を抱え込んでしまった

紫なら乙女ガードと言ったところだろう

「お、おい…」

「……………」

乙女ガードとかそんなことはつきり言ってどーでもいいことなんだが…声を掛けても石のように全く反応しない紫が心配でしょうがない

というか冗談で軽く言ってみただけなのにどうしてこうなった…

もしくは俺が引かれたのか…

いやいやいやいや…それはない、と…信じたい…切実に…

「うーむ…」

しばらく俺の灰色の脳みそで考察してみよう

実際灰色かは知らんが

チラリと紫を見してみる

「……………」

まだ微動だせず、動かないままの紫

…ハッ!?

まさか!?!…も、もしかして、もしかしたら…ゆかりん……



…厨二病にでも目覚めたのか…？

…それならかなりのヤバイ状態だ！？

進行を今すぐにでも止めなければ数百年後、彼女はあられもないただただ見苦しいだけの過去の幻影に悩ませるだろう…絶対に

事実、俺も人だった頃、訳もなく一人自分の部屋で、南斗鳳凰拳やら、もつと輝けええええ！！みたいなことを叫んでいた時期があった

今考えても恥ずかしい黒歴史だったなあ…

うしッ！とりあえず、この壊れ欠けの紫を現実に戻す為に紫をどうにかしなければ！！

「紫大丈夫かあ…?」

なるべく優しくゆっくりと紫を刺激しないように肩に手を置く

その時――

「ひゃい!!」

紫は体を大きく反応させ、短い叫び声を上げた

「のおっわッ!」

思わず俺も、ワワワ、忘れ物をした高校生みたいな驚き方をしてしまった

「ビックリ…したあ…」

はあ…はあ…と息を荒くさせる紫

「…ッ!」

紫のことだから何時も通りふざけていると思っていた

けれど…

「…はぁ…はぁ…どうした…の…?」

息を荒くしながら胸を押さえ顔を紅くさせる紫が…

色っぽくて…可愛らしくて…

——そしてなにより、

人形如く整ったその綺麗な顔に見蕩れてしまっていたのだ——…

「タナトス…？」

すると紫は心配そうに顔を近づけてくる

普段どこか怪しく、弱さを見せないような紫が…

「うっ…」

弱々しい垂れ目と艶っぽい唇に不安感を感じさせる表情で更に顔を覗かせてくる

ついでに頬を伝う汗の匂いに、女性の独特の甘い蜜にも毒にも似た匂いが混じり、俺の鼻を刺激するせいで余計に意識してしまう

「……………」

更に近付こうする紫

流石にこれ以上は俺の理性がヤバイと言っているので思わず、

「あ！いや！お、俺は大丈夫だ！！」

と、言っ紫と少しだけ離れて距離を置いて目を逸らしてしまった

あんな顔されたら逆に俺が壊れるって…！

「紫のほ、方こそ大丈夫なのか!？」

紫もさっきまで風邪を引いたみたいに顔が真っ赤っかで辛そうにしていた筈だ

風邪じゃなくても病気だったら大変だと思い紫の方に振り向くと

「私? 私は大丈夫だけど?」

「……………」

なんともケロツとした態度で何事もなかったような表情をしていた

「貴方こそ顔が真っ赤だったけど大丈夫なの?…♪」

「あ、いやそれは…」

何も言い返せず、黙ってしまいそうになる

紫…まさかお前…俺を騙しやがったなあああああああああああ

ツ  
!  
!  
?

「やっと気がついたみたいね♪」

やっぱり騙されてたのねええええええ……！！

色々と俺恥ずかしいーッ！ほんと恥ずかしいー！！

「可愛かったわよ？顔真つ赤にさせて…フフ」

そして扇子で口を押さえ妖艶な笑い方をする

やっぱり完全に遊ばれた……

「フフ……こういうことに慣れてないのかしら……？」

策に掛かり軽く恥辱と羞恥に悶えていると、そんな俺を知らずか紫はそう言いながら、そつと右手を伸ばし、俺の頬に触れた

「^?」

そして、その細くて、汚れたことの知らないような綺麗な指と手の

ひらを使い、顎から頬にかけて、優しく撫でる

「…えつと…」

…で、俺はというと、どうしようも出来ずに紫を見たまま固まっていた

なんかいきなり積極的になってきてないか？というかそんなに俺を虐めて楽しいのか！？

「……………フフ」

悔しい…でも（ビクンビクン  
ってこんな気分なんだな…

こんな所で知ることになるとは思わなかったが…

「……………」

そんな風に必死に今起こっていることを脳内で整頓させていると、  
紫が徐々に距離を縮めていることに気が付いた

無駄に色っぽい微笑み方をしながら近付いてくる紫

どうするんだ俺…というか何をしたいの紫さん…

ついには紫の肩と俺の肩がくっつく程体が密着してしまった

そして俺の顔を撫でるのを止め、俺の肩に倒れ込むようにもたれ掛けた

「行くわ…」

「へ？あ、はい？」

「私もその旅ってやつに着いていくわ♪」

と、言って紫は嬉しそうに微笑み掛けてくる

「…あつ、はい…」



——そして…その返事に俺はただただ呆然としているだけだった…

—紫side—

「なら俺と一緒に来るか？」

彼は素っ気なくもどこか申し訳なさそうにも言った

「へ？」

私は咄嗟のことに思わず呆けた声を出してしまう

「も、もう一度言ってく、くれないかしら…？」

突然のことではよく分かっていなかった

一緒に来るか？

彼は確かにそう言った

私が彼の好いているということは彼が知るわけがない

私の秘めた思い…でも逆に彼が私のことをどう思っているか私は知らない…

「いやだから、一緒に来ないかって言っているんだが…」タナトスが少し戸惑いながら言う。私は…

「——ッ！？／／／／／」

ガバッ！

「お、おい…」

嬉しい気持ちもあったが恥ずかしくて思わず頭を抱え込むように、顔を隠してしまった

「お、おい…」

「……………」

マズイ…非常にマズイ…

思わず伏せてしまったけれど…さっきタナトスに言われた言葉によ  
ってこれでもかというくらい、顔が真っ赤だ

バレないようにスキマの能力を使い、タナトスを見る

「……………」

タナトスは考えるような仕草をしながらにじっとしていた

丁度いい。何か誤魔化す方法を今のうちに考えなければ…

あ、良いこと思い付いた♪

するとタナトスも何か思い付いたような顔をしたと思うと、そつと  
手を添えようと近づいてくる

もう少し…もう少し…

ゆゝつくりと、ゆゝつくりと触れようとしているのがわかる

まだ…まだよ…

まるで焦らされてるみたいで心臓の鼓動が早くなる

「紫大丈夫かあ…?」

今!

「ひゃい!？」

「のおっわッ!？」

ひゃいってなに…と後々になって思ったが、その反応にタナトスも驚き、声を上げた

「びっくり…したあ…」

呼吸をわざと荒らし、胸を押さえ、あたかも苦しいと言わんばかりの仕草をする

長いこと様々な相手と交渉や話をしてきた私にとって、演技なんて容易いことだ

「…はあ…はあ…どうした…の…?」

しかし、私がそう聞いた時にはタナトスの動きはそこで止まってしまった――

あ…あら…? バレてしまったのかしら…?

バレたかと不安になりながらも少しだけ近づいてみると、その予想が違っていたことに気が付いた

「タナトス…?」

――タナトスの顔が少しだけ赤くなっており、目は私の顔を捕らえていたのだ

その目は何処か見蕩れるように、しかしぼけーっと見るだけではな

く、タナトスの顔に手が触れると、なにか意識的に何かを感じ取ったような目で見てくる

…はぁ…そんな風に見られたら体が火照ってしまう

もっと見てほしい…

もっと感じていたい…

私をもっと見て…

タナトスにもっと見られたくて近付くとすると「うっ…」と小さく声を上げ顔を更に赤くさせた

そうやって人間らしい態度を見せるタナトスのリアクションが可愛いくて、可愛いくて、もう…

弄りたい…

いやもっと弄りたい！

彼が悶える姿をもっと見てみたい！！

そう思って近付こうとした途端彼は、

「あ！いや！お、俺は大丈夫だ！」

と言って距離を置かれてしまった

「紫のほ、方こそ大丈夫なのか！？」

彼は心配するように聞いてくる

ニィ…♪

彼は優しいから、また彼を弄る方法を思い付ちゃった♪

彼に気付かれないように能力を使い、顔の火照りを取り、何事もなかったのように振る舞う

「私？私は大丈夫よ？」

するとタナトスは私の顔を（。A。）みたいな顔で数秒間見つめたまま固まってしまった

ああもう！可愛い！折角だからこのまま私のペースに乗せちゃおう♪

「貴方こそ顔が真っ赤だったけど大丈夫なの？…♪」

「あ、いやそれは…」

タナトスは少し齒切れが悪そうに言ったあと顔を手で押さえつけてしまった



「やっと気がついたのね♪」

するとタナトスは顔を伏せたまま、こくつと小さく頷くとそのままで動かなくなってしまった

正確に言うもう少しだけ肩が小刻みに震えていたんだけどね

フフフ…♪ああ…楽しくて仕方がないわ♪

「可愛かったわよ？顔真っ赤にさせて…フフ」

正直にそのことを伝えると更に彼は顔を隠してしまった

だが妖怪の性分なのか、彼へのいたずら心が疼いている頃にはもう勝手に手が動いていた

「フフ…こういう事になれてないのかしら…？」

「へ？」

彼の顔を持ち上げながら、頬に手をやる

彼の肌に触ると同時に私はあることに気が付いた

彼の肌、…いや肌というよりも体温が…

異様に冷たかったのだ

まるでそう、死体のような…下手したら生き物ではないんじゃないかと思うくらい冷たかったのだ

…ああ…そうね…そうだったわ……どうして冷たいかわかったわ…

——彼は死神だったんだ…

死神というのは神というよりも、幽霊や死人に近い存在だと私は思っている

元々生物が地上に生まれなければ生と死なんて物はいらなかった

でも、その生き物…人間や動物が生まれたことによって結果的には死というものが生まれた

そして、死んだ者をそのままにしておく訳にもいかなかったのだろう…、ついには死人が死神になり、次に死んでいった者を行くべき場所へ導く者になったと…まあ…ちよつと宗教じみてるが、これが私の推測だ

でも実際、死人に同情出来る者なんて…、

――死人にしかないじゃない……――

「……………」

そんなの風に思いながら彼の顔を触る

タナトスも大人しくして抵抗せずに固まったままだ

「……………」

しかしいくら彼を擦ってみたところで彼は冷たいまま  
温かくなる気配はいっこうにない

でも

…彼の思いが温かったことはしっかり覚えている――

私の夢を馬鹿にもせずに協力をすると言ってくれたし、今日に至っては新しい協力者を紹介してくれて…

それに、こうやってタナトスと居るだけでも私の心は十分に休まるからね♪

その後、何秒か頬を撫で、彼の頬から手を離す

そして、彼が小さくビクッと震えたがそんなことを気にしないで、私は彼にもたれ掛かる

少しだけ沈黙が流れると、私は口を開いた

「行くわ…」

「へ？あ、はい？」

「その旅ってやつに私も着いていくわ♪」

彼に優しい微笑み掛ける

その彼は、驚いた顔をした後「…あつ、はい…」と小さく呟くように言った

…これから楽しくなるわよ♪…フフ…フフフフフフフフ…♪

—紫side—

## 乙女は夢見がち（後書き）

ゆかりーんりーんもとい、次回！！  
ゆかりんとあんな事やこんな事までしちゃうお色気道中編、始まる  
よ！（大嘘）

**悪魔的に旨めえ物（の親類（前書き））**

文才無いのに肉弾戦はすらすら書ける不思議



## 悪魔的に旨めえ物（の親類

「鬼…？ 鬼…鬼…お、鬼？」

「何回も言わなくて良いわよ…あとなんで何回も言ったの…」

俺がそう言っていると紫は力無く突っ込んだ

どうも、恒例のタナトスです

ただ今、鬼たちが住む山付近の上空を紫と一緒に飛んでおります

「だって鬼になんて初めて会うし…」

「いや関係無いと思うんだけど…」

鬼と言えば『星熊勇義』に『伊吹萃香』の二人と交友関係を築く為に来たのだが…

「…まあそんなことは気にしないとして…行きましようか!？」

「…本当に行く気なの？」

「ここまで来たんだし今更言われてもなあ…」

紫は鬼と会うことをなぜか拒否してるようで、軽く渋っていたのだ

「わかってるのあなた？ 鬼って純粹に強い上に生粹の戦闘馬鹿だから、喧嘩でも売られてもしたらめんどくさいことになるわよ」

な…るほど、だから鬼と会うのを渋ってたのね

「なら俺が戦えばいいじゃねえか。それに上手くいけばお前の…その…なんだ？ 夢の国？ まあ夢の世界の住人にできるかもしれないメリットもあるじゃねえか」

「私的にはデメリットになる気がするわ…」

そう最後まで渋りながらも紫と俺は山に降りていったのだった

「誰だお前ら」

「ほらさっそく第一村人発見したぞ」

山に降りて、少し頂上に向かって登っていると、丁度良い具合に鬼っぽいやつを見つけた

「私達が『見つかった』の間違いじゃない？」

「…そこはどうでもいいだろう」

「まあそうね」

「話聞けよ…」

「しかしよ、鬼ってもっとゴツいの想像してたんだけど意外にひょういな。それにあんまり肌も赤くないし」

「でも力は相当な筈よ？」

「大丈夫、紫は心配し過ぎだ。それとも何か？それほど俺に何かあると嫌なのか？」

「…べ…べつに……」

「なぜそこで俯く…」

「イチャイチャしないで話聞けよお!!?」

「おーうすまない鬼の者。で、なんの話だったけ? あと言っとくが別にイチャイチャしてないぞ。なにか勘違いしているな」

「黙れ!! お前達は何者だって言っているんだよッ!? さっさと言え!! 言わなかったら殺すぞ!!」

なぜか気性の荒い鬼くん（赤）

「俺達? あんまり詳しくは言えないがあんたらの大將にとりあえず会わせてもらえないか? その時に俺達の自己紹介をしよう」

――内緒モード（心の通信）――

紫「本当いつも堂々としてるわね…（そういう所嫌いじゃないけどね…）…でも無理じゃない? 流石に」

タ「大丈夫だって言っただろ? 俺には秘策があるんだ」

紫「秘策?」

タ「そう、秘策だ」

――内緒モード終わり――

「馬鹿が！！自分の正体も教えねえやつなんかに、俺達の勇義姐さんを会わせる訳ねえーだろ！！」

「ダメじゃない……」

「まあ待て…酒持ってるけどいらんのか？」

「よし、こっちだ着いてこい」

「な？言っただろ？」

「……………」

ポカーンとする紫を見ながら俺は鬼に着いていった

「おう！私が四天王の一人の星熊勇義と！」

「伊吹萃香だ！」

鬼達の住み処になってる山の無駄に広ーい頂上に着くと、ようじやなくて頭に二本の捻れたような角を生やし、自分と同じぐらいの瓢箪を軽々と持っている『伊吹萃香』と、紅い角と杯を持った、上半身体操服の『星熊勇義』が屈曲な鬼達に囲まれるように座っていた

「で、あんたらはなんの用で来たんだい？」

警戒心がないのか手に持った大きな盃の酒を煽りながら言う勇義

ここで下手に変なことを言ってしまうなら、嘘が嫌いな鬼達がなにをしでかすか分からない

ということ、ここは正直に考えていたことを話す

「特に意味はないんだが、鬼と交友関係にでもなりたいたいと思って立ち寄ったんだ」

すると勇義はほう…と意外だと言わんばかりのに声を漏らした

「…鬼と仲良くなりたいなんてアンタ変わっているなあ？」

更に萃香も少し驚くように言ってくる

「よく言われるよ」

「でもさ、アンタ見た通り人間じゃないみたいだけど何者なの？」

「ああ、言ってなかったな。俺は死神のタナトスという。んでこっち…」

「スキマ妖怪の八雲紫よ」

そんな感じで自己紹介をすると、周りにいた鬼達がどよめいた

「へえ〜！…神と妖怪ね〜…変わった組合せじゃないか」

勇義もそのことに興味を示したのか、好奇の目で俺と紫をジロジロと見てくる

「なに？神と妖怪の駆け落ちかなんかなの？」

という萃香は、ニヤニヤと違う好奇の目で見ていた

どうしてそういう考えになる…あと紫は顔上げなさい……あんなこと真に受けるなって…

「…ま、まあそこは置いといてとにかくどうするんだ？」

「あ？ああ！交友関係の話しかい？別に私はどっちでも良いんだけどねえ！」

はっはっはつと豪快に笑い飛ばす勇義

鬼らしいと言いますか…なんて言うか…：実に悩み事とか無さそうだ…

「でも、それならわかってることがあるんじゃないか…？」  
そして、頬を付きながらニヤリと笑う勇義

「…酒だろ？」

「おお！そうだそうだ！持ってきてあるんだろう！？」  
酒の話に急に食い入る萃香

お前はどんだけ飲みたいんだよ…

「…はあ…ほらよ、まだ欲しいなら樽ごと作ってやる」

一同「「おおおーッ！！？」」「能力で六つ程、樽ごと酒を作り、ついでに酒の入った一升瓶を萃香に投げ渡すと同時に先ほどよりも鬼達が叫び声にも似た声を上げた

「酒だ酒だあー！！！」

「みんな酒だぞおー！！！」



「んぐっ…んぐっ…カァーッ!!こりゃ旨いッ!!…んぐっ…んぐっ…ぷはぁ…」

嬉しそうに焼酎をらっぱ飲みをする萃香とお祭り騒ぎで樽にがつくその他大勢の鬼

「そこまでのことなのか…」

萃香とか飲むのはいいのだが仕草がオッサンみたい、というか…オッサンまんまだ

色々と勿体無い

「す、萃香!次!次私だから!!」

勇義までもが俺の作った酒に夢中になってしまっている…

鬼達が無類の酒好きだと原作でもわかっていたが…ここまで来ると中毒じゃないのかと思ってしまうものだ…

「ぐくっ…ぐくっ…ぷはぁッ!!おお!!こりゃ旨いな!!」

という勇義は一升瓶の酒を一気に飲み干した

飲むの早いなあおい!

「はぁ…でもよお?」

「でも?」

「酒もだけどさあ…やつぱり喧嘩もだろッ!？」

空になった一升瓶をジャグリングをするように投げ回しながら言う  
と、勇義はそれを握り割り、勇ましく立ち上がった

瓶を握り割るって聞いたことないんだけど…

「で、どうするんだい？殺<sup>ヤ</sup>るのかい？殺<sup>ヤ</sup>らないのかい？」

…結局そうなるのね…

「ちよっ…ヒック!と!待ったああ!!やるな…ヒック!らあ…  
私も参加する…ヒック!よ!!」

すると樽の酒に夢中になっていた萃香が少し酒で服を濡らしながら  
も叫んだ

なあ…服透けてない…?

「神と戦えるなんてえ…ヒック!そうそお…の機会じゃない限り  
…ヒック!出来ないんだ!そりゃ…私もやる…ヒック!しかない  
よ!?!」

腕をブンブンと回す萃香の姿が少し可愛いと思ったがヒックヒック  
と酔いながら酒の臭いを撒き散らすせいで最早プラマイゼロ

いやむしろ、マイナスの残念な姿になっている

あとヒックヒック凄くうるさい

「…まあ萃香がそこまでやりたいなら…先譲るよ」

「おお…ヒック！ほんとか！！感謝するぞお…勇義い…！！くう  
ッ！神と…ヒック！戦えるなんてえ…たまんな…ヒック！ねえ…  
！！」

「…私は戦わないからね」

あ、そうッスか…

「制限時間は特に無し、能力の使用は可、得物無しで良いか？」

「おう！良いぞ！」

目の前で、酔いが覚めた萃香が軽い準備体操をしてるところを眺めながら言う

「でもアンタ、得物を持ってたみたいだけど良いのかい？」

「べつにこれは殺し合いじゃないし、それに殴り合いの方が好きだろ？」

友好関係を築く為に来たのに殺したら意味無いだろ…

それこそ 何 故 殺 し た になっってしまう

でも…鬼と言えど、今まではなかったが女性に手を上げるの気が引けるなあ…

そういえば地味に原作キャラと戦うのは今回が初めてになんだよね…まあそれがどうした、って話なんだけど…

「うーん…まあどっちでもいいや！」

「そうか」

「んっ…それじゃあ…やろうか」

腕を空に伸ばし、グッと体も引き延ばすと萃香はこちらを見据え、腰をゆっくり低めに下ろし、ガッシリと構える

「じゃあ行くぞ!!」

俺も適当に構えつつ、それに応えるべく地面を力強く蹴り、萃香に向かって跳んだ

―勇義 side―

萃香ならそれなりにイイ線に行くと思ったのだけどねえ…

「こりゃ参ったなあ…」と、あまり言わない弱音を呟きながらも、私は気持ちはこれまでに無いくらい高ぶりつつあった

私は様々なやつと戦ってきた

鬼退治とか言って戦いを挑んでくる人間や、私達の住む土地目当てで戦いを仕掛けてきた妖怪とか…

その戦いに私は幾度もなく答えて、幾度もなく…勝ってきた…

ドコオオ！！

あの神とか言ったやつが殴ったのか、地面が凄まじい音を発てて碎け、大きな穴が空く

「ほっ！？はっ！！よいしょっ！？」

萃香が変な声を出しながらアイツの次々と来る拳の雨を避けているが、正直限界にきているだろう

開始してから大体半刻、ずっとあんな調子だ

萃香のやつなら自ら攻撃を避けることをしないで、密と疎を操る能力で身体を霧状にし、避ける動作もせず一方的に攻撃できるのだが…

アイツにはそれが効かず、初っぱなから霧状になった萃香の顔面に、アイツの右手の拳が綺麗に決まったのだ

それから更に数十発程、萃香の胴や顔に拳が更に叩き込まれた

しかし、問題はそこじゃなかった

鬼の回復力なら、時間が経てばなんとかなるという思いもあったが、その思いはすぐに意味を無くしてしまった

「――くっ!？」

――殴られた所の傷や痣が一向に治癒しなかったからだ

ドスッ!

「ガハッ…!？」

ボカアアア…!!

「ああッー!!?」

胴を殴られ、近くにあった岩に、萃香は吹っ飛び叩き付けられる

予想外の出来事だったのだろうか、私の仲間達は思わず叫ぶ

「くはっ…」

臓物のどこかがやられたのか萃香が血を吐き出す

「…こりゃあ勝てないわ…降参するよ…私の負…け…だ…」

そう確かに言うのと岩にめり込んだ萃香はゆっくりと膝から崩れ落ちた…

「……………」

「……………」

少しの沈黙が流れる…

「ククッ………」

「アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！」その沈黙の中、私は堪えきれず思わず笑ってしまった

それに驚いたように神のアイツと妖怪の八雲がこちらを向いた

「ククッ…面白いじゃないか！！四天王の萃香をああも簡単に倒すなんて驚いたよ！！萃香が完全に遊ばれるなんて正直ビックリだ！ハッハッハッハッハッハッハッ！！！」

「…はあ………」

「…はい？」

仲間がやられて尚、笑う私を見て、呆れてるような声を出す八雲とポカーンと突っ立っているだけの神



だが、決してやられた萃香のことが可笑しくて笑っているわけではない

アイツと次戦えると思うと楽しくて、楽しくてしょうがないのだ

萃香の試合を見ていた時から、鬼特有の闘争本能が擦られて、疼いて、暴れまわって…にやけ顔がずっと止まらずにいた

「だからさあ…さっさとやろうじゃないか……なあ？」

――勇義 side――

「ハンデをやるよ！この杯の酒を溢すことが出来たらお前の勝ちだ！簡単だろう？」

と言ってニヤリと笑う勇義

「…いいのか？そんなハンデ与えて？」

「私が提案してるんだから良いに決まっているだろう？…って…ああん？」

だが勇義のニヤケ顔はその瞬間、驚愕の顔になった

「な？言ったら？良いのかって」

勇義は不思議そうに自分の手をヒラヒラさせて見ている

「あ？いつのまに？」

勇義がどうして心底不思議そうにしているのかというと、俺が勇義のあの大きな杯を一瞬で奪ったからである

「はい、これ宜しく。…勇義、そんなルールは要らない。こっちだって真面目なんだ」

勇義の杯を紫に渡しつつ勇義を見る

すると勇義は心底おかしいと言わんばかりの顔を見ると、

「真面目にやってるんだって、冗談呆れるねえ！アンタ…萃香との戦いの時全力出してなかっただろ？」

「やっぱりバレていたか…」

勇義の言うとおり、俺は萃香との戦いで本気は出していない。それどころか、能力に頼っていたのある

シンプルに説明すると、萃香のあのやっかいな密と疎を操る能力を

無効化する能力を、俺の【生】の能力で生み出し、どこかのウニ頭の男女平等パンチだけが取り柄の無能力高校生如く、殴り続けたという訳だ。

萃香もそれを殴られた瞬間俺の能力を悟ったのだろう…その後すぐに避けて転じて巨大化の隙を見計らっていたのだと思うが、俺も単純に巨大化という能力が、めんどくさかったので、殴り続けていたという訳でもある

「でもそのアンタの能力は私には効かないよ」

確かに勇義にこの『能力を無効化する能力』は効かない。

勇義の『怪力乱神を持つ程度の能力』は自身に効果を発揮する能力だ。しかし、それを無効化すると言うことは少し難しい作業になる。自身を身体能力を上げる魔法とか術式とかならなんとかできるのだが、勇義の場合はどちらかと言うと、生まれながら持った『才能』に近いのである。それに俺の能力を無効化する能力は【幻想壊し（イマジンブレイカー）】の劣化版みたいな物だ。

どうせ、勇義の能力を無効化した所で鬼特有の怪力で補ってしまうから、実質無効化の意味が無いのも確かである…。

…ましてやそれなら、弱体化させる方が早いくらいだ。

「ああ、その能力はもう使わないからいい…」

「ふーん」

「その代わり…」

ゆつくりと俺は構えの形に入る

「真剣勝負と行こうじゃないか…！」

何故かそこで勇義に驚いたような顔をされたが、すぐに真剣な顔になると勇義も構えた

「そうこなくっちゃあなあ！？」

と、言うと同時に先に動いたのは勇義だった

地面を強く蹴り、もうスピードで向かってくると勇義は俺の顔面にめがけて右手の拳を降り下ろしたが、俺はその拳をを左手で捕らえる。そして勇義の左の拳が繰る前に、俺も勇義の右の脇腹に回し蹴りを一発入れる。

「ガハッ…！？」

体勢的に少し力が入れ難かったが、勇義は軽く吹き飛ばされると、空中で体勢を整え、足で地面を軽く削りながらも着地する

俺も勇義が着地をする瞬間にドラゴ○ボー○宜しく一瞬で移動し、勇義の後ろにまわり、もう一発蹴りを入れる

「勇義！後r「グッ…！？」」勇義イイッ！？」

いつの間にか復活していた萃香の声も間に合わず、吹っ飛ばされる勇義。

そして、とどめと言わんばかりに吹っ飛ばされる勇義に一瞬で近づき、腹に拳を降り下ろそうとした瞬間、勇義の右手が光り、熱源を持った弾幕が俺の顔面に放たれた

顔が半分程消えたが、痛みはないので、そんなことは関係無しに、俺も腕を降り下ろし

ドコオオオ!!

激しい音を発て、地面に拳ごと勇義を叩き付ける

「ガ……ッ!？」

流石に少しやり過ぎたかと思ったが、その刹那、俺の腹辺りに鋭い一撃が入り、軽く体が浮くと、更に俺の背中に勇義の組んだ腕が降り下ろされた。

「クッ……!？」

とっさに両手両足を地面に着け、地面との直撃を免れると、その状態から背中の八つの棺桶の先を上空の勇義に向け、レーザー状の弾幕を放つ

「——ッ!？」

勇義はそれを体を回転させ避けると、軽く音を発て、地面に足をめり込ませながら着地した

「はぁ…はぁ…アンタやるね…」

「鬼に誉められるなんて光栄だね。お前も相当やるな」

俺も立ち上がり勇義に言う

「私も神に誉められて光栄だよ…」

ほくそ笑みを浮かべる勇義

…それなりにダメージは与えれた

だが、まだ余裕はあるみたいだな…

「それじゃあ次は俺から行かせてもらおうぞ」

今度は俺が勇義に向かって跳ぶ。

顔を狙うのは少々難しいから確実にダメージを与えられる場所でないければならない。

…ならば狙う場所は胴。一番狙い易い場所だ。

右手に拳を作り、更に霊力を込める。

俺がよく使う魔力でも良いのだが、妖力と相反する霊力の方が鬼の勇義にダメージを与えられるからだ。

そして、霊力で覆った拳を勇義に向かって振り抜く。

——しかし、俺の拳は勇義は見事に捌かれ、左手で俺の右腕を掴み、両手で持ち直すと

「おりゃあああああッ！！！」

そして、勇義はそのまま俺をもの凄い勢いで竜巻如く振り回した

見事なジャイアントスイングである

「いッッけええええ！！！！」

その勢いが止まらないまま勇義は手を離し、俺は近くの岩に飛ばされ、

ドカァァァン！！

叩き付けられた。

ガラガラ…

俺を叩き付けられた岩は派手な音を発てて砕け、破片が俺に降り掛かる。

「…さっきのは流石に危なかったねえ…」

終わったかのように、ふう…と疲れたようすでため息をする勇義

「じゃなーい！！おいおいおい！まだ終わってないぞ？」

俺は瓦礫の山から這って出てくる

さっきの攻撃、普通の人間だったら粉碎骨折とかそんなレベルじゃないぞこれ

壁にぶつけられて、衝撃で潰れたおはぎみたいになるレベルだ

「…さっきから思うんだが…アンタ…私の攻撃効いているのかい？」

すると、勇義は起き上がる俺を見ると顔を引きつらせながら言ってきた

俺は身体中の埃を払いながら勇義の話を聞いて、言い放った

「ん？ああ、効いてない」

「やっぱりかい…」



そう言う勇義は力無く呆れながら構えを解いてしまった

別に【物理無効】のスキルを使っている訳ではないのだが、なぜか俺には他人からのダメージというのが全く効かない。

たぶん『死』の能力の影響だと思うのだが、ダメージが効かないこともあって昔から永琳がサンプルとか言って、冗談でも笑えないことをされてたし、肉体的な攻撃よりも精神的な愚痴、突っ込み、嫌味などなどを代わりに言ってくるから、あんまり感謝をしたことのない力でもある

「だからさあ、これぐらいにしない？」

「だがなあ…これじゃあ納得出来ん「酒を望むだけ作ってやろう」よし！やめるか！」

「「「ワァーッ！！！」」」

こうして俺達の死闘が終わり、鬼達の歓喜の雄叫びを上げる中…

「…これ…戦わなくても良かったんじゃない…？」

紫は…途方にくれていたのだった…

一時間後ぐらい…

「「「宴会だあああああ！！！！」」」

「やっぱりなんだな…」

あの死闘が終わったあと、他の鬼達が下準備していたようで、すぐに宴会が始まった

「まあ良いんじゃない？美味しいお酒が飲めるもの♪」

さっきまで微妙な顔をしていたのに酒が出てきた途端この調子のゆかりである

酒って偉大よねー…

「…ソウデスネー」

「む？なにその微妙そうな顔は？」

「いやあ…」

「それに貴方、お酒一滴も飲んでないじゃない！？」

「アハハハハ…」

思わず紫から目を背けてしまう

「貴方まさか…お酒飲めないの…？」

「そういう訳じゃないけど…」

「じゃあ何よ…」

「ないんだ…」

「え？」

「そもそも酒を飲んだことがないんだ…」

「え？…嘘…」

『えーマジ下戸！？キモーイ 飲酒が許されるのは二十才からだよねー キヤハハハハハ』

…みたいなことを思われたかもしれないが、それぐらい紫に驚愕の

顔をされた

二億だか三億だか何億生きたか憶えてないが、肉体を人間化出来たのは最近なので、その間全く酒を飲んだことがなかったのだ

「…はあ……」

「…ま、まあなんでも挑戦よ！」

「お、おう…」

なぜか紫に両手で拳を作りガッツだみたいな仕草で応援されているが…まあ…飲んでみようか…

コト……

酒の入った湯飲みを震える手でゆっくりと手に取る

「ぐくり…」

酒よりも先に唾が喉を通る…

「ええい!! ままよ!!」

湯飲みの酒を一気に飲み干す

「ぐくっ…ぐくっ…」

「良い飲みっぷりよぉ♪」

横で紫が煽ってくるが気にせず飲み干す

「ごくっ……はぁ……」

アルコールで少し口と喉に違和感が残る

「どう？味は？」

顔を赤くさせた紫が顔を覗かせる

「出来れば二度と飲みたくないね……」

さっきの酒が偉大だって話は訂正する

飲みたい人は勝手に飲んでくれ：原作が始まる前に慣れなきゃいけないのかなぁ：これ：

「おうおうおう！！仲良く飲んでるじゃないか？あぁん？」

軽くぐったりしている俺に、素早さと回避力が下がってしまうような酒臭さを口から撒き散らしながら少々気にかかることを言いながらも勇義が絡んで来た

「うるせえなもう！！アギラオ！！」

軽く勇義の発言がイラッと来たのでアギラオをかましてやるが、普通に通じられた：

「おおっ！？アツッ！？服に火付いた！？萃香水！水！」

「ほいよ」

バシヤ！！

「萃香！これ水じゃない！！酒だ！！」

「おー！！良いぞ！！もつとやれやれ！！」

「ガハハハッ！！」

「萃香酒無駄にするなよー？」

「「アツハッハッ！！」」

数時間後…

パチパチ…

ギギギ…バタン！！！！

「…なあ…どうしてこうなったんだ…？」

隣にいる紫に聞く

「水持ってこい水うーッ！！早く持ってこおおおおい！！！」

「早くしろお！！酒が燃えるぞオオオオッ！！！」

ゴオオオオオオオ！！

「炎が更に強くなったぞオオオオ！！？」

「さあな…」

「なんでかしらね…」

「うう…ん…もう飲めない…むにゃむにゃ…」

目の前の真っ赤な光景を顔と髪の毛を炭で黒くした勇義と、酔いの覚めた様子の紫と並んで、俺は寝ている萃香を肩に抱えながらただ呆然と眺めていた

「炎は後回しだ！！酒を出来るだけ取って来オオオオい！！！！」  
その真っ赤な光景は勢いを止めないとばかりに建物を包み込む  
そして、それに勇ましい姿で炎に突っ込んでいく

アルコールだもの…そりゃ引火するわな…





**悪魔的に旨めえ物（の親類（後書き））**

勇「…ハッ！！そ、そうだ！？」

タ「どうしたあゝ…勇義？」

勇「良いことを思い付いたんだ…」

タ「良いこと…？」

勇「新築祝いにまた酒が飲めるぞ！？」

タ「結局は飲みたいだけかよ！？」

## テーブルゲームは将棋派（前書き）

作品を書いてる時に口内炎と喉を痛めた首凝りです

とりあえず新作なのでどうぞ

## テーブルゲームは将棋派

「んぐぐぐ…」

「♪最後にここに置いて…つと…♪はいっ 私の勝ちい♪」

「うおおおおお!!? また負けたああッ!?!」

「ZZZZZZ…」

どうも、タナトスです

ただ今鬼達の屋敷におります

あの一夜の大惨事後、俺は住み処を燃やした責任ということで、燃えた酒の代わりの用意と、全焼した住み処の修繕をやらされました

一人で：

理不尽だよね：

まあ責任は俺にあるから、どうせやるならとことんやってやろうじやないかと思ひ能力の使用（乱用）によって言われていた酒の倍を作り、住み処も前の屋敷の数倍の大きさのやつに作り替えてやったフーハハハアー！！俺にとっちゃあこんなの朝飯前を通り越して昨晚の夕飯前だぜえー！！

んで、今はその作り替えた鬼の屋敷にどうせ作っただし折角だから泊まろうぜ？ということ友達の家感覚で泊まらしてもらっている

ちなみに今日でお泊まり七日目である

鬼の寛容さに感謝するばかりだ

「もう一度しましょ？」

紫が綺麗に並べられた白黒の石を集めながら俺ににこやかに言う

「もう勘弁して下さい…」

「ええ〜！やめちゃうの〜？」

すると、ゆかりんは駄々を捏るようにヤダヤダと言いながら体を振るわす

ここで仕草がBBA臭いとか言ったらどうなるか気になるが、自分の安否の為に言わないでおう…

…それと、その仕草によって二つの大きな萃kじゃなくてスイカがぱっくりと開いた服から胸元が見えるせいで非常に目のやり場に困る……非常に…困る…

「さあさあ♪早くやりましょ♪…ね？」

紫が楽しそうに俺の服の袖を引っ張りながら、呼び掛けくる

しかし…まあ…

…なぜオセロなんだ…

「はあ…わかった…わかったから…」

仕方ないと軽いため息をつきながらも、これでたぶん三十回目になるうとするオセロの黒と白の石に手を伸ばそうとしたその時、

ダダダダダッ！！

ガラッ！！

「はっ…はあ……んっ…はあ…はあ…」

あの年中飲んだくれている萃香とは思えない程慌てた様子で、襖が壊れるんじゃないかと思うくらいの勢いで開かれた

「…ど、どうした？」

「…んあゝ…萃香あ？どうかしたのか…？」

戸惑いながらも萃香に聞くと、今までずっと昼寝をしていた勇義も少し気だるそうに起き、萃香に豪快にあくびをしながら尋ねた

「…はっ…はあ…き、きっちゃんが……！」

「…あ？…きっちゃんがどうかしたんか…？」

き…きっちゃん…？一体誰だ？原作にはいないが…勇義の仲間か？

俺がそんなことを考えていると、萃香は呼吸を落ち着かせ、少し不安そうな顔とわなわなとした震える唇を動かして口を開いた

「き、きっちゃんが、——死んだ…」

「なッ——、





そう言うとき萃香は今にも泣きだしそうな顔をして頷いた

少しその表情が可愛らしいと思ってしまったのは仕方がない、うん仕方がない

萃香や勇義達と言う、きつちゃんという人物は、日本三大悪妖怪の酒吞童子（萃香）の部下である『茨木童子』あるのだった

ちなみに日本三大妖怪（悪の付かない妖怪）は鬼、天狗、河童らしい

「しかし…あのきつちゃんが人間に倒されるなんてな…」

下唇をぐつと噛み、崩した足を小刻みに揺らして苛立ちを隠せずにいる勇義

その表情には苛立ちとともにどこか悲しみの感情も出ていた

「…ごめん…ちょっと出掛けてくる……」

すると、その沈黙の中で萃香がふらふらとよろめきながらも立ち上がった

「おい、どこに行くんだ」

「別に…」

振り返りもせずに素っ気なく言う萃香

「やり返しに行くとか馬鹿なこと考えているかしら？」

萃香が紫の言葉にピクツと身体を反応したと思うと、突風が起こるんじゃないかと思わせるくらいの勢いで紫に振り向く

振り向いた萃香の目は仲間を殺された怒りからか、睨むような鋭い視線になって、更には猛獣が牙を剥くように、大きく口を開き言い放った

「うるさいッッッ！！きっちゃん殺されたんだッ！！こんな所でうじうじしてるくらいなら私は馬鹿だってなんだっていいッ！！」

鬼のような形相をしている萃香から吐き出された言葉は、仲間への深い信頼の思いと、人間への激しい憎悪…

その物だった

「なにする気なの？」

それとは対照的に紫が落ち着いた様子で聞く

「決まってるッ!!…人間達を…全滅させるまで千切ってッ!踏み潰してッ!!殺し尽くしてやる!!!」

けたましく吠える萃香

「そう…でもそれって仇討ちじゃなくてただの八つ当たりだと思うけど?」

「なッ!?…う、うるさあいッ!!」

更に紫の発言が癪に触ったのか、萃香は威嚇をするか如く妖力と殺気を放ちながらもその表情と力が激しいものへと変わっていく

「違うかしら?」だが、紫もそんな殺気が立ち込める中、なんとも涼しい顔で悠長に勇義に問い掛ける

「…クッ…確かに八つ当たりかもね…」

紫の悠然した態度に折れたのか萃香が呆れたように答える  
それと同様、放たれていた妖力も収まっていた

「…だけどね…私達鬼にだって心ってものがあるんだよッ!!仲間がおめおめと殺されて気が立たないでいられる訳ないだろう!?!」

「一つ聞いていいかしら?」

「…なんだ」

一方で整然と落ち着いて座っている勇義に、紫が何かを考えているようにしながらも尋ねる

「…確か貴女の仲間のきっちゃんは人間の策に掛かって倒されたのよね？」

「……ああ、そうだよ…」

「殺されたのはきっちゃんだけ？」

「いや、あいつの部下が何人か殺されてはいるが、部下の過半数は生き延びてる」

「…ということは…鬼達を討伐するのが目的じゃなくて、きっちゃん『だけ』を倒すのが目的だったのかしら…？」

口に手を押さえ意味深な顔付きで考え込む紫

なにか気に入らないことがあるだろうか？

「別におかしくないだろ？そのてんちゃんを倒せば、それなりに鬼の士気とかもろもろ下がるだろうし」

「…鬼達を酒で酔わせて寝ているところを襲ったのよ？それなら根絶やしに出来るじゃない」

「…確かにそうだな…そうだったらみんな殺されている筈だからな…」

勇義もふんふんと納得するように首を動かす

「これは…調べてみる価値があるわね…手伝ってよ？」

「しゃーないな」

紫が俺にそう言うとはくそ笑みを浮かる

その笑みは何か掴んだようで心底楽しそうだった

少女&神移動中…

「…随分とまあひでえ場所に着いたなあおい…」

その後、速攻紫にスキマ送りされ飛ばされた

着いた場所はとても薄暗く蠟燭の火がぼんやりと見える程度で、辺りは土臭いにおいと煙のような埃のにおいが漂ってるだけだった

「手がかりになりそうな場所に移動したつもりだけど…牢獄にしては随分とおっかないところね…」

紫が言う通り、よく見回してみると、錆が所々にある鉄檻には封印か、破邪の類いのだろうか、大量の御札がそこかしこにビッシリと張り付けてある

「……誰だ」

すると、力の無い声とじゃらじゃらと鎖が揺れるような音が後ろの鉄格子から聞こえた

振り返ると、そこには

「そういうことか…」

手足に御札が貼られた頑丈そうな拘束具を取り付けられ、唯一身体に巻き付けてあるボロボロの布切れにも御札が貼られており、それ

どころか、素肌も顔さえも隠れてしまうくらい大量に御札が貼りつけられた狐のような耳が頭から生えた金髪の女がいた

「貴女は…だれ？」

紫がそつと檻に近付き言う

「名乗る程の名前などない」

女はそんなふうに言うとは機嫌が悪そうにそつぽを向いてしまう

「お前…玉藻前だろ？」

「…………ッ!？」

俺がそう言うのと、女はそつぽを向いたままなぜわかったと言わんばかりに声を漏らした

「じゃあここは洛中の地下ってことか」

「正解♪」

紫が嬉しそうにニコニコしているがとりあえず気にしない  
無視だ無視

「ええー…無視？」

そう言ったムツとした顔をした紫が近付く

無視したのは悪いかもしれないが、人前で頭を撫でるのはよしてくれ

「…………ツ」

そんな風に紫から一方的にイチヤイチャされると金髪の女が恨めし  
そうに睨んできた

なぜ恨めしそう？

「そうだ…私はこの都で玉藻前と呼ばれていた女だ」  
俺達を恨めしそうに見つつも女は口を開いた

「やっぱりか…」

「玉藻前って…確か天下一の美女とか賢女とか言われてる女性よね  
？」

紫の言う通り玉藻前と言われていた女性は伝説の絶世の美女と評さ  
れた女性だ

「そうだ…だが私は…」

しかし、実際は絶世の美女…と、そんな綺麗なものではなく、国を  
破滅させようとした大妖怪であり、白面金毛九尾の狐や尾裂狐など  
呼ばれていた通称『九尾の狐』と言われている、酒吞童子と同じく  
日本三大悪妖怪の一人なのだ



「妖怪、ね……ならなぜ妖怪の貴女が洛中のこんなところに居るの？」

「……………」

紫に聞かれると金髪の女は黙ってうつ向いた

「…私は上皇に仕えていた…」 そうすると金髪の女はぼつりぼつりと呟くように話し始めた

「私はこの通り妖怪の身だが…人間の言う愛…というのを知りたかったんだ…」

「…その為に私は人間に化けて色んな人間と関わり愛というのをこの身に受け、私もそれに素直に答えた……けれど…本性が妖怪だと明かされると今まで私に好意と熱を帯びた目で見ていた者の目が、妖怪への侮蔑と恐怖の目に変わってしまった」

「私はッ!!…ただ愛を…愛を…知りたかっただけなのに…」

「……人間とは残酷な物だ…自分と違う者や恐怖の対象とわかると容赦なく襲ってくる……そんなことを繰り返す内にその行為は国さえ傾けてしまう程の物になってしまっていた……そして、この国でも中途半端に愛を受けて……その思いは碎け散った…」

「そして今はこの様だ…」

「……………」

御札で表情は読み取れないが、口調から彼女の悲しみと憎しみが漂ってくる

「…逃げないのか？」

女に聞くと、彼女はフツ…と力無く鼻で笑った

「逃げてもいいが、この御札のせいでウンともスンともいかないんだよ」

腕にされた拘束具を俺と紫に見せるように小さく掲げる

その拘束具は御札がビッシリと貼られてあった

「タナトス」

「おk」

紫に言われて格子の扉の前にスタスタと近づくと、そのまま扉を蹴り飛ばす

ゴシカアアアン！

鉄で出来た扉が壁にぶつかり派手な金属音を発して地面に落ちる

「なッ：札の結界があつた筈だが…」

「結界なんても俺には効かん。ましてや破邪の類いなら尚更だ」

「は、はあ…」

呆れ声にも似た声を出す金髪の女

そんな規格外なことじゃないと思うけど？

「で、貴女は逃げたいの？逃げたくないの？」

と、彼女に聞きながら檻の中に入り、女にゆっくりとした歩調で近づく

そう聞かれると女は紫を一瞬見据えたあと、一端顔を下に向け考えるような仕草をした

そして、もう一度紫に顔を向けると口を開いてこう言った

「…………逃げたくない」

「……どうしてかしら？」紫は女のその答えに眉をひそめ、少しだけ顔を歪めると間を置いて尋ねた

「逃げたところでなにも無いからだ……愛なんて私にとっては……もう……幻に過ぎない……」

「幻ね……」

女の言葉に紫はボソツと悲しそうに呟く

紫がどう思っているかはわからないが、俺は紫と彼女がどこことなく似ている、そんな気がした

「なら貴女なのぞみが幻なら、私のぞみをなんて幻想その物よ」

「……どうということだ？」

彼女が不思議そうに紫の顔を見て聞く

すると紫は彼女を一瞥したあと口元を小さく笑うように緩めると楽しそうに彼女に言った

「……貴女は限りなく純粋で無知な愛を唄った……だったら私は、深くても何もかも呑み込むような優しさを唄っているだけに過ぎないわ」

「優しさ……?」

「そう優しさよ、まあ私のぞみは優しさだけで成就するものじゃ

あないけどね」

「……………」

途端に黙り込んでしまった彼女を尻目にきびを返すように扉をくぐり、さっさと檻から出ていく紫

「さ、戻るとしm「…まッ！待った！」…どうしたのかしら？」

紫に言われるまま俺も檻から出ていこうとしたその時彼女が叫んだ

「……………」

「なにか用かしら？」

彼女の顔を覗くように聞く紫

彼女も顔を上げ、なにか決めたような眼差しで紫をキッと、見ると

「…やっぱり私行きます。…私ののぞみ…貴女に賭けてみたいですから」

と、今までとは違う丁寧な口調になったがその言葉には芯のあり、力が感じるような声になっていた

「そう、なら私に着いてくることね♪」

それに対して紫はまた楽しそうな口調で微笑み掛けると、近い未来  
紫の式神になるであろう彼女に：言ったのだった

## テーブルゲームは将棋派（後書き）

文才と語彙力が無いなあ…と思う日々…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9245s/>

---

東方死神録

2011年12月8日08時48分発行